

岳 山

年 七 十 第
號 一 第

會 告

一、御送金に對しては振替傳票着後遅くとも一週間以内には受領證差出すことに相成居候へば、必要の時日を經過するも受領證を入手せられざる向は念の爲必ず御照會有之度候。

一、返信を要せらるゝ本會宛の御照會は必ず返信料を添えて申越され度候。

一、宿所變更の節は速かに事務所宛御通知相成度候。

一、會員にして不幸死亡せらるゝことあるも其家族等よりして通知せられざる向も有之候に付御心付きの方より御一報被下ば幸甚に存じ候。

一、事務所移轉に際し混雜に紛れ會務に手落無之を保し難く候へば御氣付の點に關しては御照會を賜はり度候。

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會會計取扱所

振替口座東京四八二九番

大正十年度會計報告

收入の部

繰越(大正九年度より)

一五四七・九一五

會 費	一八二八・〇〇〇
入 會 金	一八五・〇〇〇
雜 收 入	二〇三・六九〇
寄 附 金	一〇〇・四・一〇〇
計	五一二三・〇〇五

支出の部

基本金へ繰込	六一五・一〇〇
雜誌製作費	九七一・五五〇
集 會 費	一二八・二五〇
事 務 費	五二五・一一〇
計	二二三九・八一〇

差引十二月卅一日現在高 二八八三・一九五

右は大正十一年度會計に繰込む事とす

但雜收入は小集會々費、諸手數及預金利子等を含むものにして、事務費中には事務所費、編輯費、原稿料、郵税、集金費用等を含むものとす

右之通 會計 梅 澤 親 光

以上を帳簿と照して正しき事を承認す

庶務 高頭仁兵衛

山 岳

第十七年第一號

大正十二年七月發行

目 次

神流川雜記

南國の山

北上山地の旅

吉岡八二郎……………一頁

武田信……………一〇

沼井鐵太郎……………三一

圖 版

○高山植物の花畑……………對頁

○立山室堂より見たる別山……………二四

○ブレバンより見たるモン・ブランの連嶺……………四〇

○瓜哇スンピン山……………五六

○瓜哇シンドロー山……………八〇

雜 錄

○船上談山(八代準)○平民詩に現れたる山岳趣味(山本徳三郎)○有峰のこと(冠松次郎)○白馬大雪溪(横山光太郎)○瓜哇登山の感想(武田信)○山岳及山湖と國立公園(山本)

雜 報

○常念坊の由來○長村角間の岩窟から大發見○槍の絶頂から二高生墜死す○三原山鳴動爆發○樽前山の大爆發○北海道の駒ヶ岳大爆發○登山新道○新に縣道となつた大きな登山路○山の物價

山岳圖書紹介

○スウイス日記○山岳美○一日二日山の旅
○會員通信

會 報

○第二十回小集會記事○第二十一回小集會記事○本會事務所の移轉に就て○會費拂込に對する注意○會務報告○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則抜萃○投稿規定

英 文 欄

卷末附録として英文欄を添へたり

(會員には別に大正十年度會計報告を添ふ)

神 流 川 雜 記

吉 岡 八 二 郎

「山岳」の奥上州號で高畑氏の神流川旅行記を拜見したが、余も氏に一月程遅れて、鬼石から水の美しさに誘はれて溪谷を溯り、濱平から三國峠を踰えて梓山に降つたから、同氏の記事を旅行前に拜見してあつたなら非常に益したことであつたらうと、今更遺憾に堪えないものがある。同氏の記事に見えないことで余が知り得た二三の事を書いて見る。後遊の士に對し或は幾分の参考ともなれば望外の仕合せである。

三 波 石

秩父の方面から杉嶺を北に降ると直に神流川を渡り、溪谷の入口に當る鬼石^{オニシ}町に著く。縣道の橋は架換中で一條の浅い瀬を假橋で渡る。左岸に露はれた岩角に撥ねられた早瀬が少し流を緩めて澱んで居る。余の通つた夕方、多勢の子供が遊び廻つて居るのを見ると其水の美しさ。上流の山紫水明の様が想はれて、其水源を訪ふことになつた。

齋藤竹堂の三馬川記は、鬼石に至り宿す、次日西して嶺を踰へ神奈川を得とあり、又茅株に至り導を倩ふとあるのを見ると、三馬川といふても神流川の三波石^{サンバイシ}の景色を見たものである。三波川は東御荷鉾山の北麓から發する小流であつて、鬼石町の西隣で神流川に合する。十石峠街道は鬼石橋で夫を越すのである。三波石の名勝は神流川に在るもので、鬼石橋から神流川の左岸に浴ふ縣道を進む一里、道が川と共に南から西へ急轉する邊りて、左に城ヶ峰道の垂橋を見る。小徑が岐れて河岸を下つて行く

處に、日本三體隨一藥石如來入口と刻んだ三尺程の碑石に並んで、指道標に名勝三波石上流二町と墨書してある。對岸の山端に武藏水電の小さな發電所が見える。此處から上流十二三町の間が三波石と稱せらるゝ景色である。兩岸の山が通り、削り成した翠崖の裾を白水が奮撃する處もあり、珠のやうな小礫を並べた積に瀬浪の騒ぐ處もある。岩は悉く秩父青石と呼ばれ、庭石として古來珍重せらるゝ青色の晶質剝岩であるから、流水に磨かれた膚滑かて頗る美しい。例に依り形に由つて種々の名が附してあるやうだが、石などはあるともなくとも、水白く巖青く叢樹翠である溪山の美に増減はない。六七月の頃は水眼鏡と長竿を携へ、禪一條の外丸裸の壯俊が終日瀬から瀬へと涉り、岩から岩へと跳ね越え、岩の鼻先に腹這ひになつて、丈も立たぬ澄み切つた水底に寝て居る（彼等はかくいふて居た）鮎を、細竿の穂先に取りつけた巧妙な罾ヅナに引括るのが熟れたものである。多きは一日に拾圓を稼ぐ折もあつて、一尾大約一寸當り拾錢位の相場であるが、全部鬼石藤岡邊で消費されて仕終うとか。

山中の關門

美原村の役場を過ぎて、更に一里許り行くと、一町足らずの隧道がある。山の上に琴平の小祠があるので、琴平隧道の名で通つて居る。三波石を過ぎてからは、谷間が開けて山も川も平凡になつたのが、此隧道をぬけて振りかへると河勢頓に一變し、兩岸の巖巖共に削剝されて、瞰上げ瞰下す絶壁となり、巖頭から斜めに枝を延べた赤松の風情と、蛙腰を纏ふ蘿の蔓長く垂れて碧い潭を掬ぶかとも見える嬌態とは、日毎に此處を往返する郵便夫の脚をさへ止めて、霧の纏れた岩の景色や霜に飽いた地の錦の彩りに思はず見惚れしむることもある程で、此關門あればこそ、此上流を上州の山中と呼ぶのであるとか。大體檜原の神、戸岩に似て規模の遙に大なるものであるが、之も亦た奥行短く、行客をして嘖といはせるに止まり、門の立派な割りに上流に格別の奇景もない。然し三波石に遊ぶ人は、一

歩を延ばして此門を潜り見るも強ち無駄にもなるまいか。

御 荷 鉾 山

高畑氏は西御荷鉾山に氣奈澤から登られたやうであるが、投石峠道は万場の數町下流の生利からも通じて居るのは、五萬分圖にもある通りで、縣道との分岐點に明治二十八年五月に建てた、御荷鉾山入口と刻んだ三尺程の標石が民家の横にある。余は序に東御荷鉾をも片づけやうと、西御荷鉾の頂上から投石峠に降り、其儘尾根傳ひに草間の路跡を手繰りながら小隆起を一つ越えろと共に徑も全く消えた頃から霧に巻かれ、頂上を斷念して再び峠まで戻り、南側の澤に降る地圖の點線路を搜して見たが、夏草いやが上にも茂つて胸を凌ぎ、無益の時間を費して漸く澤に降ると路跡を見出し、更に闊葉樹の林中まで來ると判然たる小徑がある。十町も降ると土よりも稜石の間から瘠桑が抽き出て居る畑などもある。地圖の入字のある附近には奇形の塊岩が突起して、榛名のツッラ巖の孫位のものもある。山中に敢て珍しいことともいへぬが、この邊にイハヒバが植え付けたかと思はれる程一面に簇生して居る處があつた。

瀧の不動といふのは裏見式の小瀑で、二三丈の小甍の中段瀑裏を潜つて遶する間口二間奥行三尺位の岩窟内に不動尊の小祠が鎮めてある。瀑の入口の處には九尺二間位の籠堂もある。後に聞くと東御荷鉾には此處から愛宕山を経て登るのが本道であるが、現在は登客も少いから路も荒れがちであるといふ。

榎 森 附 近

万場の西三十町、神川村營の發電所のある大井戸から、高鹽川に沿ひて一里ばかり溯ると榎森の山

村がある。此處から本澤を更に溯ると、兩側から肩に壓しかぶさるやうに怪岩が亂れ立ち、雜樹が物凄く茂つて居る中を小流が湍り落ちて来る。持倉に登りかけやうとする三四町手前で、右岸の小澤を傳ひ、荊を掻き分けて一町ばかりも入ると駒風瀑といふがある。高さ五丈位もあらう。平時は水量極めて少く、瀑壺も全く土砂で埋もれ盡し、狭い隈を掩ふて夏樹が枝を交はして居るから、恰も軒下から雨垂れを見上げるやうで、名稱の風雅なるに反して何の見處もないが、嚴冬一面に凍りついた時は一奇觀であるといふ。

瀑から少し戻り、左から来る小澤の右岸を傳ふ小徑を尾根の頭まで登ると、溪の對岸に屏立する峻しい岩壁が見える。天狗巖と呼び、鹽原の天狗巖に似たものである。容易く登り難い岩峰であるが、糸が多いので稀に攀づるものもあるとか。

樞森明神社の樞の大樹、赤久繩山のノウノ平、持倉の熊三サンの家に傳はる昔話など、怪奇な傳説が此小さい溪の奥に秘められて居る。持倉の部落は赤久繩山の南麓に在つて、多摩川奥の高畑に似た無暗と高い山の突鼻に十戸許り塊つて、浮世とかけ離れた風發露臥に暮す山村であるが、某といふ一戸は拾餘萬の富を擁し、川崎邊に多數の地所家屋を所有すると聞き、不思議ともいへぬが意外といふべきであつた。

旅 館

里程は村民などに聞くより地圖を検する方が遙に確であることを承知して居ながら、一寸と尋ねて見たいのが旅中の心理状態とでもいふのであらう。万場の旅宿山屋の店先に貼つてある近傍各地に到る里程表を見ると、

柏木へ一里

坂原へ三里

讓原へ五里

鬼石へ六里

藤岡へ九里
 魚尾へ二里
 新町へ十里
 神原へ三里
 兒玉へ九里
 相原へ一里
 乙母へ五里
 乙父へ六里
 平原へ三里強
 尾附へ三里半
 新羽へ四里強
 勝山へ四里強
 榎原へ七里
 保美濃原へ四里弱
 下吉田へ(土阪峠)五里
 寶土山驛へ(土阪峠)六里
 大日向へ(十石峠)十二里
 小鹿野へ(土阪峠)五里
 吉井へ(土阪峠)六里
 富岡(鹽澤峠)六里
 大宮へ(土阪峠)九里
 三峰へ(土阪峠)十三里
 妙義へ(鹽澤峠)九里
 磐戸へ(盤戸峠)八里半
 一宮へ(鹽澤峠)六里
 下仁田へ(杖立峠)七里

鬼石から万場まで六里間には泊るに堪えた旅宿もなかつたやうに思ふ。万場には山屋の外に猶一軒薬屋を兼營して居る家がある。此處から奥には神原に三國屋といふ小奇麗な家がある。檐端から叶山の怪容を指呼し得るのが無上の馳走である。新羽に三軒、勝山に一軒、共に設備の如何は未經驗であるが、風水の疲れを息めるには不足はないやうである。乙母にも二軒あるが奥の今井屋といふは勿論一泊に差支へない家であるに反し、取りつきの乙若屋といふに飛び込んだら不慮の災難である。余は門口に洋服姿の客が腰掛けて居たのを見てもかくと入り込むと、爐端に横坐りの中婆さん大喝一聲「こんな家でもよけれやお泊り、家ではオレ一人だよ」と岩をも劈く氣勢に面喰つた。此婆さん生來の大酒に亭主も愛想を盡かし、娘夫婦も逃げ出し、獨り残されたまゝで閉口もせず、宿屋もやれば養蠶もする働者で、酒の勢荒く客をも召使扱ひする位は平氣で、二階一杯に擴げた蠶の飼養から客の世話まで、口も手も間斷なしの大童で、山中として不足のいへぬ同宿者三人前の食膳を瞬く間に調理し朝立ちの辨當に海苔巻まで作つて呉れた活動振り鮮やかなものであつた。此女丈夫も曾て志賀阪峠で追剝に遭つた時は餘程恐しかつたと見え、話しながらも身震ひして居た。出立の際勘定となると「高いか知らんが一圓三十錢も置いてお呉れ！」。

鬼石から神流川溪谷に入り込むと、俗に山中と呼べる、程あつて、兩岸の山が直に川に迫り、山家の附近に間々掌大の平地を拓き、桑や野菜を植えた畑はあつても、全く水田を見ないのが、中流の新羽まで來ると、此處に初めて數頃の青々とした稻田が右岸に並んで、初夏には蛙が鳴いて居る。全溪谷中唯一の米産地である。東京近い五日市奥の南北秋川に沿ふた檜原一千戸が一粒の米を産しないのに較べて之も意外であつた。

乙母から白井までの間には旅店はない、白井は十石峠の登り口、河沿ひの坦路が盡さて急坂五六町を登つた山腹に巢喰ふ山村で、山市屋といふがある。十石峠の往來繁かつた頃は村も幾分繁昌して、此外にも一軒あつたと云ふが、今は廢業して居る。明治初年の事ではあるが、十石峠の殺人事件で一時評判となつた家であるとか、山市屋の庭先からは三國峠方面に亘り、幽麗を極むる遙黛疊翠を一望することが出来る。

濱平には高畑氏が詳しく記された高橋といふ鑛泉宿がある。家屋は甚だ陋狭であるが、宿主夫婦は親切者である。別けて主人は好人物である。鑛泉は治病の偉效ありといふが、沸かして浴するのであるから兎角汚れ易い。夏は寧ろ軒先の清流に漬る方が爽快であらう。

叶山

全溪中最も目に立つ形の山であるが、神原附近から仰いだ程に登つて面白い山でもなく、^{ガナクシ}頂上の眺望も狭いと聞いて無精を極めて仕舞つた。眺望の狭いのは標高が低いから止むを得ない。叶後からも瀨林からも判然たる登路があり、附近の小學生徒の遠足地の一つであるとか。全山石灰岩から成つて居るから、山中到る處水蝕に困る奇怪な岩壁に富み、叶後附近に在るものなどは仲々奇抜なものである。タトロ穴(案内の學童に従ふ)といふを初め大小の鐘乳洞も少くない。良質の氷州石を産する處

もある。小鹿野から志賀峠を経て、十石峠に亘る山中地溝帯の一例として、地質學上有名な處で、叶山の南麓には中世紀の化石を産する處もあると聞いて居る。

三國峠から兩神山に亘り、國境に沿ふ一帶の山峰は、標高の低い割合に山勢峭拔といふべきで、鬱葱たる密林に蔽はれて居るが、深く分け入つて見ると斷崖絶壁多く、兩神山などは其尤なるものである。赤岩峠とか志賀阪峠とか、一定の道路の外は人影のさすことも少い爲めか熊が多く、大正八年のこととか、叶後の學童が田ノ頭小學校からの歸途二頭の熊に出會ひ、驚いて引き返かへしたものの、子供心に歸宅したさの一念で、叶山を廻り三津川から瀨林に向ふ途中で勿論日は昏れ、里人に救はれはしたものの、親達が心配して搜索に來り、翌日に至り無事なことは知れたが、通學を妨ぐる熊は棄て、置けずと村中總掛りて狩り出し、二頭を撃ち止め一頭を逸したとか。余が兩神山に登つた時にも日向大谷近くに於てさへ、熊に襲はれた二三の信すべき話を聞いたことがある。

三 國 峠

余は當初本流を溯り、諏訪山の南側のブドウ澤から尾根を乗り越す點線路を傳ふて、乙父の西澤に降つて見る積りであつたが、幸い良案内者を得たので三國峠へ登つて仕終つた。神流川水源地を裏む處女林の幽麗なことは、高畑氏が巧に寫されて居る通りで、小倉山に亘り蜘蛛手に入り組んだ深い暗い溪を埋めて、容易く人の近づくことをさへ容さない密林は、麓は闊葉樹に富み、日當りは綠鮮かて、中照以上は森々たる針葉樹多く、青空に際立つて黛い。雲取山附近から大洞川の谷を觀た時のやうに、深山の氣が溪から峰まで瀾漫して、いひ難き壯麗を感じずる。未だ曾て丁々の響を知らなかつた此森林も、林區署で磐戸方面から濱平を経て神流川に沿ふ林道を築造中であるから、霧を蒸した千古の老幹が遠からず伐り拂はれて仕舞うだらう。

諏訪山の南側を繞る點線路のある澤がブドウ澤で、之も先までは覺束ないが、入口の處では路跡はある。其すぐ上流で左岸から落ち込むのが大蛇グラ澤と呼ばれ、一三七六の獨立標高點の在る峰の南を限る澤がミミツク澤である。其五六町上流で多野の兩字の間を流下するのが本谷で、此處にある點線路は現時全く藪に塞がれて溯行殆ど不可能であるやうだ。之と尾根を隔てたのがボウキリ澤である。此處までの路は全然地圖の點線通り（濱平から一里許りの間は、高畑氏の書かれた如く現時の路は地圖のものと少々異つて居る。）に川を渡りかへしつゝ流に沿ふて付いて居る。流は狭く岩傳ひに飛び越す程で、一二ヶ所小さな釜を作つて居る處もあるが淵といふ程のものはない。溪底が狭く、兩岸から斜めに差し出した梢が頭上で組み合ひ、空さへ礫々透けないから蒼味強い薄暗さで、空翠衣袂を染めて人面青しの氣味がある。岩も岬も穉で、滑べり落ちさうな危険な個處は一ヶ所あつたのみと記憶して居る。脚元は割合に穩かて、唯だ濕つた落葉の踏んでも音さへしないのも氣味悪い。何分にも溝の底を這ふやうなもので、一切左右の尾根頭も見えず、陰氣極る冷めたい谷風が時ならぬ落葉を盪かして靜に流れゆく時など、魍魎の息吹でも吸ふやうで氣が減入つて仕舞ふ。溪谷の面白いのは却つて板小屋澤の間で、其上流には取り立てゝいふべき處もない。三國峠へはボウキリ澤を登るので、本谷との落合から一町も上つた處に三四の巨岩が折重つて、少し空が開いて明るくなつて居る。初めて世の中に出たやうな氣がする。余は午前八時高橋方を立ち、途中下手な寫眞など弄び、道路小屋に休んだり、較や悠長な歩き方をして正午此落合に著いた。

ボウキリ澤の右岸に沿ひ、深い雜草に埋もれた纒に残る細徑を傳ひ溯ると、梅や唐檜の針葉樹が増して、紫杉なども混つて居る。丁度地圖の界線の邊りから澤と別れて、南西に尾根の横腹を登るので、溪底から這ひ出し、一步毎に視界が展開すると共に、亭々たる老幹の間を透かして、今まで潜つて來た深溪を覗き込むやうになり、陰凄な氣分がうすらひで、陽光豊かな活々した空氣が脚元まで漂ふて



影攝氏宮邦垣々野

(峰白) 畑花お物植山高

來る。登る程山膚が優しくなり、下生への薄い大木の根元を封じて、足觸りの柔かな厚い蒼苔が綻び目もなく敷き詰めた間を、細徑が縫ふて居る。目に立つ落葉さへなく、爪先に觸るゝ石塊もない。大空を斜めに區切つて下向きに延びた枝からは、麩々たるサルヲガセが長く垂れて、何處からともなく折々駒鳥の啼音が聞えて來る。生氣に満ちた峯吹く風が梢を鳴らす程にもなく靜に吹き渡る。見廻しても碧い空の外は、凝黛を盛つた溪と尾根ばかり、人間世を語るものとは煙一條見えぬ。幽にして雅、靜と動との間を逍遙ふやうな氣持ちのする處である。尾根の頭に取りつく邊りに石楠花が綻れ合つて居る。花の頃が偲ばれる。暫く尾根の背を辿り、上武の國境に突き當ると、良く踏めた一條の路に出る。前面に小神流川（大瀧村）の谷を隔て、兩神山の岩頂が見えて來る。此處から暫く坦らな尾根通りを十町近くも進むと、再び急な登りとなり、何やら闊葉樹の茂つた間を脱けると、忽然眼下に梓山の人家を望む。いふまでもなく三國峠である。峠から東方に立樹の斑らな巨岩の折り重つた間を攀ぢ登り、二つ目の隆起點に來ると三國山の一八二八米の三角點がある。

梅であつたと思ふが矮い古びた二三株が少し眺望を邪魔するのみで、岩上に伸び上がれば相當の視界を領し得るが、名勝辭典の三國山條下にあるやうに兩毛の平野などを望みやうはない。東方は赤岩峠から兩神山に限られて居る。此の方面から見えた兩神山は、之を東方から望むのに比して、一層山勢鋭く、岩骨稜々として見える。有名な直立千尺に近い大硯岩の岩壁が、ヒゴノタオの尾根越しに上半を深く見せて居る。眼を右に移すと長堤を築いて末下がり、に東西に連つた十文字峠の一脈は、深く中津川谷に落ち込む横腹一面鶉の毛で突いた程の隙もないといふ密林の黒さ、あれを栃本まで傳ふのでは七里といはれる峠路は長い筈だとうなづかれる。甲信境に蟠居する秩父奥の群雄の壯大はいふまでもない。朝日岳北裏の一里に亙るといはれるガレが一際目に立つ。小川山が無暗と大きく、大金宇形が西南一面を領し、金峯山との間が非常に切れ込み、全然離れて駢立するやうに見える。西方は生憎

薄霧に妨げられ、此附近で一つ残つて居る蟻ヶ峠の三角櫓が手近く見えたのみで、小倉山が軽く浮いて居るのを透かし得たのみであつた。

峠から中津川に降る道は、曾て木暮氏が通られた記事を拜見したが、随分長い下りであるらしく想はれた。此峠附近は中津川谷から下駄材を運び出す爲めに近頃まで通行が繁かつたので、路が割合に良く踏めて居るとか聞いたが、峠から梓山までの路は、峠からも夫と判じ得る程の明瞭さである。濱平からボツキリ澤までは本年中に林道が全部完成して、夜でも平氣で通り得るやうになるであらうとのことであつた。若し三國峠を越えやうとする方があらば、同じことでも神流川の溪へ這ひ込むよりも、溪から這ひ出る方が越さも深し時間も安全であるかと思ふ。

附記 三國峠を中心として神流川水源地に於ける一帯の山谷に委しい者は、白井や濱平邊にて俗御文サンで通つてゐる濱平の原直太郎(四十歳)であつて、體力強健性質も先づ善良な方であるから、後遊の諸君に推薦する次第である。

南 國 の 山

武 田 信

權威に傲り富貴に淫する人の世の榮華は、瞬間の夢利那の幻と消へ去るとも、聖く貴き藝術の寶土の榮へは、千年の悠遠を一塊の石に載せて、今猶南國の誇りと仰がる、ポロポドールの佛蹟や、ありし世の類廢淫蕩の氣分を著蒸す岩間に止めて居るジョクジャカルタ市の水城に纏る歴史は知らずとも、八重の潮路を遙々と漕ぎ分け歸る故國の人々、それに逢ひたる時の嬉しさは、別離の時の悲しさに依つて彌優れど、歸れば、復の便りのあるべしとも覺へぬ幸使に託して、纏綿の情緒を三千裡外の友に寄せたる、ジャガタラ文のある限り、汲めども盡せぬ詩の泉は其處に湧き、瓜哇刀ケリズを腰に櫻ならぬ金

色の日傘^{パネ}翳して、寛々悠々、三百年を暮し來つたススフーナン朝の大宮人の榮ゆる間は、世を擧る改造の雄叫も雲煙過眼に眺め過し、人々ひたぶるに古典的な情緒に浸り、長閑なる平安を味ひ得る南海の樂土瓜哇島こそは、數々のローマンスを傳へた物語りの島であると共に、野は花壇の如くに美しく耕されて、山は常盤の綠濃やかに、曉の霞や落日の雲の粧ひ、星影さやかに風香ばしき夕には、マラテの暗香浮動し、椰子の葉影黒く地に印して、バナナの大葉婆娑と搖ぎ、上天下地清涼の銀光に滲さるゝ良夜には、音色床敷竹琴の調べの嫋々と、灯影煙く木間より流れ出て、東洋のエデンとめてらるゝことの道理こそと首肯かるゝのである。春は隙亂の百花野に布き、秋は満山の霜葉錦を織り出す日本の風光に較べたならば、四六時中變らぬ眺めに、聊單調の恨みは在るにもせよ、南國特有の異なる勝景にまた捨て難い趣を藏した一島の風物を彌が上にも美しかれと點睛の役目を勤むるものを求めたならば、夫は椰子樹でもないタマリンドでもない、廣き裾野と高き頂と、紫紺の色眩き許りの山腹には白雲軽く搖曳する崇高秀麗なる山岳の景觀に外なるまい。スメロ山（三六七六米）を第一に推し、續くスラムツト、スンピン、アルジョナの雄峰は、惜しや熱帶圈内に位するが爲に、雪溪雪田の美を缺くとは云へ、其標高のみをとつて較べたならば、槍穂高白峰赤石の尤物をさへ墜若たらしむる程の傑物であり、端麗清楚典型的なる火山美を、漣波ヒタ／＼と汀に寄する瓜哇海の水に寫したチラマヤ山の優れた風姿の如きは、富士をして獨り其名を擅にせしめざるものがあらう。

まことや岫より出たる雲悠々と、印度洋の沖遠く落日を追ふて飛んで去り、豁達として打開けたる裾野には、綠圃黃田はもなく打續き、森嚴幽邃なる山腹の密林に、猿戯れ野猪遊び、人知れず珍奇なる花を咲く蘭花植物を藏する南國の高山は、怪奇的神秘的の想像をさへ逞ましうせしめて、好奇的情祝の的となり得ると共に、自然美を讃仰し山岳を愛好する程の人に取つては、これを熱國美の殿堂たるべしと仰ぎ眺めて、思慕憧憬の思を寄するも無理ならぬ程の美しさを其中に秘めてゐるのであ

る。瓜哇に遊びて此殿堂に上らなければ、未だ以て南國の自然を語り美を談ずべき資格はないと余は思ふ。然るに過去に於て此美の奥殿は、瓜哇に遊びだ總ての日本人から殆ど顧みられずして過ぎ來つた。在留の邦人は生活の戦闘に寧日なしと云ひ得やう。商用又は事業の視察に渡來したる人々の如きは、爲すべき仕事に追はれるものと察せらるゝ。乍併最近漸く其數を加へ來つた觀光探勝の漫遊客或は自然科學の研究者、例せば去年余がバンドン市在住の頃、蘭科植物研究の目的を以て渡南せられた相馬子爵の如き、又は三ヶ月に亘る長き暑中休暇を湘南あたりの別荘に、埒もなく暮し了る女性的な消夏法を陳套なりとし、有益にして趣味多き南洋旅行を思ひ立ち、渡瓜せられたとか傳聞した三井家の令息の如き、羈絆となるべき俗事の係累は更に無く、自然美を鑑賞する程の用意は豊なるべくして、而も其爲に必要とする時間と費用とは、毫も缺くる處ない筈の身分の人々までが、大自然の妙手に彫琢された一大藝術品として、地上の最も嘆美すべきものゝ一である此南國美の殿堂に詣づることなくして歸へられたらしいのは、研究家には完全を期し難い遺憾があり、探勝の旅客には折角の好企圖も佛造つて魂を入れぬ恨があらう。

今茲に其然る所以を陳べるまでもない。本誌第十五年第三號に掲載された拙文を讀むて下された方は、既に其理由を諒解して下された筈である。其後歸國までの乾期中に、豫定した山々の中、第一位のスメロ山と、瓜哇東端の雄峯ラオン山（三、三三二米）とを、準備不充分の爲に放棄した代りに他の二山を加へて、拾山登攀の計畫を不充分がらなし遂げた。其中九山までは日本人としては、余の登つたのが初であるらしく見受けられるので、其真相を同好の方々にお傳へして、金儲の南洋及ゴムと椰子の南洋にも、趣味と情操の上に築かれた別乾坤の存することを紹介するのは、潜越の嫌があるけれど、今日の處では余のみなし得べきことらしい。それ故再び本誌の一端を借りて、東部瓜哇の名山アルジョナ（三、三四三米）の紹介を試みる次第である。

瓜哇は未開野蠻な南洋諸島中の一であるから、今でも虎は野に吼へ蛇は澤邊にウヨ／＼して居さうに想像して來る不用意の旅行者にして、一度スラバヤ市を訪れたならば、その目まぐるしく忙しさうなのに吃驚するであらう。人口貳拾萬前後の都會に似もやらず、これ丈は多分現在でも東京を凌駕してゐるらしい數多の自動車と、其人力車總數にも匹敵するとか云ふ澤山の辻馬車とが、さらぬも廣からぬ商店街をいとど狹苦るしくして行交ふせはしなさと、路面に敷いたアスファルトも溶けよとデリ／＼灼きつく様な熱い陽光とに疲れ果てた身が、一度緑の色濃やかなタマリンドの並木の影に瀟洒たる白聖の洋館が立並んだ住宅街に入つたならば、蘇つた様な清々しさの身の内に流れるのを感じずであらう。そして若し其涼し氣な緑の葉影目も覺むる様な青々とした芝生の前庭に、水色や淡紅色やクリーム色などの柔かいサツパリした感じのする色彩の衣裳を纏ふた、金髪豊頬の人形其儘の愛らしい一群の子供達が、犬を對手に無邪氣に輕快に飛び廻つてゐるのを見出したならば、青葉を洩れ來る涼風と共に、商業街の熱鬧さは夢の如くに吹き抜けて、長閑な寛闊な氣分が、胸から頭へ浸み込むやうに覺ゆるであらう。更にまた遠い／＼並木の極、千屋萬瓦を中に隔て、濃い桔梗色の肌と雄勁なるスカイラインとを有する蠱惑的な山の姿を仰いだならば、總てのもの煩厭と倦怠とを覺へしむる熱國の都にも、一脈清新の氣の漂ふものあるを感じずであらう。此山こそは、今余の登らむとしてゐるアルジョナ山である。

曾ては此山を赤い實のなる珈琲の畑から、落日燃ゆる西空の雲間に遠望した。また或時は月の冴えた夜に槍の如く鋭い峯頭が、白雲を貫いて天空に聳立してゐるのを見た。又其山麓の一小都會に一年の月日を過ごした折には、朝な夕な好同伴として此山を眺めた。とりわけ乾期も末に近付いて、苜取られた蔗糖園の枯葉を焚く焔が、遠近の部落や杜の彼方に、暗き夜の空を赤々と照す頃には、此山も亦低きは三合目邊より、高きは七合目あたりに至るまで、星の如く炬火の如き山火點々と燃えて、

時にはそのほとりに人や見ゆると怪しむまでに近々と煽立つこともあつた。或支那人もそれを灰焼の火だと教へてくれた。而し自分は燒畠を作るのではないかと疑ふた。否何事にも感じ易い青年の心は、獨靜に此山火を見上ぐる時、云ひ知らぬ甘き哀愁の身に沁みて、もつと／＼夢幻的な場面を想像するのであつた。恰も來れ登れ、巖の殿堂に詣て、温かき自然の懷に抱かれよと招くやうな心持がして、登山の希望は其煽と同じ様に余が胸に燃えたのであつた。しかし火も燒き難い俗事の羈絆に囚れて浮世の荒波に弄ばるゝ人の身は、昨日は東今日は西と、流轉の旅の寸暇もなく、思の外に月日を過して、今日（大正九年三月廿五日）しも漸く久戀の山に登るべき機會を得たのである。

汽車は風光の明媚と物産の豊富とに於て、西部のバンドン高原や中部のマガラン高原と併稱さるゝ、東部瓜哇の誇りマラン高原の眞只中を轟々と北へと走る。午前八時二十四分マラン市發スラバヤ市行の列車の窓から首さし延べた余は、今更らしく四邊の景色に見惚れるのであつた。東はスメロ山を盟主とせる一連の山々、屏風の如くに三千米の空を限り、西はカウエー、アルジュナの兩山及び峙つた其間に、末は紫煙に疊かされた一望の高原目も遙に展開して、整然と植ゑ連ねられた稻田の緑は白鷺に彩られ、そよ吹く朝風にそよぐ蔗園の青波には、白い波頭とまがふ白芒のサヤ／＼と鳴つて、時には微紅の色若々しい新抽の穂波も交つてゐる。川邊にむらがる一叢の竹むら、屋後に亭々たる椰子の疎林にも、捨て難い風姿が見えて、澄澈した空の色や吹き込む車窓の風にも、涼氣身にしむ秋の爽さは含まれて、熱國の瓜哇とは信じ難い景色である。

マランの次驛から私設の蒸汽軌道に依つて東する砂海に名高いプロモ山麓のトンバン町と、マランから二度目の驛シンゴサリー町との附近には、佛敎時代の小遺蹟があつて、すさみ果た現代瓜哇に、回教渡來以前のクラシカルな匂を漂はしてゐる。乍併慌しい汽車の旅では、其床しさを思ひ浮ぶる暇もなく、直に高原の北端に位するラワン驛に着いて了ふ。

此町は豊に延びたアルジョナ山の裾野が、プロモ山より分派された支脈の末と合して、マラン高原北方の限界をなし、小高い丘の上からも、強烈な熱國の陽光に紺碧鮮に輝いた瓜哇海の波を俯瞰し得る形勝な地に開かれた瓜哇に名高い別荘地である。熱帯特有の緑濃い杜の中や見晴しのよい小丘の上などに建られた洋館の白壁や黛赭色の瓦の色も、樹々の緑とシツクリ調和して優れた景色に一段の生彩を添へてゐる。

暮靄は四周の山々に淡く立置めて、夕陽の返照が高き峯と漂ふ雲とに赤々と照り榮ゆる頃、閑寂にして景象の美に富むだ此町をそとろ歩きしてみると、行交ふ人々も、清楚な感じのする雪白のドレスを身に纏ひ、足には踵の高い白靴を穿き、鳥毛のそよぐボンネットの下から、碧玉の如き潤ひある眸を輝した彫像の如くに美しい白皙隆準の顔に、ホンノリとあるか無さかの薄化粧した北歐美人や、翅のない天使を其儘の愛らしい小兒達が多い。それは家毎の前庭に咲き誇る菊やコスモスや芙蓉の花の清艶な風姿と共に、瓜哇らしからぬ感じを興ふるものである。

ラワンと云ふ馬來語は、戸口とか、境目とか云ふ意味を持つてゐるさうである。其言葉を地名に負ふた此町から、北方にアルジョナの山脚に添ふて下つて行けば、一步は一步より溽暑と酷熱の瓜哇海の岸に近付き、南すれば地は高爽に吹く風涼しきマラン高原の人となる。

其分界をなす丘陵の一角に立つて、森滴たる瓜哇海の沖遠く眺めた目を南方に向くる時、陽炎燃る野の末に裾野も淡く紫煙に包まれて、濃藍の匂ひこぼるゝ峯頭を紺青の空高く擡げてゐるスメロ山の雄姿を振り仰いだならば、人は如何なる感想に打たるゝであらうか。

聴てけたゝましい汽笛の音と共に、汽車は驟然と走り出した。今は全くアルジョナの裾野をヒタ下りに下り行く其迅さに、セーゴンの寒驛を束の間に通り過ぎて、間もなくスコルシヨ驛に停車した。鄙には優しい花賣る土人を車窓に見捨て、此驛に下車した。時間は何でも九時廿五分頃であつた。

鷹揚に延びたアルジョナの北麓に淋し氣にとまつてゐる閑寂な此田舎町は、つい數年前までは、日本からの觀察者漫遊者からは一顧だも與へられず、詳細精密な瓜哇地誌にさへ、一行の割愛を乞ふ事さへも覺束なかつた蕭條たる一小部落に過なんだが、大正六年以後のスコルシヨ町の名は、在蘭領東印度幾千の同胞の耳に、快心の微笑を禁じ得ない心地よき響を與ふるの名となつた。それは東印度諸島中の檜舞臺である瓜哇に於ける凡百の産業中、最も堅實な又最も南國的な事業の代表たるべき製糖事業に日本人が手をつけた最初のものは、南國産業株式會社のスコルシヨ工場の買収であつたからである。

趣味の満足を求め、情操の花に培たい望の登山行に、濛々たる煤煙の黒さと、いかつい機械の喧しい廻轉とは、花見る人の長刀の觀が無いてもない。それに縦覽を乞ふべき便宜も持合せぬので、折角の工場にも立ち寄らず、馬車を支那人町に走らせた。

メラバブ登山記中にも書いた様に、蘭文を讀み得ない日本人に取りては、瓜哇の山々の大部分は、殆ど據るべき記録を持たぬのである。それで此アルジョナ登山の企に唯一の手懸りとして居つたのも、古い知合であつた此町在住の一土人から、曾て此山に登つたことがあると話されたことである。何より先に其土人に會ふて登路其他を問合せねばならぬので、町の中程にある其家を訪れてみると、土人の家特有の薄暗いガランとした室内に人氣は見えず、聲高に訪ふてみても妻女も下婢も出て來ない。日向ぼつこをしてゐる猫が一寸頭を擡げたが、一瞥したのみで復眠りかけた、處へ一疋の蠅がブーンと飛んで來て、猫の鼻面へヒョイと止ると、猫は五月蠅さうに前足で鼻面を搦ると、蠅はまたブーンと飛去つて了つた。其翅音も聞き取れる程の靜けさである。前の往來を牛車でも通つてるのか、緩やかな轍の響が濃い午前十時の空氣を搖かして傳はつて來る。環境の事象はしかく長閑に爾く悠安をシムボライズしてゐるが、獨り余の胸中には、不安と當惑の黒雲が渦卷いてゐた。頼の綱は切れはて、

何處から登つてよいか見當もつかなくなつたのである。困惑したのも道理と云へやう。

とつち思案の末想ひ出したのは、記憶のドン底に幽にコビリついてゐたニドロキローと云ふ妙な地名である。何でも此家の主人は其處から登つた様に話された記憶がある。何は兎もあれニドロキローと云ふ土地を探して、其上で登山を決行するかもしれないとも極めやうと、其處までの案内者兼荷持の苦力を探してみたが、どれもこれもニドロキローの名を聞いた丈けて、云ひ合せた様に尻込みする。人夫さへ厭がる土地では馬車などはとても問題になるまいから、先にて人を探すことにして、荷物を振り分けに肩にして、教へられたストラバヤ街道を爪先下りに西へ歩いた。

近いと教へられた分岐點は馬鹿く敷遠く、何でも一哩近も歩いた頃、小さな市場バツヤのある一寸した部落に出た。汚い土人の珈琲店でマラン名産の甘い珈琲を喫しながら、苦力や道順のことを尋てみると、話好の亭主の説明に依つて、分岐點はもう直で、今夜はダニューと云ふ村に一泊し、其處の村長に探して貰つたら、多分アルジョナ登山の案内者を見出し得やうと判明したが、苦力の方は此部落でも雇へず、再び獨りて歩き出した。所詮は自分で擔はねばならぬ運命かと觀念しても、凡夫の悲しさに、「我か物と思へば輕し山登り」など、風流に納まり返へることも出来ず、荷を負へば重いもの、重ければ疲るゝものと云ふことを病後の身體に沁々と感じたのであつた。

尙ほ少時西すると、教へられた通り左へ曲る道があつた。二間幅の思の外に立派な道路であつたことは結構であるが、雲は黒くアルジョナの山腹に低迷して、慘たる日色は淡く西方の裾野にのみ照り、兩軍の襲來を豫報する攻鼓は、東の方遠くプロモの山頂に早くも殷々と轟き初たのは心細い。

分岐點から稍一哩半も登つた頃、果然黒雲の幕から兩三點の珠の如きものが落ちて、西日にちらと閃くのを見たと思ふ間もなく、打開いた裾野の末に兩脚白く天より降つて、東の間に丘を包み谷を越え、迅きことさながら鐵騎の野を走るが如く、又大河の堤を決するにも似て、瞬時に天地白濛々の裡

に没入してしまつた。

折しも部落を離れたので四邊に駆け込む家もない。見えるのは唯整々たる棉の並木の常には眞直な幾學的な枝も、今日は雨に抹され霧に包まれて、思の外なる優敷床しい姿を示してゐると、緑滴るバナ、の大葉風に吹かれて、ハタ／＼と隣へつてゐるのみである。幸に稍離れたタビオカ芋の畑に、鳥獸の害を防ぐべき番小屋が見えたので、麻の葉に似た葉を押し分けて馳せ寄つた。

竹の柱を四本無造作に掘立て、地上六尺の淺に幅三尺の竹の床を作り、更に三尺の高さに壹坪許り椰子の葉で屋根を葺てある。床に上る梯には、棉の木の徑五寸のものを七尺の長さに切り締め、其直角に打つた枝三四階を壹尺程切り残したものを用ひてある野趣の横溢さ、まことに南洋の登山にふさはしい雨泊りである。

靴を脱ぎ荷物を側に押し据えて、三尺の床に腰を下ろし、人氣もなき山近い畑中の小屋に、獨り迅雷のはためきと覆盆の豪雨とを聞いたり見たりしてゐると、胸中一切の俗念は、塵も止めず洗ひ流され、痛快味が頭の天邊から足の爪先まで行亘る。不景氣とか生活難など、云ふ浮世の煩は、颯と吹き來る風と共に一掃されて、木の葉に注ぐ雨の音がゆかしい樂を奏してゐるのが聞える。其穩かな諧調に耳を澄しながら、所在なさの無念無想で、昵と天の一方を見詰てゐると、睡魔頻りに襲ひ來つて身はいつか其捕虜となつてゐたらしい。

幾何の時が経たとも分らない、醒めてゐたとは元より思へないが、さうとて睡つてしまつた様でもない、譬へば夢とも現ともわかぬ恍惚の幻境に逍遙して、幽かに響く雨の音に此世との微妙なつながりが斷續してゐたのであらう。其時突然何やらけたましい人間の叫聲に、魂は再び現實の世に呼び戻された。

激しかつた雨も何時しか小降りとなつて、絲の如き細雨がシト／＼と薄日に白く降り續いてゐる。

峯は見えぬと蓬々と渦巻く雲の巻舒につれて、山麓の小丘は、鮮な緑の波幾つかをはね上げてはまた消える。四邊を雨に洗はれたタビオカの葉に包まれて、緑の波に漂ふ捨小舟のやうな此小屋からは、叫聲の主らしいものを見當らない。訝しさに一わたり周圍をぐるりと見廻した目をヒョイと下に向けると、居た／＼叫聲の主が而も三人迄、手に手に研ぎすました鎌を持つて、何やらクド／＼と喚きながら自分をふり仰いでゐた。

山に近い畑中の人の氣配とてもない夕暮時に、得物を持つた怖ろし氣な土人が三人迄自分一人を見上げながら、解らぬ瓜哇語で怒鳴つて居つたと書き出すと、どうやら冒險小説にでもありさうな光景に似てゐる。瓜哇慣れない頃なら、項窩（イタ）の毛が三本位チリ、ツと縮みあがつたかもしれない。然し今では五年の瓜哇生活にスッカリ土地慣れて、溫和しい土人が日本人を襲ふ程の氣力はないものと天から極めてかゝつてゐるから驚かない。黙つて俯向て見下ろしていると、再び聲高に饒舌立てる。何でもこんな處に何してるか、これから何處へ行つて泊るのかと聽いてゐるらしいが、それを正銘掛値なしの南蠻鳩舌だから判然したことは解らない、解つてもそれに答へる瓜哇語の持合がないから何とも詮やうがない。矢張黙つて見下ろしていると、同じことを繰り返へし／＼尋ねる様だつたが、終には狂人（オウランキヤウ）だと云ひ合ひながら行つて了つた。

此處で野豚を友に此儘一夜を明すのも面白からうが、明日は兎もあれ 今夜だけは人間並に家の中に寝て、明日の準備もせねばならずと、午後四時少し過ぎる頃、細雨を衝いて出發した。

暮色蒼然と四邊を罩めて、緑に暗い樹々の影から、紫の炊煙靜かに立昇り、水氣に瞬く灯の光ユラ／＼と竹壁の隙間から漏れて來る六時頃、目指すダユーの村に着き、直に村長の家を尋て一泊を乞ふた。

其夜村長の世話で、案内者を二人探しあて、明日を樂みに冷い床の上に横ると、晝の疲れて寒さも

知らず直に深い睡りに落ちた。

三月廿六日。冷々とした夜明の風が襟元から、ぞつと吹込む寒さに目を覺ますと、黎明の色は窓外の世界をほの白く染めて、室内は消へ残つた灯が明滅の境を彷徨しながら猶放つ幽な光にほんのりと薄明るい。扉を排して戸外に出てみると、曉天一碧秋空の如くに晴れ渡つて、残の星の影もないが、軒端を壓する山には未だ暗い夜の名残がコビリ着いて、雲のみ白く屯してゐる。木の葉にそよぐ風もなく、道行く人も未だ稀に、萬象口を噤むで、寂莫として氣もすがく、しい静けさの身に染む耳元に、優しい聲が何處からともなくきこへて來る。それは今しも目覺めた可愛らしい鳩が、咽喉ふくらして含み聲に、ホロツホーと鳴き出したのであつた。山深い穩な里の曉告る聲としては、これ程相應しいものはないであらう。

案内者の遲着に出發は午前七時頃となつた。緑に包まれた部落を離れて更に又一つの部落を越え、其處から遠慮もなく畑中に導かれた足跡によつて左すると、茅葺茂つた東側の斜面に出た。見上ると茅葺の原は殆ど五合目あたりまでも葢ふてゐる。近い頃東麓のある處へ宿つた朝、ふと太陽はウラ／＼と瓜哇海よりさし昇つて、アルジョナの山腹に纏る薄絹の様な朝靄が、日を含んでホンノリ白く映へた時、中腹以下の山の膚が、日本では見るべくもない美しい淺緑を示したのは、此茅葺の原があつた爲だと思つた。

萱原盡きて眞黒な喬木帯に接するあたりに、一條の瀑は白布の如くに懸つてゐる。登山路は彼の上に通ふのだと案内者は指し示した。其上に眞黒々と覆ひかぶさつてゐるのがリングゲ山（二四七三米）と呼ぶ一支峯で、猶南寄の空高く、崢嶸たる尖峰の巖だらけな斜面に、紗の如き奇麗な雲の纏つてゐるのがアルジョナ主峰である。

消んとしては復現はるゝ一條の小徑は、迂餘曲折しながら茅葺の原を細く貫いて、何時とはなしに

喬木帯に程近い邊まで導いてくれた。一望の野は蒼く、並木の縁縦横に走つたマラン高原を右に眺め、左手には海とも紛ふプロモとアルジョナ兩山麓の平原に、眞白な製糖工場の煙突は、眞帆片帆と許り點在してゐる。其向ふには本物の瓜哇海が、黄金を延べた様に鮮かに輝いてゐるのを俯瞰する景勝の地を選むで一休みした。

いざと再び歩む間もなく、路は雑草の茂みに消へ失せたので、用意の山刀に切り開かせて押し進むと、喬木帯に踏み入る頃には、再び明瞭な小徑となつた。絶えた路のまた現れたことは、此登路によつて、稀に登山の人あることを語つてゐる。さう自信して、心に三分の餘裕を生じかけた時、生憎と朝は快晴午後は雨と間違ひつこのない雨期の空は、用捨もなく曇り始めて、路を見出した喜びに晴れかゝつた心を、四望の景色と共に陰鬱の雲に閉して了つた。併し壯大な寄生植物や、蔓性植物の縦横に垂れ纏つた鬱葱たる密林に、蒼白い霧の蜘蛛する姿は、また捨て難い眺であつた。

一度密林を越えて、二度林中に没し、更に度三目の疎林を谷の彼方、奔騰する雲の奥深く遠望した時、自分は思はずハッと心を躍らしたのである。雲間に隠顯する瞬間の姿も、尙ほ狹霧に包まれて、墨繪に描ける雨中山水を其儘の茫洋たる遠望に、定かに見分る様はないとは云へ、枝の打振り葉の工合から察すると、松か檜葉か、何れも針葉樹の故國偲ばるゝ其風姿、日頃闊葉樹のみ見慣れた目には、嬉敷も亦物思はする風情であつた。

懐かしさに歩を急がせて近付いてみると、メラバブの登山記にも一寸書いた、在留邦人が南洋松と呼び慣はした植物であつた。

元來此樹は餘りに高からぬ土地の並木や、廣い庭園の庭木に屢用ゐらるゝもので、海拔千三四百米以上の地點では、寒さの爲に發育不良と許り考へてゐた自分にとつては、こんな高地（千七八百米）で此植物を見出したのは、思はぬ場處で案外な人に逢ふた様な意外さがあつた。

然し登るに連れて樹は益多く益旺盛に發育して、意外でも何でもなくなり、遂には點綴した闊葉樹は絶え、抱える様な此樹許りが幅を利かした美事な單相林となるに及んで、同じ南洋松でも、これは高山に生育する別種のものであらうと悟りかけた頃、銀糸の様な細雨蕭々と降り出して、蘆々亭々たる松林に、眼なき幽邃と神秘の趣を添へた幽寂境を貫いて、鞆鞆たる水聲が密林の奥から聞えた。夫はアルジョナ主峯の下に在るルコマンダール池から流れ出た水が、朝の程見上げた瀑布となつて落下する前、巖と闘ひ石と相撃つ奔湍急瀨のどよめきであつた。流に添ふて右すれば瀑の姿も見えやうが、今宵の宿サワアンの小舎は遠いと云はれて、靦瀑の望もルコマンダールの床數名も振り捨て、只管に行を貪つた。

登るに従つて、リングゲ山とアルジョナ主峯間の鞍部も、其頂上近く緩傾斜の下草の茅萱が歩むに易い離々たる短草となつて、所々に黄や紫の女郎花にも菜花にも似た名も知らぬ花に淋敷彩られてゐる中を、二人の案内者は用意の雨傘をさし翳して、煙草薫らしながら寛々乎として登つて行くさまは、如何しても秋閑けた日本の田舎の蕭條たる雨の降る朝、村境の松林を越えて、隣村へ用達にでも行くと云ふた風情であるが、雨に濡れたレインコートが一步毎に重くなり、兎もすれば下着まで浸透しさうな氣持悪さに、心はひたぶるに佗しく辛く、雨に煙る幽邃の松林も、點景として動く二人の傘も、一切客觀的な鑑賞の對照としてのみ眺めてゐられなかつた。鞍部に達したのは夫から間もないことで、標高は二千三百米位であらう。

リングゲ山の圓頂を駆け登れさうに近く北に望みながら、青毛鹿の様な下草を踏み分けて西北側の斜面を下ると、一路蜿々林中に一線を劃して、末は茫々たる白雲の底深き下界から登つて來るのに出會した。これがブリゲン村よりするアルジョナ登山の本道だと案内者は説明した。

ブリゲン村はアルジョナの北麓海拔八九百米の地點に開かれた避暑地であつて、往年大谷光瑞師の

麗筆により、國民新聞紙上で紹介されたこともある。いづれは其處に遊びてみたい豫定であるが、今は只管に天上の世界を戀ひ、聖壇高く壹萬尺の空に擡げたアルジヨナの峯頂に、攀ぢ登りたいと思ふ外に何の餘念もない。

午後三時を過る頃、雨も薄らいで空次第に明るくなり、密雲切れて山稜を露はし、亂雲收つて谷は呀然と打開け、遂には西方に汚えた水色の空が現れた。

一脈の陽光豊に流れて、深ふ雲は絶大なる蜻蛉の翅のやうに輝いてゐる其下に、壺赭色に焼けた石が磊々と全山を覆ひ、噴煙一縷淡く立昇る一山を、松林の綠波濤々と起伏せる彼方に見出した。それはアルジヨナ山彙西端の一峯硫黃山である。一徑の西の分岐してゐるのは、其山から噴き出た硫黃を採集して生業としてゐる山人の通路であるさうな。路傍に倒れた大木の上には、お呪といつた風に王冠形に結晶した美しい硫黃の一塊が安置してあつた。

左する小徑こそは、積翠を踏み霞を分けて、山靈鎮まる高御座に、われを導く懐しの道と、足も軽く氣も軽く、登つて行くと傾斜は順次に緩く、間もなく小丘の間に會つては清冽の水など湛へたかと思はれる小平地に出る。不圖見ると宵々と生へ揃つた奇麗な草原に、誰の仕業か色も濃い薔薇の花片がハラリと散つてゐたのは、仰ぐも縁俯すも縁のアルジヨナの森に、目も覺むる數點の紅を點綴してゐる。

心憎くも薔薇一輪、簾ならぬ胸にさして、漂ふ雲の奥深く踏分け入つた人や誰と、華やかな幻を胸に描いて、われにもあらず微笑ながら、運ぶ足並が早いかして、少時の後には翠嵐罩むる松林の奥、山氣磅礴たる巖の殿堂に、思ひ懸なく一抹の紫煙霧々と棚引いてゐるのを望み見た。あれこそサワアンの小舎に焚るゝ煙よと指し示されて、驚破こそと心は躍つたのである。

春色晴蕩の春の野に花を慕つて飛び交ふ蝶の彩翹を其まゝ霞にぬりこめた様な夢幻境が、幾歩の後

に忽然と現れて來さうな想に唆られて、力強く踏み數歩の後、蒼白い亜鉛張の屋根が現れ、更に數歩を進めた小高い地點から、緑の芝生に枝振面白い南洋松の疎林を配した一字の建物が望見された。

海拔約二千五百米の山上の宿泊所は、日本式に想像して、サワアンの小舎と書て來たが、今余の目の前に現れた建物は、屋根こそ亜鉛張りの風雅に乏しいけれど、家の作りから始めてテラと見受けた室内の設備は、蒲酒とか整頓とか云ふ形容詞を用ゐて差支ない立派やかな構造である上に、前庭には薔薇を始め温帯産の種々の花卉が植ゑてある。先刻の花片の譯はこれで分つたが、稍廣いヴェランダに据ゑた一脚の長テーブルを中に圍んで、温かさうに毛布にくるまり、ゆつたりと椅子に倚つてゐる三人の蘭人は、生憎どれもこれも屈強な偉丈夫なので、華やかな想像の幻は消えてしまつた。

案内を遣つてホテルの番人と交渉させると、暫く譯の分らぬ瓜哇語で話してゐたが、纏て引返へして、蘭人の一行は七人と云ふ大人數なので、到底泊るべき空室がないから、此處より西の方約半時間の地點であるカンボンウリーランと云ふ處へ宿をとれと教へられたと復命した。然しウリーランの小舎と云ふのはどの邊やら、案内者達は知らないと云ふ。もう蒼然たる暮色は松林の奥を閉し初めた折柄、聊か心細く感じたが、満員と斷られて見れば押し返へしもならず、番人の指し示す小徑を再びトボくと西に辿つた。

心あての小舎に泊り損ねた失望と、一日中歩き詰の疲勞とで、登りでもない道さへ中々に拂り兼ね、半時間を經過しても家らしいものさへ見當らず、不安な夕べの道と共に自分の心を暗くした。迷路ではないかと案内者に糺してみても、自分等にも生路であると答へられると、其れ以上詰る言葉もない。三人同時に路傍に蹲つて休むてゐると、幽な人聲が西の方から流れて來た。三人等しく六つの耳を引き立て、其次の聲を待つてゐたが、唯一聲のみで後は音もしない。見渡す限り二抱へに餘る程の大木が森々と生ひ茂つた松林は、既に暮色に包まれ、木間隠れに見上ぐる峯さへ東の半面から夜の

伊藤孝一氏撮影

（三月）山別るた見りよ堂室



色に包まれかけた。

目指す小舎からか夫とも山路行く人からか、唯一聲のはかないものであつたが、夫に一縷の希望を繋いで、三度進めば嬉しや間もなく、紫匂ふ炊煙を右手に低く認め得た。

心勇むて其方を指して急ぐと、行手の稍開けた谷間に數軒の小舎を見出した。小舎はアタツプ萱の屋根を地上まで迂らした、たとへて見れば二枚折の屏風を横にして地面を覆ふたやうな形をしてゐる。サワアン小舎の立派さとは比較にもならぬ硫黄採りの山人の部落で、旅舎専門らしい家は見當らない。

陋且隘、それは勿論云ふまでもない。しかし雨露に打たれぬ天井の下で、枯草なりとも床に敷いて寝ることが出来れば申分ない筈である。遠來の珍客を饗應したくもこれより外には何もありませんがと、斷りながら汲むでくれる一杯の澁茶にも真心が籠つてゐる。乞ふて一夜を此處に明すことにした。

廿七日。夢も見ぬ熟睡の自づと破れて目覺めたのは丁度午前一時半であつた。案内の一人を呼び起し、前夜の中に用意してあつた食事を取り、午食其他少許の荷物を取り纏め、炬火片手に出發したのは三時少し過であつた。

月は皎々と沓え渡つて、銀色水の如く地上に流れ、踏みしだく草葉の露は、珊々たる珠玉を歩毎に轉ばしてゐる。露に輝く草原には、亭々たる大樹の影黒く鮮かに印し、ふり仰げば松の葉越しに洩るる月光は、地上幾拾尺の空間にまで、明暗の交錯美しい縞模様を織り出してゐる。

何たる幽玄、何たる優婉、何たる奥深い景觀であらう。これを地上實在のものと見るには、餘りに人間鑑賞の標準よりかけ離れ、餘りに描寫の能力を超越した神秘的光景である。清婉なる月の光を繪の具とし、嵯峨たる枝を畫筆として、大自然の妙手が天上靈感の仙境を幽玄なる夜の幕に寫し出し、自然を戀ふる人の子に、飽まで美を味はさせたい心盡してあつたと解したのである。今日只今かく

ある如く後日の再遊は期し難い。此山此地にかくある如く、スメロ・プロモにも斯あるべしとも覺えな
い。選まれた時に選まれた地を訪れた自分の心は、激越せる歡喜の情に堪え難く、血と云ふ血は高鳴
りして、四肢の末まで躍り流れた。

昨夕の路をサワアンの近くまで引返へした。案内者は稍暫く其處此處と登路を探してゐたが、やが
て幽な人の足跡を露滋き叢の中を探し出して右に登つた。東の間に腰から下はグッシヨリ濡れて、冷な
夜氣が皮肉に喰ひ入つた。流石に高山の曉は、熱帯と云ふ先入主を裏切つた寒さである。ほゞ半時間
も過つた頃、二人はアルジョナ主峯の鋭い斜面が西に延びて、續く一峯を崛起しようとする鞍部の直下
一寸サワアンに似た草原地に出た。仰げば一連の障壁は月下に黒く、山稜も皴裂も、崩るゝ巖もそゝ
り立つ尖峯も、皆一樣に夜の色に包まれて、太古の如く寂莫たる山上の曙は、如何に默禱と默想に相
應しきかを星と共に囁いてゐる。

路とは名のみ身を没する叢と變りはない。案内の土人は淡い月光と炬火一本とを頼りにして、こん
な山路を攀ぢ登ることの困難を繰返して呟きながら、時々佇むては足跡を探した。可なりな悪
戦苦闘を續けた末、やつと鞍部の頂上まで達すると、明瞭な一徑は、アルジョナ主峯を目懸けて這ひ
登つてゐる。

依然たる南洋松の單相林は、全山を蔽ひ盡してゐるが、高距二千七百米を超えてゐるらしい此あた
りでは、雨に打れ風に撓められて幹は細く、枝もうね／＼とひねくれて曲つてゐる。歸途に氣がつい
た事だが、此附近の老木の外皮は、立木のまゝで炭化してゐる。それが別に山焼にあつたのでも何で
もなく、自然の風化作用の結果であるらしい、外皮とは云へ、生きた立木が炭となると云ふことは、
専門家でない自分にとつては、随分珍らしい事實であつた。

登るにつれて傾斜は益急となり、木立は漸く稀疎となつた。空稍明るく、青白い有明の月は、淋し氣

にす枯れた梢にかゝつてゐる。

不圖目を逸すと、眞黒な雲が低く垂れた東の空に、一點の燻ぶつた茜色の微光が浮んで、暫時の後には六合を普く照すべきことを豫告してゐる。

尙ほ暫く登る間に、茜の色は次第に冴えかへつて、點は線となり、線は幕となる頃には、夜はほのぼのと明けて、黎明の色は靜に松の疎林に忍び寄つた。けれども山は未だ覺めず、丁度吉野紙に包むだ物を見る様に、山隈も稜角も、茫洋たる輪割に没入して、下界は猶昏昏と睡深い。しかし見よ、曉光は圈波の廣まる如く廣がり行くを。

暗かつた下界にプロマイド色の光が流れて、一色であつた海と陸とは、ブランタス川の川口から、白い水と黒い陸とを分つ一線仄かに浮むだと見る間に、其線は東に延び西に走り、遂には森々たる瓜哇海の繪にもし難い長汀曲浦は、東ベスキアの奥遠く、西はトバン市（レムバン州）のあたりまで一望の中に收つて、マドラ島の窠微が近く瓜哇島に狭ばまる處に、白鳥の頭の様な優麗な曲線に描かれたマドラ海峡が白く光り、其内灣の一隅に、スラバヤの甍の波も見られさうな心持がした。

暗鬱な夜の幕は、今や全く地上より取り除けられて、朱金に輝いた東天の曙光も 反て色褪せ且つ低まつて、空の色は澄みさつた淺黄色に輝く。太陽は今將に水天一髪の境を劈いて昇らんとしてゐるのである。

喘ぎ／＼頂上の一角、脚下に直立三千尺の大壑がカットと巨口を開いた割れる如き大絶壁の頂に立んとした剌那、一道の金光は巖岩をも貫く許り鋭く射出した。團々たる眞紅の火球は、今しも一搖して蒼瀛を離れたのである。

ウラ／＼とさし昇る朝陽の光は、瓜哇海の漣波に碎けて、プロボリンゴの沖は黄金と輝いた彼方、黒く長く突出した岬角に眼を止めて 其凹凸したスカイラインが南するまゝに嵩まるに従つて行けば、

尨大なるアルガポーラ山(三〇八九米)は雲表に秀て、兒孫の如きラモンガン山(一六四〇米)は、棚引く横雲に頂を隠して、恥らふ如く其前に蹲まつてゐる。

明鏡の如く輝くガラッテ湖の東にプロボリンゴ、西にバスロアンと、孰れも砂糖の輸出に名を得た兩港を山脚海に没するあたりに軽く載せて、佛徒の名残りテンガル村を其山頂の高原に秘めたプロモ山(二三九〇米)の積翠を破つて、一條の噴煙天に冲するを呼ばゞ答へん當面の東に望み、續く一と蜿りの連山は、濤々乎として南に寄せ、其處に群山の盟主大瀛の鎮と天そゝり立つスメロ山の頂に朝陽は映えて、曉雲白く山腹に搖曳する神韻漂渺たる雄姿は、人をして自づと襟を正さしむる端正と莊嚴の象徴である。其長く延たる大麓の末に、一朵の雲低く黄金板上に横はるのは、間はでもしるき印度洋である。カウエー山彙(二八七四米)の皺襞と、山稜の鮮かな交錯とは、見る目もすがくしい美しさである。

マラン高原の緑は、今しも麗かに注がれた旭光に燃えて、中に斑々と黒いのは、部落の杜であり、點々と白いのは家の白壁である。そして白聖赤瓦の家が群つてゐる所はマランの市街と知られる。

カウエー、アルジョナ兩山の間を西に貫くブジョン峠の高爽なる高原(約千二百米)に點在するホテルや、別荘や及稍低いソングリタイーの温泉場、并にアルジョナ南麓の幾那エステートまで、歴々と指點することを得た。

一九一九年の春四月、山靈怒り山荒れて、五萬の生靈を熱砂と熱泥と熱湯とに埋めたカロット山(一七三一米)は、根張り廣くカウエーの西に蟠居して居るが、惜しや雲重く山を壓して、怪岩と奇石の堆積である其山頂を望み得ない。

アルジョナ山の西に續くアンヂヤスモーロ山は、アルジョナ脚の一支峯とのみ思ふてゐたが、今此峯頭に立つて俯瞰すれば、山彙の複雑と廣大とは、アルジョナをも凌ぐ獨立の一山彙で、其盟主たる二

二七一米の一峯の絶倫逸群の峻峻なる山貌は、これも亦瓜哇群山の珍なることを始めて知つた。

西に稍離れたリマン山と、更に遠くソロ城南に聳立するラウー山とは、紺青の色深き西の空に、前者は朝霞陽光を含むて微紅の山膚清らかに、後者は水色の夢より淡く浮き出してゐた。若しや東西百五拾哩の空際を貫いて、去年登つたメラツピ、メラバブーの兩山を眸底に收め得るかと思視したが、終にそれらしいものも見分けられなかつた。

アルジヨナ、アンヂヤスモーロ、リマン、ラウー及此處からは見えぬメラツピ、メラバブーの崇嶺高嶽を東より南、南より西を限る一線と見て、北は森漫たる瓜哇海に盡るまで、はてもなく蒼茫と廣がつた六州の野は、緑の海に浮ぶ白い雲を岩に碎くる浪頭よりも猶白いと観ずるのであつた。彼處に熱燠の都スラバヤの街こそあれと思ふあたりより稍西に、一條の銀線六州の野を貫流してゐるのは、瓜哇第一の大河ソロ川が五百四拾基米の長旅行をなしてゐるのである。別に山麓に接して、廣く狭く帯の様な流れの見えるのは、第二の長流プランタス川(參百拾四基米)である。

世の中には旋毛曲りの人が多くと同じやうに、世界中には妙な川や不思議の川が多からう。蒙古の砂漠に流れ込む無し川は河の不具なる者であり、阿弗利加あたりに在るとか云ふ、雨毎に河身を變へる物は河の氣紛れ者である。併しながら此プランタス川位旋毛曲りの河は、一寸類が少なからう。何故かと云ふに其流程は八拾里に近く、利根河や北上河と伯仲の間にある可成な長流であるにも拘らず、其源泉は今自分の立つてゐるアルジヨナ山の東南の澤の滴であつて、其川口は足下に見ゆる北麓の海に開いてるのである。高距こそ壹萬尺の相違はあれ、直徑の距離は四五里に過ぎまい。即流程八拾里に近い此河の源頭と其川口とは、一つ山の上と下で、朝な夕なに挨拶を交してゐるのである。昨日此山の北側に降つた雨は、とうに瓜哇海に流れ込むで、魚鼈の腹中に吸ひ込まれて居らうに、其東南の側に降つた雨は、未だ中流までは達しませう。

アルジョナの峯頭に降り分けられて、友と別れた雨滴の一群は、先づマラン高原まで下らねばならない。そして此高原の真中を北の端から南の端まで貫流すると、其處に一連の低山脈が連亘して印度洋に流れ入るのを妨げてゐる。それ故に低山脈の出脚がカウエー、カロット兩山の裾野と出合ふ邊を眞面に流れて、ケデリー平原の南端に達すると、此度は厭應なしに走向を北にへし曲げられるので、マラン高原の場合とは全然反對の流れ方をする。それを眞直につき抜けければ、六州の野を横斷して、殆どソロ河の河口とカチ合ふ筈なのを、アンヂヤスモローの西麓が、六洲の野に没する邊で、三度の廻れ右に東流したのが、アルジョナの前衛、ブナンゲガン山に押し出されて、少しく北へ傾いた爲やつと海に落込んで、昔の友と握手することが出来るのである。數へて見るとアルジョナ、カウエー、カロット、アンヂヤスモロー等の一大火山群をグルリ一廻りすることになる。先以て類の少ない旋毛曲りの河といへやう。

アルジョナ山はアルジョナ山彙に屬し、そして其山彙は東のアルジョナ山(三三四三米)中のカンバー山(二八八〇米)、西のウリーラン山(三一五〇米)と著しい三峯に別れ、リングゲ山を始めとして幾つかの支峯を持つてゐる。此處から見たウリーラン山は赭褐色の焼石と硫黄に霉爛した黄色の磊石とに蔽はれて、其南の一角からは濛々たる煙を噴き上げてゐる。中のカンバー山がチャンテキの紅葉に全山を美しく彩つてゐるのは、嬉しくまた懐しい。

自分の立つてゐるアルジョナ山の頂上も亦東端が一番高い三峯に分れ、紅紫の花を著けた高山特有な可憐な樹や草が、楚々たる風姿を呈してこぼしき巖間を飾つてゐる。

三つの巖峯が駢立した南と東側は、急峻な草原の斜面がなだれ落ちて、聽て松林の翠に没し、末は蒼然たるマラン高原に溶け込むてゐる。北側は天斧を揮つてザツクと截ち割つたやうな絶壁が三千尺(概算)の高さに峙ち、其底にサワアン平を抱いてゐる。其處に一點白く箱庭の小舎より小さく見出さ

るゝのが宿舎である。

いつの時代か古い頃の爆裂に山の一半がけし飛んだ其凄まじい威力の跡を示してゐる斷崖の稜峭たる巖の姿と、雨に打たれ風にさらされた其色とは、偉大なる自然の一の表現であり、汚れた人間の心を淨化する祭壇の標的であらねばならぬ。

頂上より數間南側に下ると、三四人位は泊れさうな洞窟がある。水と食物と毛布を充分に用意して乾期に於ける月明の一夜を此處に過したなら、どんなにか靜謐な、どんなにか幽邃の景色が見られるであらう。

午前九時頃下山の途に着いて、一時頃に小舎に歸り着いた。明る日はウリーラン山に登つて物凄さ噴火口底を眺め、正午頃小舎に歸り、其夕五時頃ブリンゲンに下山した。其記事も書く積りであつたが、後日の機會に譲ることにした。

北上山地の旅

沼井 鐵太郎

大正九年八月四日より同十三日迄。

東京—花巻驛—仙人峠驛—仙人峠—土倉峠—五葉山—釜石港—宮古町—川井—小國村江湊—藥師川溪谷—
 早池峯山—門馬—盛岡市。
 參照地圖 陸地測量部五萬分一地形圖 花巻、大迫、土淵、宮古、川井、早池峯山、盛岡、外山、大川、人首、遠野、釜石。
 同二十萬分一帝國圖 一ノ関、盛岡。

○北上山地の旅 沼井

一 岩手輕便鐵道の車窓觀

東京を出たのは七月三十一日の夜であつたが、旅らしい氣持は八月四日の朝から始まる。

東北本線の花巻驛で岩手輕便鐵道に乘換へる。發車迄に間のある所から、食をあさりに町の方へ出懸けて行くと、朝曇りの鈍い光を受けて、街上は雀や鴉や鷄等が争ひもせず集つて居たりする。旅行案内に明記された辨當は何處にも見當らず、漸く胡桃入りの「玄米パン」と稱するものを購つて歸る。

さういふ町から志戸平(シドタヒラ又はシドヒラとも云ふ)といふ温泉場に、奥羽には珍しい乗客用電車が通つてゐるのが不思議な位だ。尤も此邊は鑛山と共に、温泉の少からぬ處で、志戸平の外にも大澤、鉛、臺などいふ名前が物の本に記してある。多くは木賃宿ださうだが、志戸平には近年東京風(?)の旅館が出来たといふので、湯好きな日本人の例に洩れず、私達も一浴し度かつた。けれども何分汽車と電車の時間の都合がうまく行かなかつた。

午前六時過、輕便鐵道は例によつて遅發である。終點の仙人峠驛迄四十哩の里程を三時間半もかゝつて進行するのだから、考へた丈でもうんざりしてしまふ。其處で同行のI君は横になる。自分も眠たいが、始めて通る沿線の風景を見て行きたいと、がた／＼ぬける窓際に獅嚙み付く。鳥屋ヶ崎なる停車場を過ぎてから北上川の縁に出ると、其流は宛然昔の國を思はず様に寂しげにうねつて居た。

何時の間にか自分も寝てしまつてはつと坐り直した時には猿ヶ石川の溪谷に臨んでゐた。川べりは川柳や櫛や七葉樹等で綴つて、川床は浅いながらに山裾を洗ひ、遙か遠く流れ去る氣配がする。北海道の旅を回想させる」と、起き上つた友がしんみり眺める。聽て宮森といふ驛に着いて大分長いこと停車した。

漸く汽車が搖ぎ出すと、再び猿ヶ石川に廻り遭ふ爲に砥森山の麓を練つて行く。其山には金鑛が出

ると隣の男が私達を山師だと思つて話をしかける。面倒臭さにろくに返事もしてやらなかつたが、それでも柏木平驛の附近で、砥森山の鳥居の符號のある峯を指し教へて呉れたのは親切であつた。其峯は聊か急に高きつて森林の上に頭を出してゐた。そして此邊は線路の切通しに打開いた蛇紋岩のとげとげしい稜角が現れてゐる様な處だつた。

再び秩父層の地に入つて猿ヶ石川の沿岸には次第に平地が開けて來る。鯨澤を過ぎると笠通山(八六九米)が見えて來たが、男と入れ代りに乗つた百姓の女はそんな異名を知らなかつた。二日町驛のある所では笠通山と石上山(一〇三八米)の間に此迄にない廣い谷が割り込んでゐる。そして此等の山は北上山系全般の特徴を保つて、高原状である事があり／＼と認められる。廣い山上は見る所木も稀に草の緑のみが被ふてゐた。石上山と夫から此は車窓からは見えませんが、北方に大麻部山(一〇四四米)、二ツ石山(九二一米)、尙線路から遙か南に貞任山(八八四米)、其西方に石森山(七二五米)大森山(八二〇米)物見山(八七一米)とあるあたりは、高原性が殊に著しい。而して農商務省地質圖釜石圖幅(歐文)を見ると、此邊一帶に可成廣大な面積を占めて花崗岩の露出を示してある。

遠野町は珍しくも北上プラトイの間の凹みに開けた沖積層地の文化の中心である。早池峯登山者は此處で下車するのが便利であるが、初めつからつむじ曲りの豫定を立てた私達は薬師川方面から其を試みやう。そして又其前に北上山系南部の忘れられた名山五葉山を探らうといふのであつた。此驛で始めて飯らしい辨當にありついた。

遠野を離れて四つ目の驛に平倉といふのがある。此は赤羽根峠を越えて盛街道に合し、世田米村の方へ行く立派な道が出る所である。五葉山へは寧ろこの街道から氣仙川上流に出て上るが捷徑であるが、仙人峠の名前に惚れ、なほ土倉川を下つて見たいと云ふ希望から、私達は終に選ばなかつた。其街道の下有住村には保呂志山(五八七米)といふ岩だらけの名勝だの、高土山、男火山(八七七米)女火

山(八五三米)などいふ山の外に、奥火ノ土、火の土、山脈地、二度成木フダナキなどいふ面白い地名が少からずあつて、私達素人の好事癖がむら／＼と起りたがる。此等の内の或物に就て多少聞いた話もあつたが、差當り今は重要でもないから止めて置く。

車窓觀が飛んだ遠くへ脱線してしまつたが、心配してゐた輕鐵は別に故障もなく、早瀬川ハヤセの水上に上つて行く。峠に近づくと従つて川の流は狭まり、周圍は漸く山らしくなつて来る。すると「あしかぜ」の驛で乗りこんだ人足の一群が、乗客に荷持ちをふれて廻る。聞いて見ると、仙人峠驛と釜石鑛山線の大橋驛との間にはケールが山越えしてゐて、いつもは荷物の運搬をしてゐるが、今日は故障があるのて人夫が背負つてゆくんださうだ。私のリュックサックは家を出る時二貫目許あつて、なほ仙臺市で多少の品を詰めこんだから、可成重たかつたが、僅か三百三十米の上りだからと先づ人夫は斷つた。其内に右手に可成高い岩壁が現れる。地形圖(遠野)には片岩カタイハと記してあるが、其を眺めてゐると直に仙人峠驛に到着した。

二 仙人峠

驛に着いたのは午前九時四十五分、直ちに峠道へ向ふ。驛の附近には多少の物品を賣ぐ店などもある。沓掛谷ツツカケニの橋を渡つて一二町谷の奥に進んだ。其處には早瀬觀音ハヤセといふのを祀つてあるさうで、地形圖を見ると觀音岩などと記してあるが、誰にも聞かなかつたのでどれがどうか分らなかつた。谷は小さい乍ら岩を刳つて小瀧などが落ちてゐる。

沓掛谷の入口に建つてゐる道標は頂上迄二十二町半、中仙人迄三十七町、大橋迄五十三町なる事を教へてゐる。登りかける處が稍々急な丈であつて、其を約百米も上ると後はずつと樂だ。道は相當に立派なもので、一丁目毎に前後の里程を示した石を設けてある。電光形が暫く續いて傾斜が稍々鈍く

なる、其頃からケーブルが林の梢を越えて一直線に上つて来る。さうなると何だか山らしくないが、流石此邊になると麓から可成美事な榊林で、未だ多く手もつけられてゐない様子には喜んだ。途中一回休んだ切りで、午前十時三十五分には峠の頂に着いた。全く造作もない話であるが、汗は大分に流れた。

頂には石段を數段上つた處に仙人神社の古い建物がある。其反對側で道の傍には峠の茶屋が開かれて七八人の人が休んでゐる。私達も其中に混つて、上服を脱ぎ、一杯二錢の水を飲んで稍と落付いてから、地形圖を持つて見晴しに立つ。草地の多い甲子村の山々の襟元を通して釜石灣の一部が見えたら、肝心の五葉山(二三四一米)は氣仙方面の南風を受けて、其の廣い頂は悉く雲の中である。私は若し行けるものなら仙人峠から土倉峠迄尾根傳ひをして見たいと思つてゐたので、茶屋の後から十數間南へ進んで見た。東北の地でも暖い太平洋を間近に覗きこんだこの山脈には、寸尺の地も餘さない程に草木は生長し、揃み合つて、おまけに細い尾根の上に下草に隠れて岩石が轉がつてゐるなど、どう考へても大橋へ下りて迂廻した方が倍も速さうなので、尾根傳は止める。店に歸つて「君に話すと「藪より道の方が歩き易いからナ」と當然の否定だ。丁度其處に人のよさうな人夫が二三人休んでゐたので、其内の一人を拉し來つて山の名を聞かうとすると、「上の方がよく見えます」と云つて、神社の背後の丘の上に連れて行つて呉れる。測量の際此邊を歩き廻つたとかで、案外分りのいゝ男だ。北東には片羽山の雄岳(二三三三米)雌岳(二二六九米)及岩倉山(一〇五九米)が見え、北西に當つては釜石鑛山の一一八六米峯から南西に走る大開山(一一三九米)支脈の草色が見える。其の更に北西の六角牛山(一一九四米)はよく分らない。仙人峠から南する尾根は可成銳角に谷を削つて數多の小峯を作り、中には立岩になつたものもある。其が陸中陸前兩國界に到つて、東すれば七九三米の土倉峠、西すれば一〇一三米九の三角點ある峯となつて、早瀬川の左岸と並行する低山脈となるのである。仙人峠から

は國境に村界の打合ふ邊の山と柳のこんもりした、前澤と稱する山(一〇二・三米九)の外は見えない。此間を歩く事は至つて困難で、根曲竹は一丈もあるといふ。前澤(別に前澤山ともいはず。又澤の名でも無い、此邊一帶の總稱であるらしい)と仙人峠道なるい尾根の間に割込んでゐる谷は、ヒガラ澤といふさうで、尙又、片岩といふのも岩壁の名ではなくて、峯の上迄を含めた地名である、と男は云ふ。

茶店に歸つて見ると、私達と前後して上つて來た旅客は、もう皆下りてしまつた。こちらは別に汽車に乗るでもなし、思つたより感じのいゝ所なので、落付いて澁茶を啜る。試みに店のおやぢに仙人神社の祭神を聞いて見ると、其は猿田彦命を祀つてあるともいふし、又役行者が建てたものだともいふ。猿田彦命なら天狗様だらうといふと「さうかも知れねえ」との返事である。それでも此邊はまだよく分る方で、しかも神に對する信心の程度も氣狂ひひじめてゐない。御神體を拜む事を二つ返事で許して呉れた位だ。社は三百年前に建てたものだといふが、兎に角鳥居など古色蒼然たるもので、大に氣に入つた。鳥居をくゞつて拜殿だか參籠殿だかの背後に廻ると、其處の岡の蔭に小さな祠がある。中には極めて雑然と十本の劔が奉納してある。御神體はどれだか分らないが、一箇の石碑に記してあるのを見ると、中央に仙人阪堅牢擁護□神□とあつて、側に此石祠及四百間算一字文化二乙丑□□、裏面には源遠不□□□爲其通文表建立釜石佐野氏忠義とある。尙此他に文化五戊辰七月吉日願主釜石佐野與市□賢華押の文字があつた。

約一時間の休憩の後、午後十一時四十五分峠を東側に向つて下る。此方が下りも長くて大橋との高距は約六百三十米の差がある。傾斜も少し急だ。柳や水楢や甘い匂のするガマズミの類やらの下草にマヒヅルサウがあるかと思へば、ゲンノシヨウコが所得顔に蔓つてゐる。大橋の人家や輕便鐵道の軌道が見える。話といへばそんな事で、至極平凡に中仙人の茶屋も止まらず過ぎて、大橋ステーション

の傍まで一氣に下りてしまつた。

三 土倉峠を越え檜山へ

ステーションの少し下の宿屋で鮎を菜に晝飯を食べてから、再び結束したのが午後の二時である。宿の主人は體量二十四貫もあらうといふ大男で、土倉峠は其處に見える鍋越ナベコシ（三等三角點五二七・二米）に上つてしまへば後は樂に行かれる、上有住村カミヅムラの土倉迄一時間半もあれば私のやうな太つた男でもゆつくりだといふので、すつかり安心したのが誤りであつた。

先づ大橋を出て四五町チヨウに添うて行くと甲子川の右岸に渡る小徑がある。橋を渡ると谷川は思ひがけなく大岩を穿つて美しい。此から細徑を辿つて桐の林を抜け、電光形に二百米も登ると、鍋越ナベコシの北側に出る。其道がさゝやかな林の中で、クロモジの快い香を嗅いだりする。芽が丈よりも高く繁る所もあるが、足許は分明で、懸て尾根の上に達すると、甲子川の谷は對岸の山と共に開けて見えた、近くに炭焼小屋などもあつた。屋根の上は灌木も至つて僅かて日盛りに疎な蔭もないが一休みする。此が午後の三時で、十五分の後に尙ほこの尾根（此地方では尾根にあたるものをリと稱してゐる）を登る。何だか武相國境の三國山附近を歩いてゐる氣がする。それが一山にかゝると道の兩側は豪い藪になつて然も非常に深いカヤドになつた所もあつて、大分困難だ。漸く小鞍部に出て一休する。所が其先が又ひどい。然も草露にしつとり濡れる。峠迄頑張るつもりでゐたが到底我慢が出来なくて、三時五十分に石の積に又休まざるを得なかつた。此處には焚火の跡もあつた。人が通らない事は無ささうだが、何にしても荒れた峠道だ。

斯くして土倉峠頂上に着いたのは午後四時十分で、約二十町位の上りに意外の時間を費してしまつた。頂上はすつかり霧の中で展望の樂みを失つた。國境の尾根は東西に連つて、其東峯から二つの支

脈を出す。東するものは私達の来た方で、南するものは箱根峠アイゼン(七四五米)愛染山(二二八・五米)を経て五葉山に接する本脈である。峠の特徴は仙人とは異つて乗越然たる所で、其南側即ちマツガラ澤(土倉川上流)に面した方面は赤瓦に兀けてゐる。霧のせいだか随分高い所に居る様な気がする。霧は遂に雨を降らす。其間に鶯がソロを奏してゐた。

道は幸ひ迷ふ様な事もなく、雨も曖昧な内に上つてしまつたので、其のマギの左手からマツガラ澤に下つて行く。百米許にして水が湧き出す。藪は依然として密で、足許を注意しないと石に躓いて跳ね上る。やがて右岸に渡つて右手、前澤(一〇一四米)の北東面から落ちる澤を見て、又左岸に渡る、其内又右岸に移つて再び左岸に戻る。此邊になると傾斜はゆるやかになつたが、斷絶しては現れる藪の爲に、どの邊を通つてゐるのだか皆目分らなくなつてしまつた。が、右手に岩の多い山を見て、大凡半里は下りて來たと思ふ。それが、然し實際には中々の事で、疲労も手傳つた様であつたが、箱根峠の入り迄は随分遠かつた。丁度其の入りから十五六丁町手前に當つて、まだ木の香の生々しい下駄材の削り屑が溜つた所があつて、それから次第に道がよくなつて行つた。それでもカヤドを通る時には自分の足先の感覺到感謝した程見透しは利かなかつた。斯くの通りであるから谷川の景色を賞鑑する暇も無かつたが、元より低い山の小さい谷では特筆する程の事も無い。然し地形圖を見て察しもある様と思ふが、小瀧は少からず懸つてゐた。下の方では岩魚でもゐるかして、石を寄せて圍つた場所などもあつた。森林は感嘆する程の美しさはなく、反て下るに従ひ草生の丘が連るのを目撃した。午後六時十分過に箱根峠の入りに着く。其處には一軒の農家があつて、畑も相當に作つてある。立寄つて聞いて見ると此處はやはり土倉の内、此からダイド一澤に添うて登る箱根峠の方がずつと道がいい。土倉峠は滅多に人の通らない所だといふ。大橋の話は箱根峠の間違ひぢやないかと家の人は云つて呉れたが、鍋越を明指した以上、どうしても大橋の大男の話は出鱈目だといふ結論になる。も

う大分腹が空いたので湯をもらつて、今朝輕便鐵道の宮森で買った味付パンをかちつてから急ぎ足で出かける。序に檜山で泊めて呉れる家はないかと尋ねると、家の人は、檜山の大盡 紺野重藏氏といふ仁を教へて呉れた。もと五葉山の別當をやつてゐた老人で、登山には都合がよからうといふ様な事迄教へて呉れた。

農家を出たのが午後六時半。もう日が暮れて来る。小祝澤を渡り、大祝澤を渡る（兩方の澤とも橋なし）。時には川床もよく見えなくなつた。岩上に一服して見ると、土倉川は水量も増して来て、夜目にも小綺麗な谷に見えた。違澤を過ぎる頃には雨が降り出して来た。中澤部落で道を聞いて檜山行の道を通ふと、もう眞の闇夜で化物のやうな桑畑の横を通つたり、川の截岸の上に出てびつくりしたりした。雨も強くなつて来たのでとう／＼レインマントをかぶり出す。斯して悲惨な姿を檜山大盡の許へ運んだのは午後の八時過であつた。

四 五 葉 山

陸前國氣仙川の上流上有住村字中埜に於て本流の土倉川に合する檜山川は、北上山系南部の名山五葉山と其北西隣の愛染山の間を流れる長さ凡一里半の溪流である。檜山部落は其落合から二十町程奥にある。海拔は僅か三百四十米許だが此處に來て始めて山に入つたといふ氣がする。檜山大盡の家で濡れた物など始末して晩飯を焚いてもらひ乍ら爐端で話を聞くと中々面白い。第一此處も武陵桃源のやうな所で、昔何時の頃か武家の一門が戰に破れて遙々此地に逃れ來り、長い間自活の道を立てて居たといふ。紺野重藏老翁の家は其主家で、檜山部落並に中澤部落の者は皆「俺の家來だ」といふ様子をしてゐる。古い記録でも見せてもらはうとした處、御多分に洩れず、火災に罹つて烏有に歸したといふのは惜しいものだ。五葉山の様子を聞くと、祭は舊曆九月十七日でまだ草も刈つてないが、登

るには差支へないといふ。其處で案内者を頼んで置いて、導かれるまゝ奥の間にゆくと、廣い板敷の上には大事さうに畳を敷敷敷いて、夜具も備へてある。便所に立つて見ると、月あかりに五葉山の一峯が奥深く聳えるのが見えた。

八月五日、昨日の強行の疲れもどうやら恢復して午前六時頃眼が醒める。洗面に出懸けると案内者は既に爐端で待つて居る。其處で早々支度をして、荷物を半分持つて貰ひ、午前八時に出發した。出しなに宿泊料を聞くと、御馳走があれば一兩も貰ひたいが、といふので、二人で一圓五十錢禮金として置いた。

部落の外れに阿彌陀堂がある。地形圖にある點が夫であつて、住持なしの荒寺であるが、此も昨夜の話に阿彌陀様は昔持つて來たものらしく、何でも以前はよく光る眼を持つておいでだつたが、何日の頃か他國の人にすりかへられてしまつたさうな。先年も陸地測量部の人が見て「田舎にこんな立派な」と感心したとかいふ如來様である。畑道を通つて其御姿を拜みに行つて見たが、私達はかういふ方面の智識はてんで持合はせがないので、今何ともいふ事は出来ない。因に云ふが、此邊は陸前國で陸前國は仙臺藩の領域であつたから、或は其方面の古文書を調べたら、多少は、檜山落人の物語や五葉山由來といつたものゝ目鼻がつく事と思ふ。紺野老人も仙臺の藩中とは交渉があつた様な事を云つたが、何にせ當家全部の記録が灰燼に歸した後とて、證據とすべきものが無い。

檜山川の左岸に渡つて段々行くと、一二二八米の愛染山が見えて來る。頂は草地で、頂上三角點の南西には愛染の祠(堂)がある。地形圖で見る通り、檜山と中澤から登山道が通じてゐるが、尙五葉山から九三七米の峠(別に名は無い)を経て比較的容易に峯傳ひに行かれると云ふ。實際五葉山から愛染へかける人も有ると聞いた。案内者も紺野といふ姓で、極めて實直な山人だ。其話に先達でも一人の東京の學生がやつて來て五葉山へ登らうとした處道が分らないので、檜山へ歸つて自分を案内者に頼



影攝氏郎六信高日

峰運ッラアッモるた見リよッバレンア

んで登つた。所が豪雨に降られてやう／＼登山を濟ましたが、それから遠野の方へ去つたといふ。餘談は倍て措き、午前八時二十五分サビヤマ澤を渡る。それから又愛染山が見える。一山越えて同四十五分サビヤマ澤に平行するヤマビ澤に到つて一休みする。今日も中々蒸暑いので平素餘り水を呑まない私も牛のやうに飲んだ。

ヤマビ澤に下つて行くあたりから一段と山道らしくなつて来る。十分の後に出發して山腹の細徑を上つて行くと、周囲の闊葉樹林は物靜かに谷を覗き込んで、頗る氣持がいい。二百米近く登つた處に忽然とまた新しい小屋が現れる。標高凡七百米の處で、此が五葉山官行斫伐事務所といふのである。時刻は九時五十分。小屋の前には確か五葉山附屬の祠があつたと記憶してゐる。出發の時から怪しかつた空は終に雨となつて一しきり下草の表をてら／＼に濡らす。

雨が上つてから草深い道を上ると、小屋の直ぐ上に坦々たる美事な林道が走つてゐる。此は日頃市村の上石橋から檜山の下に出る六郎峠に分れて五葉山の北東面山腹を迂回し、國境を越えて五葉山最高壇の北端に及んでゐるものであつて、林道としては典型的のものであらう。大體六百乃至八百米の附近を通過してゐて、丁度森林分布の境になつてゐるらしい。即ち此の道のあたりから上部に檜が好く繁茂してゐる。此附近の山で檜のあるのは五葉山位で、檜山ヒノヤマといふ地名も之と聯關するもののやうに思はれる。樹齡はさまざま多くない。幹の太さは木曾御料林などを見た眼には著しく貧弱に見受けらる。然し近々この檜も伐採されるのださうで、さうなれば五葉山も哀れになつてしまふであらう。兎も角私達はこの二間幅の山間の大道路を樂々と歩いて行く。藓の類が澤山實つてゐるので盛に食ふ。九時四十五分ハラヒ川の左股なる小さい澤で一休みする。此は八二六米の獨立標高點のある山の東側を流れるもので、道の右手には小さい瀧など懸つてゐた。

午前十時に出發して一つ山の鼻を廻りかけると、其處が五葉山參詣道の起點であつた。割に新しい

立札に、手の形で方向を示して、右方には登山道入口、頂上御本堂迄約參拾町と書いてある。そして中央には「一、樹木ヲ盜ミ傷付ケテハナリマセヌ。一、火氣ニ注意シナサイ。一、森林ハ國家ノ財寶デアリマス、此レヲ保護スルハ國民ノ義務デス。」と注意してあるのは、林區の役人が記したものであらう。然も其に難しい書判がしてあるのは古式で却つて滑稽に感ずる。地形圖にある通りの道を登るのであるが、神社のある山の上迄凡五百二十米の上りである。

一服の後登りかけると、直ちに密林の中に入つて殆ど眞直に、大木の幹をうね／＼と廻り乍ら上つて行く。出しなに檜山川谷から濛々と立上つた霧はすつかり閉ぢこめて、陰然とした山路に無言の行を續けて行く私達に、單調な而も人を追ふ様な幻の音を聞かしめる。濡れた靴が滑り、ゲートルを巻き直すひまに半町餘も離れた私が最後を不安な氣持で上つて行くと、道半ばにしてさつと一雨降りかゝつて来る。海風の餘波に蒸暖い此山の大氣は、もう私の汗をぢり／＼と絞り出し、清水一掬を欲する心となる。それでも頑張つて水の出る處へ着いたのは十時を過ぐる三十五分であつた。

其處は先づ六七合の邊で、とある大樹の根元に何處ともなく水が湧き出すのであつた。休すんでゐるまに雨足は益々繁くなる。もう頂上の見晴しは絶望であつたが、元に歸る心は毛頭なく、稍々緩やかとなつた森林の中を登つて行くと、間もなく喬木の姿は失せて、灌木のむらがり身を取り巻いて来る。其れも一二町にして短い筈と代つたので、霧風を押し破つて進むと、終に山上へ辿り着く。一面の草原、多少の準高山植物が花の色も淋しく濡れてゐる。南西に進む事二三町、其處に五葉山神社が立つて、たまさかの參詣者を迎へるのであつた。午前十一時四十分。

神社は高さ一丈許、花崗岩で造つた相當に立派なもので、社前の鐘を見ると眞享四歳作としてある。周圍は石垣で積んであつて、境内の廣さ凡六七坪もあらうか。相變らず奉納の劔が二十本餘もあつて登山道の悪いのが不思議な位だ。尤も此は東北地方といふヌーボー式の前提を置いた上で考ふべき事

であつて、其他の名山例へば早池峯、岩手の如きも其例に洩れない事を後に知つた。

參拜を済ましたが四邊は灰色の霧に閉ざされて、皆目様子に分らず、其上濡れて立つてゐる内風邪でもひいては馬鹿々々しいから、さつさと切り上げて又元の道に戻る。登つて来た處から高い所を越えろと五六町にして右と左の追分道に來る。右の道を一寸入つた處に假松の影から冷たい水が流れ出て來る。其を飲んで震へながら中食をすます。絶頂の三角點（一三四一米）はこの上の高みにあるが、格別道もないといふので、此天氣で假松渡りは御免を蒙つて、下山と決する。それが午後の零時半である。

大松オホマツに下るつもりなので追分に戻る。此處には今年の舊六月一イチノ渡ト青年會で立てた道しるべが立つてゐる。曰く「右は御殿行道、左は三皇權現道」。道は五葉山最高壇の縁ヘリを傳つて國境に移ると、假松は漸く數ふるばかりになつて、針葉の森林中には岳樺の大いものなど見える。この下りも随分長い下りであつた。午後一時十分林道に出て案内者と別れる。俄かに殖えた荷の重みで肩が痛かつたが、汽車に乗りおかれては豫定が狂つてしまふので、可成に急いだ。森林は人臭くなくて感じは悪くない、それでも雨といふ附物がやつて來ると、只管人里の懐しさがこみ上げて、山旅の心持をしんみり味ふ暇は無かつた。二時三十分漸く一つの澤を渡る。一寸先が分らなかつたが、直に發見して、又長いこと山の背を傳つた。漸く大松の下に落ちて甲子川と合する溪流（名はあるたらうがつかい聞き忘れた）を見る様になると、五葉山の黒い肌は後へに座して、成程山は高いなと旅人の口を開かした。然し雨はやはり空をぼかして、歩む所は悉く濡れてゐる。焼野のやうな山額から二つ三つ小澤をめぐつて行く間、何處かで溪流中の美しい瀑布を眺めた。岩の白さ、水の碧さ、それは此程小さい山には勿體ないと思つた程でもあつた。其内六百澤分レ道とある所を通過して凡十分も立つと、登山道は傾斜も緩やかとなり了つて、其處に一基の御影石の大鳥居が立つてゐる。中々立派である。總じて槍山側より

此方面の方が手をよく(?)入れてあるのは幸ひであつた。鳥居から十分許で溪流に架した丸木橋を渡つた。汽車に乗りこむにはまだ餘裕があるので、しよぼ／＼濡れ乍ら岩の間に挟まつて中食の餘りを平げる。三時四十分に出立して、十五分程で大松のステーションに着いた。

大松から一つ先の鈴子が釜石鑛山線の終點である。私達は二日目に又乗物の御厄介になつて其處迄行き、ステーションからは黄色い煙を吐く田中製鐵所を後にして、腕車を驅つた。宿屋は波止場近くの佐々木といふ家を選んだ。

五 釜石より宮古へ

港の町に来て見ると、久しく離れてゐた海の趣味といふものが湧いて来る。殊に東京で、三陸の海岸のすぐれた眺めや、扁舟を操つて魚貝を漁り、又はトロール船に乗せてもらつて遠く太平洋のまん中に出たり鰹漁をしたりする壯快さを聞かせられた事を思ひ出す時は、私もぐにや／＼と海月の如く軟化してしまつて、一つ氣仙か宮古のあたりに停滞しやうかとも考へた。さうでなくても、松島外洋の金華山を振り出しに海に迫る丘陵を乗り越え／＼、一つ／＼の漁村を訪ねて雲水めいた旅をするのも一興であると思つた。其れには又此海岸の地質學的(及古生物學的)興味もある。人に餘り知られないといふ誘惑の強さもある。仙臺で知合の若い學者は、又海に近い所で鮎を食べたり岩魚を賞美したりして行けるのはあすこだとも教へて呉れた。其の如く、北上山系の東側には瀟洒な谷が幾つも海に注いで、濱邊には切り立つた岩や離れ島の美しい風景がある事は地形圖によつた丈でも充分想像が出来る。若しくは古代人種の跡を探し、村々の口碑傳説を老翁の口に糺して見るのも有益な趣味であらう。(それは柳田氏の興味ある筆によつて大正九年の東京朝日新聞に掲げられた事がある。)けれども私達は「太平洋より日本海迄」といふ單純なモットーの遂行に忙しかつた。時といふものを考へない

で隅の隅まで訪れる事は到底出来難い事に違ひなかつた。

八月六日。海上はシケの爲に汽船の着くのが大分おくれて、出帆したのは午前九時四十五分であつた。船は振興丸といふ二百噸ばかりの小さなもので、海路不穩の場合は安心もしてゐられなかつた。釜石灣を出るともう大波がどどつと舟腹をたたく。海から見た岸の景色は中々捨てがたい所もある。けれども盛にゆられるので船室内の人となつてしまつた。本州中最東端と稱せられる鮭崎の沖を通過する時は最も甚しかつた。さうして綿の様になつた身體を宮古の港に上げたのは其日の薄暮の頃であつた。

宮古町は北上山地中の長流閉伊川の河口左岸に添ふてゐるので、船の着くのは實は其隣の鍛ヶ崎町である。私達は宮古の熊安事熊谷といふ家に三晩泊つた。海岸の事とて朝食からお頭付て二の膳三の膳を据え、三食付て一日二圓もしなかつたのは安價だ。この町は昔から開けた處で、土地の人に言はせると、此處から江戸へでも大坂へでも盛に交通した、その一つの證據には宮古の言葉には京訛りがあると自慢してゐる。京都辯は怪しいが、兎に角岩手縣内では北上山脈の東と西として様子がまるで違ふ。滞在中變つた物も見たし昔話を聞いたりもしたが、今は遠慮して置く。

一日縣立の宮古測候所を訪ねて話好きな面白い所長さんに導かれて望樓迄上つた。宮古灣は此日は少し波立つて往きかふ舟も少かつた。鮭崎の半島(適當の名ではないが)は主として闊葉樹の緑に包まれて、暖い氣に漲つてゐた。その最も高い所は淨佛森(五九三米)から十二神山(七三二米)に續く高臺であらう。其より右に閉伊川の奥には猿壁山(三五〇米)や、恐らく宇根鳥山(五四二米)、サンボトシ頭(六八八米)が見え、漸く小高くなつて行つて、名も知れぬ山々の背後には夕日に輝く薄鼠色の早池峯山があつた。惜い哉、絶頂は雲の中にあつたが、左右に曳いたなだらかな線は美しかつた。之を宮古富士と云つて、宮古の町からは富士形に見えるといふのである。所長さんは木挽町か二長町で使

ふ様な舊式の遠眼鏡を持つて来て、早池峯山が見える日はいゝなどと私達山黨を嬉しがらせて呉れた。なほ同氏の話によると、此邊の山民は全然果樹の栽培などいふ事には無知で、天然のまゝの小さい梨を食ひ、栗を拾つて間食とするのである。其未開地も今は盛岡から直通の自動車が出来たので、先づ酒といふものが入つて来る。化粧品が入つて来る。此間も宮古の北の田老村の炭焼の男が、一圓にも足りぬ日當を麥酒と罐詰に換えて行つたさうだ。それでも「そりや原始のまゝですよ、これからずつと北の方へ行くと、冬が来て青い物がなくなるとヤドリギを取つて汁の實にする村があります。」といふ。何でもあの飛驒の白川村をつくりな大家族式の村落も現に二三ヶ所見られるさうであつた。

六 宮古より小國村へ

八月九日。鶴首して待つてゐた盛岡からの自動車は此間の荒れて道がこはれた爲か終に來ない。馬車があるといふので聞いて見ると、實は荷馬車の上でがた／＼躍つて行くのださうで、それなら矢張親譲りの脛を利用した方が利口さうだ。其處で私達は午前九時に宮古の町を離れて、うすぐもりの山には霧のかゝつた盛岡街道を西に向つた。

上鼻の先から閉伊川は一時身に迫つて来る。此の川は多摩川の様の下流らしいものは極く僅かであつて、河口から一里牛も過ぎない此邊ですら、波立つ瀬の上を時には大小の材木が押し流れてくる。上根市から山添ひとなつて暫くすると地圖に記された門神岩の下に出る。其處に門神様といふのがかゝつてゐて、橋上から仰ぐと、圖に示した程恐しげではないが、むき出しの岩壁がごつ／＼と聳えてゐる。門神様はどんな豪い神様か聞いて見やうと思つたが、街道で會ふ人は誰も教へて呉れなかつた。花原市ハナハラ、下川原等を過ぎてから／＼の墓目川ヒトメを渡る。柴野で十二時となつたので行きあたりばつたり一軒の茶店に入りこんだ。茶店に休んでゐる人夫達は暑さ凌ぎにも酒を飲んで、中には陽氣に唄う

たふ者もあつた。茶店の側から小さい谷を溯ると凡五町で墓目金満鑛泉場といふのがある。其湯は透明で金創に效力があるさうだ。今朝通つて來た門神岩の附近にも鑛泉の記號を讀んだが、其はつまりない所だと店の人はくさした。

午後一時柴野出發。此日は雨が降つたり晴れたりして、蒸し暑い事此上もない。I君は茂市で絲立を買つたりした。其處は刈屋川といふ大きな支流が落合ふのであつた。茂市を過ぎると川の景色は漸くすぐれて來る。震地、震屋、腹帯などいふ小字がある。その中でも震屋附近の對岸は山の形が南畫を見る様で、紅葉の頃には俗客の賞讃を受くること請合である。といつて自分も仙人といふ柄ではない。聊か目先が變つたので喜んで岸へ腰を下ろし、近くの釣師と話を交したりする。川の水はこの雨續きで頗る濁つてゐる。流れ來る材木はからんころんと打ち合つて、其音の面白さは私をして忽ち即興詩人たらしめた。然し此處でもまだ鰻がとれるといふのだから、本統の山には遠かつた。又歩き出して三ツ石に來た。その手前で對岸の澤を見上げたが瀧は見えない。唯其落口は林の内に吊り懸つて奥山らしい深い趣があつた。東洋林業株式會社岩手事務所といふ建物が三ツ石にあつた。其附近は川が甚しく屈曲してゐる處で、それをぐるりと大迂回して行くのは足をやむ身に苦痛であつた。私は恰も夢遊病者の如く何も忘れて川井の村へ入つて行つた。そして澤田屋といふ汚い宿屋に入りこんだのは午後六時半であつた。川井は宮古から九里半もあるのであつた。

八月十日の豫定は閉伊川の支流小國川の谷に入つて、それより更に藥師川谷に入り近づける丈早池峯の絶頂に近づきたかつたのである。けれども其日は全然雨の一日であつた。私達は午前十時半といふに出かけて三里足らずの小國村字江鑿迄歩いて行つた。因みに云ふが宮古盛岡間は自動車なら一日ですむが、歩くと先づ三日はかゝる。そして泊る所は川井、門馬と二ヶ所が普通であらう。この川井は峽間の宿ではあるが、蘆花氏の小説寄生木に現れた地名とかで一才知つてゐる人もある。村には郵便局

があつて電報もきくのは思はぬ便利であつた。

宿屋を出ると秋田木工製板所といふ建物がある。それからしばらくして閉伊川を渡る所には八幡神社がある。對岸へ渡る橋は河井橋といふが、先日の洪水で眞二つに折れ、今にも落ちさうになつてゐた。私達は其を渡つて相變らずレーンマントにくるまり、南を指して行く。戸草橋を渡つて小國川の右岸に添ふと、又雨がひどく降つて来る。川は岸から小深く落ちて、流は山川の濁りを見せてゐた。深戸の先で石垣にもたれて休み、夫から繋ツナギに行つたのは十二時頃であつた。宮古巡查宿泊所と書いた家に休んで菓子など食べる。川の水は平水より四尺の増水ださうで、對岸の丸木橋は流されてしまつてゐる。裸の男が麥酒瓶か何かを背につけて泳いで渡つたりした。凡三時間も遊んでから出かけて石川を渡ると、其處に建岩といふ岩がある。薬師佛を祀つてあるといふ。それから凡一時間ばかりで薬師川を渡り、橋の側の小原旅館といふのに泊り込んだ。

宿の主人は此邊での金持で、東京へも商用で出かける事があるといふので相當に話が分かる。其言に據れば薬師川の橋は三つばかり流されてしまつた。御覽の通りの荒川だから徒渉は難かしい。本流の水が引いてもなほ一日は常態に復さないから、もう一日御滞在なさいと云ふ。そんな譯で、次の日は七分通り青空であつたが、尻切草履をはいては度々橋の上に出かけ、薬師川の水の濁りが澄んで來、沈んでゐた石が顯はになるのを待つたりして暮らしてしまつた。

尤も其日午前中に對岸の不動の峯へ遊びに行つた。其處は江繋の宿から百二三十米も高まつた小尾根の瘡で、一つの大木の下に不動の祠がある。祠よりも小高く拜殿めいた四阿風の建物があつて、其縁に腰かけながら早池峰のあたりを眺めたりした。頂はなほ雲に隔てられたが、薬師川溪谷の岸をなす山は劔ヶ峯のあたりまで見えた。谷の奥は總じて黒い針葉樹におほはれて、其が私達の選んだ登山道を隠してゐるのであつた。明日は祭だといふので麓から何人となく村の人を見たが、此處へも珍ら

しさうに十數人集つて來て、中には私達の間に答へて呉れるものなどがあつた。其男は、この不動の峯の左右を流れる澤がニライナイ澤、タノカゼ澤で、この上の三角點のある山は大澤ノ大森といふ事や、茂市村との境には關々子森といふ山がある事や、尻石川の奥の蓬平を東に下つて行くと廢鐵になつた金山がある事や、その蓬平はヨモギタワといつて、ウチダケ澤から通ることが出来る、タワといふのは山の間の廣い平らな段をいふ事、其他の例には桐内澤から横澤に越える所にタモンタワといふのである。又、薬師川の上流にはタカビ澤やアンギョウカヒ（獨立標高點七七五の北東？）といふ大きな澤がある。タイマグラの對岸の高原はシクの平といつて牛馬を二百頭も放し飼にしてあり、その平から天野山にも登れる。アマノハラといふのはシクの平に隣する地である事などを話して呉れた。又一人の男はこんな物語を話した。昔、岩手、早池峯及び六角牛の三山の神々は三人姉妹であつた。ある日野原に出て晝寢の夢を食つたが、其前に眼が醒めてから第一番にれんげの花の咲いたのを見付けたものが早池峯に登る事と約束した、所が下の妹がその榮譽を勝ち得て早池峯の神になつた、そして上の姉は岩手山に、次の姉は六角牛山の神になつたといふ。この三山は俗にせつたを片方立てた丈高さが違ふのだといふ。現今の智識で考へると、岩手、早池峰は其標高から先づ姉妹とも見る事が出来るが、僅に千二百米餘の六角牛山が仲間に入るとは可笑しい。けれどこの三山には何か迷信的關係があるものであらうか。今の早池峰山の神様は権現様で、これには亦奇怪な鬼神的説話が附隨してゐるやうだ。不動の峰でも大分聞かされた譯だが、第一言葉がよく分らないので今は殆んど記憶してない。なほ又辻褄のあはぬ山民の話を無理にも統一しやうとすると尙ほ更變なものが出来るに違ひない。

午後になると薬師川の水も大分減つて行つた。I君晝寢の間を山國村迄煙草を買ひに行く、道々遠野へ越える峠あたりの低い山脈が見える。小國川は小國の宿へ來ると著しく貧弱になつて、見る影もない。用事をすました私は、鶏頭山大圓寺といふ寺で一休みして、再び江鑿に歸つて行つた。

七 藥師川谷より早池峯登山

早池^{ハナナホ}峯^ネ山の紀行は以前本誌にも紹介されたし、又かういふ名山になると各種の記事が其れ相當の專問雜誌や、古文書にも載つた事であるから、私は藥師川道を説明するの他は贅言を呈すまいと思ふ。早池^{トク}峯山に登る道は大體四つある。其内最もよく知られてゐるのは門馬^{カドマ}からするものと、遠野^{トウノ}からするものとの二つである。そして他の二つ即ち藥師川からするものと岳川^{トクガハ}からするものとは、主として交通の不便から試みる人の至つて少い事は、一面に於て私の様なものの目がけるに適當な秘境でもあつた。遠野から來るものは長い道であるが、岩手輕便鐵道が遠野町を通過すること、及び森林を縫ふて山から山へと辿り入る事が特徴である。門馬からの道は半ば御山川の幽谷に添ふてそれから約九百米の登りであるが、此は遠野又は藥師川道に比して傾斜が急である。岳川の道は遠野道の大半と共に私の未知のものであるが、岳^{トク}(地名)から鷄頭山、毛無森、中岳、白森山等の早池^{ハナナホ}峯連山に登るに最も便利であらうし、七七折ノ瀧、笛貫の瀧等を見物し得られるのも特色である。其道は河原坊から、四道中最急な傾斜を上るもので、この他に小田越(小國村ではオホダワと云ふ)に出て遠野道に合するものが地圖に記されてあるが、此は私の見る所では、今は廢道になつて荆棘中に没してゐる事だらうと思ふ。最後に藥師川の道は殆どその源まで峽谷に添ふて、傾斜も緩やかである。然し小國村の信心は他よりも簿いと見えて、道の手入れが悪いから、案外に時間のかゝる道と思つてもらひたい。

八月十二日。不動の祭といふので案内に行く者がなくて困つたが、漸く泉澤榮吉といふ酒も飲まず煙草も嫌といふ男を探してもらつて山に向ふ事になつた。午前七時三十五分江鑿出發。登山道は藥師川の左岸に通じてゐる。その入口には早池^{ハナナホ}峯大權現の大石塔(安政三年建)を始め、蠶供養塔(同上)、西國順禮塔(嘉永四年建)、金毘羅大權現(同上)及び天照皇大神宮、八幡大菩薩、春日大明神の三神を

記した一基と、都合五基建つてゐる。其外小さいもので靈神、馬頭觀音の幾つかがあつて、宛然神佛陳列店の觀がある。かういふ雄大にして雜然たる光景は東北地方一般に見る所でもある。暫く河岸に添ふて行くと、道は人家の間に入つて、鎮守の八幡社や稻荷社の前を通り、向田の對岸に出る。大畑の橋が落ちてゐるといふので、案内は先に立つて河岸の石の上を飛んで行く。大畑から神樂に到ると又も人家の間から、土地の者でなければ知れない様な山道を分けて、左岸高く上つて行く。これ迄見た藥師川は幅二三間乃至五六間で大して深い谷とは思はなかつたが、其時見下すと山は迫つて美しい峡谷といふ趣がある。山道には躑躅の種類が多く、春はさぞ美事であらうと思つた。その感じよい小徑は岩井船山の一つの支脈を越えて、再び谷添ひの道に合した。其處は神樂から上流の谷の水が大廻りした鼻の先で、最早澄んだ碧い水が白い岩床に轉々として行くやうな所であつた。川ぶちには林がはびこつて淡緑の光が人の眼を幻惑する。日光の直射する所も、いら／＼しさは水音に消されて、私達は安樂の微笑を禁じ得ない。

斯うして快い旅路の最初の休場として選んだのはテッタイといふ、早池峯神社の石祠のある所であつた。小じんまりしたイワガンケの穴の手に道から三四尺小高くその祠があつた。小さな鳥居の額には自然石に、何の事だか分らないが、「月日乃大和高」といふ文字が彫られてあつた。傍には冷い清水が溢れてゐる。私達は有難く一掬しながら目前の谷の優美な水の躍りや、明る白いタルの水沫を眺めたりした。此處へ八時四十分に着いて、十五分の後に又歩き出した。其處から一人の牧場の男が連れになつた。

テッタイから川岸に稍々遠くなつて、水の面は樹間に隙見するのであつた。水の動きの面白さは鎮まつて、思ひなしか林間を洗ふ淺い瀬ばかりのやうに思はれる。道は次第に上つて、羊齒の多い山の裾を越して行くやうな風であつた。其處の一本の栂の根元に、悠々と草を食む牛の二、三頭を眺めた時

は、呑氣な日だなど笑つた。何處か古い國の王の命令か何かで約束通りの道を急いでゐる様な童話的ロマンスを思ひ出したりした。マンバタ澤とかいふ忍びやかな澤を渡る頃には連れの男はゐなかつた。それはあの牛のゐた邊で別れて草の繁みに身を没してしまつたのであつた。羊齒の多い原は可成り遠く續いて、又一山越えてまはると、其邊に作畑や小屋などが見えた。對岸に人家のあるのを見たが、其が薬師川を右岸に渡る所であつた。私達は岸に立つて流の様子を探つた。愈々徒渉を初めると流は中々強く、水深は股を餘さなかつた。成程早池峯といふ大岳を背景にする谷だけの事はあつた。此處も橋があつたのであるが、今はその殘骸を留むるばかりである。

徒渉は九時四十五分の時であつた。それから私達は腰から下が濡れたまゝで狭い道を進んで行つた。凡三四町で一つの澤を渡る。其邊から土地は殆ど平らになつて、澤筋に添うて一軒の小屋などが見られた。無論作畑のもので主は不在であつた、此附近が前日教へてもらつたアマノハタといふ所である。それから又數町で一つの澤を越すと其上がシクノ平といつて、天野山の山際から感じの柔いスロープをなして草地が谷まで續くのであつた。(因に云、シクノ平入口の澤及アマノハタの澤は共に水線を入れる程の大きい澤ではない、もしその記號を用ふるとすると、マンバタ澤や其他此迄の薬師川左岸の澤にも同様の資格を與へなくてはならぬ。)

シクノ平の東端、道の傍には早池峯山の遙拜殿がある。其處へ着いたのは午前十時で、私達はシャツをぬいで乾したりして、その間、山を眺めた。折よくも峽間に開けた高原の一角から、目指す早池峯連山の一部がすぐれて見える。劔ヶ峯は岩があらはれ、まつ黒な薬師岳は谷の奥に端然と坐してゐる。その前山には高檜澤の頭の邊や、志和須森の半面や、又天野山續きの草生の山肌などが見える。何といふ静かなつゝまじやかな山脈であらう、谷は森の中をうねつてはゐるが、その岩床の花崗岩の爲に明る照つてゐる。茲には燃えるやうな緑の深い闊葉樹林や憂鬱な黒木の森はなくて、山は森に、

森は空氣におだやかにくるまれて白い夢を見てゐるのである。早池峯の絶頂は劔ヶ峯の左に重つて見える筈であるが、休憩中につひに晴れて呉れなかつた。(薬師川から早池峯山に登る時にこのシクノ平で一泊したら面白くもあり又登山が容易であらうと思ふ。)

十時十五分。シクノ平を西に向つて、左に牛の群を見乍ら林の中に入る。この邊は牧場になつてゐるので一寸道が分らない事がある。只、タイマグラには向はない様にすればいい。道は細々と熊笹の間や、木々の下を通りぬけ、やがて薬師川にびつたり寄り寄る様になるが、水の流は少し外れなければ見えない。丈も餘り高くない闊葉樹林は長く先へ續く。傾斜は至つて緩やかで山道とも思はれぬ。そしてブナの木はあちこちにはびこつて、下草は又少いのであつた。案内の話によると、此邊は一度手を入れた所で、林區のお役人が矢張り同じ雑木の苗を植えて行つたといふ。ブナの平を通過すると天野山の西から出るネグサ澤といふ一寸した澤を渡つて、それから針葉樹がそろ／＼現れる。依然として平らな上りで、私達は心地よさに一休みもしないでカザノメ迄行つてしまふ。其處は一つの小澤を渡つて一寸上つた所で、小さな祠がある。昔早池峯の権現様が此附近で生れたのだといふ。十一時二十分。

カザノメからは森林は大體、針葉樹が半ばを占めて来る。暫く行くと一澤を渡つて、七七五と地形圖に記された本流の渡り場を越す。薬師川の上流は檜の多い高檜澤に分かれ、アンギョウカヒ(位置不明)に分かれると、もう小ざつぱりした山間の小溪に過ぎない。それでも水は石に激して、あちこちに渦まく流も見られるのであつた。本流を渡ると、漸く上りらしい上りとなつて来る。笹の高いのや、倒木が現れて登山道は稍々曖昧となつたが、私達は例によつて足先で探つて、しばらく奮闘した。そしてその六尺餘の笹の間から眼前が開けると、其は薬師川上流の右股の澤であつた。時刻は正午過であつたので、私達は水際に飛び下りて、滑らかな花崗岩の大塊にもたれて、晝飯を取り出す。こ

の所、澤は階段をなして、最早下流に見るやうな溫和な相貌は見られない。瀧といふ程のものもないが、岩を嘗めしは飛下する水の勢はいつも私達が恐しく想像したがる水上の光景そのものであり、又同時にそれは豫想以上に美しい谷の奥であつた。

午後零時三十五分出發。その澤からどういふ風に登つたか忘れたが、要するに私達は道の跡を拾つて行つた。あたりはもう純然たる針葉樹林に變つて、所々下草の笹が高かつた。但、傾斜は息を切る様な事もない、立派に刈り拂はれてゐたら、何時どんな所を通つたか忘れてしまふ位容易であつたらう。私はその何處かで薬師岳の落付いた姿を望んだ事を記憶する。澤の音が遠くなつて、何となくひっそりして來ると、私達は遠野からの道に合した。其處は海拔凡千二百米許の處で、遠野道だけよく刈つてあつた。間もなく大ダワ（小田越）に着く。午後一時二十分。其附近一帯は殆ど平らで、何處からともなく森林の中を清冽な水が湧いて出る。案内者は之を「せき」と言つてゐたが、私達は最後の小流で水筒に水を詰めて、上りにさし懸つた。大ダワに來た時から注意した岳川への下り道はつひに見當らなかつた。

大ダワからの上りは七里河原といつて、藪に包まれた薬研の底の様な道を行く。背後に黒裝束の薬師が隠見する。傾斜は漸く急を加へて、森林は全く白檜帯の上部となる。藪はなくなつて四邊がすがすがしくなつて來た。其處に御門の口といつて山登りする人の草鞋の脱ぎ場があつた。午後一時四十五分の事である。白檜の根元の石の上に腰を下して一服してゐると、霧風が岳川の谷から舞つて來る。あはて、私は南の方を眺めやつたが、そこには五葉山と思はれる山足の伸びた一山が、幾重の山脈の間に秀でて見えた。

御門の口は海拔凡千三百八十米の邊と思ふ。其處を五六問進むと、矢庭に眼前は開けて、一面に岩の山が霧の中にぬつと立つ。薄い借緒色の丁度滑石を柿澁で染めた様な岩が、筈の様に又は養ころの

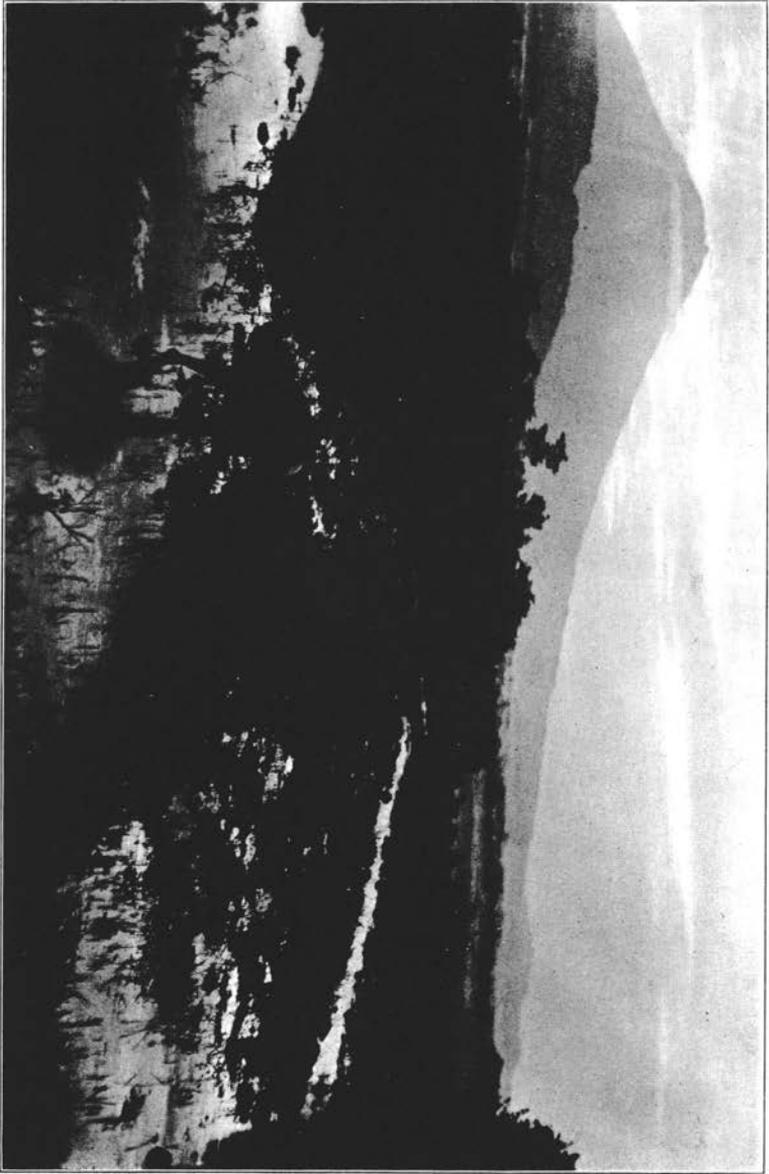
様に其處此處に積み上つて、短かい假松は風におびえ、砂礫の間に縮こまつてゐる。私達はだしぬけに天上の舞臺に投げ出されたのである。若し白檜、假松や赤い岳樺の林から自然に移つて、假松の海を泳ぐものなら、當然である。が、早池峯のこの南面の植物帯の變化の際どいめまぐるしさは、恐らく其處を訪ねた人でなければ信ずる事は出来ないであらう。其は全く二千米にも足りない山としては傑作といつてもいい。

私達は漸く氣が落ちつくと、しづ／＼と上りながら振りかへつて、下の大ダツヤその向ふの薬師岳（二六四五米）を眺めた。岳川の谷は霧の湧く所で、其様子は知れない。薬師川の方は可成下の方が見えた。まもなく一合目の石がある。それから四合目までは水氣のこもつた嵐が吹きなぐつたが、遂に霧雨となつて降つて來た。私達は萬一頂上で晴れるかも知れないといふ情ないことをあてにして、反り上つた早池峯山の胸をめぐりてゆく。高山植物は燎爛とは言ひ難いが、あちこちに群落して眼を樂しませる。大分種類が多かつた様であるが、此處の特産たるハヤチネウスユキサワはつひに登山を終る迄一本も見ると出来なかつた。或は採集し盡されたのでないかと疑つた。私達は其後駒形山の頂で夥しく其花を見たので再び驚いた。其等は後の事であるが、私達は其時磊々たる岩石を攀ぢ登つて益々頂上に近づいてゆく。蟬慶手ずりの岩といふ急所がある。又象ノ鼻といふ奇岩がある。其處で小休みして登ると息苦しくなつて來たので、めぐり岩といふ所で又一休みする。かうして八合目に達すると漸く霧がうすれて、とう／＼日が照り出した。あたりの岩の立つ様や、草花におほはれた傾斜地が、其爲に感じよく日に迎へられた。道の跡は西に向つてなだらかとなり、植物の種類も純高山的になつて來ると、遂に山の上に出た。絶頂は其處から西に寄つてゐる。私達はうらかな平らな山上から劔ガ峯を背にして、頂上に向ふ。山の北側は森林が簇々と押しよせ、危く首を縮めて南側からの強い風を凌いでゐるやうな所である。登りかけた時の豪壯の感は山上のおだやかさによつて大分打消さ

れしまつたが、そのたるみの真中に、絶頂はやはり我物顔に岩石峨々として小高く聳えてゐるのであつた。私達は豫定よりも一時間半もあそく、午後二時四十分といふに早池峯山頂上（一九一四米）の神社の前に着いた。

頂上には堂々たる新嘗二棟の神殿がある。廣さは新宮の方で二間四方位あつたかと思ふ。其中やあたりの岩の上などに飯粒が夥しく散亂してゐる。此は此地方の風習で、御供物として信者達が持参した握飯の餘りを捧げてもいゝのださうである。けれども私達は飛騨山脈の例に見る様に、行儀のわるさには神經質的に嫌惡の感を催うすものである。此食ひさし進上のきたならしさを除いては、餅が少しく大き過ぎて却つて尊嚴を缺く恨みはあるが、絶頂の感じは頗るいい。第一に吾々が主要の條件とする眺望の廣闊と、大岩石の曇々たる奇景と、避難所休場が程近くある事との三つを備へゝゐる。水は湧いてゐる所はないが、頂から少し西によつて、岩蔭の窪みに溜つて天水がある。自分の姿をうつすといけないとかで柄の長い柄杓を添えてあるのが面白い。生憎雲が多くて見晴らしは上の部とは行かなかつた。岩手山さへありかが分らぬ。然し此も都合によつては探つて見やうと思つてゐたサクドガ森（二三六一米）、害鷹森（一三〇五米）、上松森（一二五一米）、堺ノ神岳（二二一九米）——最後の二山は見えるかどうか少し疑問である——等、閉伊川、大川の間にある高原状の山岳を見る事が出来た。其等の山は北東にあつて、特徴ある屋根形の廣闊な頂を見せた。これこそ北上山系地貌のタイプカルなもの一つで、相當に高度を持つてゐる一連の山岳地である。

私達は岩の頭に坐つて、霞む山々や閉伊川、御山川の谷を眺めたりして一時間許遊んだ。案内者は此處から小國村に歸す事にして、午後三時四十分頂上を辭した。案内賞は三圓で、此は宿からやるやうにしてをいた。序でに言ひ忘れた事だが、三角點標石は新殿の一寸下にある。柱は雨風に朽ちてゐたが、それでもなほ勇者の如く立つてゐた。門馬からの登山道はよく分つた。岳川からの道は頂上の



藏 氏 信 田 武

山 ソ ビ ソ ス 蛙 瓜

そば迄登つて来るもので、一目して其急峻さが分かる。絶頂から下りて一町程東の所が其分岐點で、私達はそれから直ちに偃松や白檜などの混生した矮林中を下つてゆく。それは忽ちに滑らかな岩上を渡つたり、禿げた所を通つたりする。此側も凡そ千三百米位の所から偃松が現れてゐるのであるが、南側のピンからキリまで高山的なむき出しな光景に比すると、針葉樹や小灌木が多くて、いやな所であつた。道は其の茂みに分け入り全く身を没する事もある。そしてその急さは又北側の方が優つてゐる様に思れた。喬木帯に入ると又も雨が降つて來た。林道に出るまでは中々遠い。ある所で間違つて澤を下りて引き返したりして大にまごつく。午後五時二十分御山川の支流を渡つて林道に出る。久しく林區の役人も來ないものか、又登山者の少い爲か、その一間乃至二間幅の大道もオホバコ、ノブキなどの餘りうれしくもない草が繁茂して、かすかに足一筋分けられてゐるばかり。私達は日の暮れるのを恐れて只管急ぐ。左手に見る谷は山が迫つて、木々は高々と茂り、陰森な影に満ちてゐる。美しい小瀧が二三ヶ所に見られたが、それは停つて恍惚とするには餘りに暗かつた。私達の心がせいた故もあるが、この谷は明るい優しげな薬師川に比べると、森深く山を削る溪水の恐ろしさが身に沁みる様であつた。御山川本谷に入る林道の岐れ道に來て見ると、其の釣橋は落ちてゐた。地圖に示された小屋も存在してゐなかつた。本谷を下つてゆくと稍々明るくなつて來る。牧場めいた柵が道を遮る事がある。かうして邊は闊葉樹林になつて、傾斜も殆んど平らになつた。六時十五分、門馬へ近道の分岐點迄來たが、其先の橋があるかどうかは分り兼ねる。暫く休んでゐると、草を背負つた男が二三人やつて來て、近道の安全な事を教へて呉れる。そこで私達二人は再び腰をのびして御山川左岸の小徑をついてゆく。小さい峠を一つ越すと、直に閉伊川の谷へ下りた。それから危い橋を渡つて、門馬の引屋敷孫太といふ、農家で宿屋を兼業してゐる家に入つたのは、午後七時間近の頃であつた。

八 門馬より盛岡へ

川井といひ門馬といひ、其旅舎はうす暗く、食物は粗末で、到底山に向ひ山から下りて来る者の喜ぶ所ではなかつた。然し此街道の終點宮古といふ所は、鹽釜から船で行くのが便利であつて、本國の盛岡との間二十七里といふものは、いはゞ行商人や山間の土民が旅するに過ぎない事を考へると當然かも知れない。

八月十三日。午前八時二十分門馬を出發、盛岡迄格別の事はないが二三氣の付いた事柄を擧げて見る。街道は主に閉伊川の左岸に沿うて行くが、水源に高山又は深山を缺いたこの川の景色は平凡である。そして田代の附近から區界峠(七五一米)迄は、屢々北海道に見る様な一直線の長道を歩かせられるのは閉口であつた。けれども區界峠の手前の邊は一寸感じがいい。軍馬補充部出張所のあたりから左右はずつと天然の闊葉樹林で、細くなつた閉伊川上流を右に左にして、殆ど目立つ上りもなく其儘峠の上まで行つてしまふ。兜明神岳(一〇〇七米)は大分手前から奇抜な頭を擡げてゐるのが見えるが、その麓に明神橋といふ橋があり、橋から稍々進むと右手對岸の兜神社に入る道がある、これを上つて頂の岩の上に立つたら眺望がいいだらうと思つたが、頭には樹も少からず生へてゐたやうだから、實際はよく分らない。私達は明神橋に十時四十分に着いて、二十分許休でから、神社にはよらうに區界峠の家のある所まで歩いて行つた。それが十一時半であつたが、私はその峠のゆるやかさや、閉伊川上流の森の間にかくれるおだやかな姿を珍らしく思つて、王君を促し、その茶店で中食した。肴がなにかといふと、三途河の婆をはきだめにぶちこんだ様な老婆が、きたない萬年前垂で皿をぬぐつて、サメノハラシ(鹽漬の鮫肉)といふ珍物を切つて出して呉れたには閉口した。又其不味さ加減といつたら、可成の惡食をやつて來た私の口にも二度と入らなかつた。

午後十二時四十分此處を出て、二三町行つてから近道の舊道を下つて行く。中村まで出ないで新道に上つて、梁川を通り、谷ぞひの道となる。もう三時の頃であつたが、其間の暑い事は今だに忘れられない。街道が梁川の谷に沿ふやうになると、所所人夫が集つて先日の洪水で崩れた所を修繕してゐた。私達は屢々其様な所を下りたり、上つたりして進むのであつた。午後四時頃川目を過ぎて福名^{フナナ}の對岸に行くと、的にしてゐた温泉宿は今はないといふのであつた。其處で私達は重い足を引き摺つて、それから一里半の盛岡迄歩いた。市に入る時、夕日は岩手山を赤く染めて、この漠とした南部の城下の背景を飾るのであつた。それはたしかにすぐれた山である。そして其の左手には遠く、數日の後に登らうとする駒形火山の連山や、不恰好な鐘を伏せたやうな南昌山、其他の低山脈が、各自様々の趣を示して山の肌を私の前にさらすのであつた。此が私の「北上山地の旅」の最後の場面であつた。

(大正十年八月下旬) (終)

雜錄

○船上談山

机上談山と云ふのがあるが船上談山も差支なからう。机上に頰杖をついたり船の甲板の椅子に寝轉び乍ら、山の熱を吹き立て、登つた様な気分になるのも、吾々の様な老(?)登山者には許されさうなものだ。

日本の高山大澤では吾々の祖先や先覺が付けて置てくれた名があるにも關らず、日本アルプス等と云ふ呼び方が流行になつて來た。其本は山岳會の先輩諸氏が矢鱈に之等の高山大澤を跋涉し、隨喜の涙を流して「日本のアルプス」等と世に紹介し出したるにもある様だ。近年になつては老若の猛者輩出して、狭い日本内地には殆んど處女峯處女谷と云へる所がなくなつた様な始末である。そこでわざ／＼困難な尾根や谷を上下して新しがつ

たり、若い登山者が鼻であしらう低山淺谷に遊んで見たり、地形地質動植物等の細を穿ち、古文書文献の考察を記述したりして、追々と「山岳」の記事が研究的(?)になつて來ると同時に其發行が遅れ勝になつて來た。一方内地の山で満足出來なくなつた會員中には、印度歐洲北米等の山に遊ばれる人もあつて、追々と海外の山に手を出す、否足を出す様になつて來た。甚だ結構な事である(雜誌發行の遅れるのは結構でない)。而してまだ「吾々山岳會々員によつて、前人未踏の「エヴェレスト」に先鞭をつけるとか、極地や亞弗利加内地の前人未知の山岳を世に紹介するとか云ふ様な、世界的の仕事がなされるのは前途遼遠である様に思はれる。云はゞ我山岳會も國際的にはまだなからぬ一等國にはなれない様に思ふ。特に自分等の様な遊山の氣分の登山者が駄文を草して機關雜誌の埋草を作らなければならん様では甚だ心細い次第である。

話が太分横に逸れたが、要するに會員中には之から海外に登山旅行をされる人も追々増加するこ

と、思ふ、例へば歐洲アルプスへでも登りに出掛
るとすると、支那海・印度洋・紅海・地中海等を航海
せられるであらう。山猿が海に浮んで毎日水計り
見て居るのは眞に心細い。W. Irving は其著書 *The
Yorngo* に大洋の航海は實に人生の *Blank Page* だ
と云ふ様なことを書いてゐるが、船に乗つて連日水
又水となつて來ると、舷側から飛出す飛魚の行衛
さへ、變化を求める吾人の心情は之れを注目の的
とするのである。地平線上に陸影を見出した時、
況てそれが吾人の渴仰する山嶺線である時、吾人
の心は先づ踊るのである。

内地に居つて吾人は普通の人の知らん様な山の
事を知つて居るので一寸山通の様に見える。然る
に此山通が足一度國外に踏出すと、其人が地理學
者であるとか、特に必要があつて其地方の取調を
された場合を除けば、其有する山の知識が昔中學
時代に教へてもらつた萬國地理や地文の知識以上
には出ないのであるから眞に心細いのである。目
地的の歐洲アルプスに就ては日本を出る前から相
當な豫備知識を得て居ても、今目前に浮んだ山容

に對しては何等の知識がないのである。歐洲渡航
案内記の様なものゝ澤山あるが山に關する記事は
甚だ不完全であるからあまり役に立たない。山岳
會の會員で自稱山通が目前に浮んだ秀麗な山嶽の
名も知らぬとあつては、いくら心を踊らそうが腕
こゝろがあまり工合のよい圖ではない。

自分は今迄吾々とか吾人とか云ふて人事の様に
書て來たが、會員諸君の中にはそんな馬鹿な事が
あるものかと思れる方もあらう、而し又多少なり
同感の方もあると思ふから、吾々等と云ふことを
許してもらはう事にする。吾々等と云ふが實は自分
の事を他人様迄押廣めて云ふのだから全く不屈な
次第である。自分がアルプスに遊んだ時不用意で
あつた爲此様な失策をやつたから、後遊の方々の
御參考に郵船會社の歐洲航路で船の甲板から見え
る著しい山に就て御話して見よう。自分は此航路
は只の二度しか通らないから、天候や夜中通過や
航路等の都合で見なかつた山もあらうから、此話
が其全部を盡して居るのではない。又前に御斷り
した様に何等の用意をしなかつたので參考になる

のは船にある海圖丈である、海の圖で山を見るのであるからあまり正確でないかも知れない。山を見た位置も船が動くものであるから其時の經緯度なり陸地目標に對する船の Bearing なりて示さねばならぬのだが、そんな法は素人向でないから船の大體の位置を云ふ丈にして置く。それから山名や地名や標高等も後で相當に取調べて正誤すればよいのであるが其暇もなし、又地名山名等を羅馬字で表すのに其綴り方が必しも英國製の地圖や海圖の様に英國流に綴つてない、どれが正しいのかわらんから（恐らくどれも正しくないのだらう、それだと云ふて各の土語土字で表すことも出来なしいし又讀む人にも分らんと思ふ。）船の中で見た海圖に書てある綴方によることにして置く。其方が「船上談山」と云ふ表題にも叶ふ様だ。何卒後遊の會員諸君が追加訂正せられんことを切望し、尙此記事によつて豫め内地に於て取調べられ、十分の知識を持つて之等の山容に接せられたならば、興味も一段と深い事だらうと思ふ。

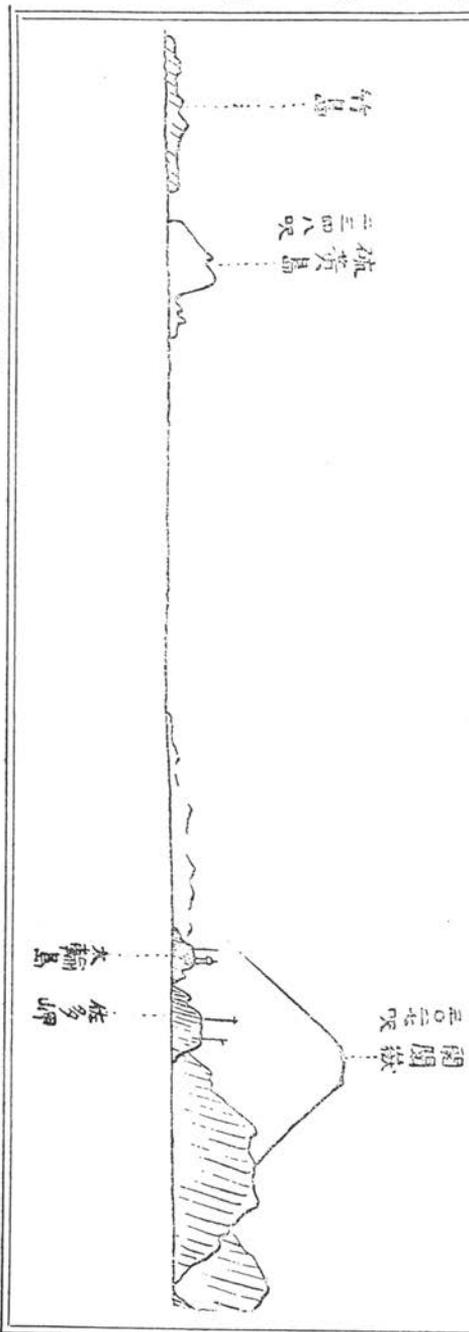
郵船會社の歐洲航路の起點は横濱である。横濱

から遠州灘、瀬戸内海、玄海灘を経て上海に向ふ。途に神戸と門司に寄港する。遠州灘から富士を見るのを始めとし、内地の山に關しては會員諸君先刻御承知の事と思ふから書かぬ事とする。而しよ／＼故國を離れる時見納めとなる山は何であらうか、馬關海峽を出て玄海に浮んで製鐵所の烟棚引く上に帆柱山を見、壹岐や平戸の平な島山で故國を見納めるのは、あまりに感興がない。載炭のための門司に寄港せずには神戸から直接上海に行く時は、土佐沖を通つて大隅海峽に掛る。大隅半島は猿猴の足に相當するが、其足の裏の所に枯木山（三〇八八呎）と云ふのが海に迫つて居る、名は枯木だが樹木が黒く見える迄繁茂してゐる有様は、此航海中南洋に達する迄、支那大陸の秃山計り見て居らねばならぬ吾人には勿論、反對に支那から日本に來て始めて此邊の山を見た目には、實に東海の蓬萊山不老不死の仙薬でもありそうに見えよう。大隅の南端佐多岬の大輪島の燈臺を眞近に望む頃になると、岬の上に薩南の名山開聞嶽（三〇二七呎）が夢の様に浮ぶ（第一圖）左舷には扁平

な種子ヶ島馬毛島を、行手には硫黄島（最高點二三四八呎）の奇峰と之れに列る平な竹島を望む。船は懸て佐多岬沖に達して右舷回頭をやり、鹿兒島灣口及開聞嶽を右に見て大隅海峽を通過する。坊の津沖の黒島（最高點二〇三四呎）の青螺を左舷に見る頃より後方遙に追々と地平線下に入らんとする故國の名山開聞と袂別しつゝ、宇治群島の鮫島と草垣島の水道を西して支那海に入るの

第一圖

である。之から約一日西航すると海水が濁つて來て泥水となるので揚子江口に近づいた事が分る、尙半日も航海すると漸く左舷遙に北馬鞍島の山が見えて來る。やがて大戟山島 (Gundak) の螺の様な岩上にある燈臺を左舷に見て回頭し、揚子江の南水道を溯つて支流黄浦江に入り上海に達するのであるが、揚子江の天に冲する廣さを見たり聞たり（實



際向河岸が見えないのだから聞たりである。〇して驚く話はあまりに人に知られ過ぎてゐるから止める事としよう。

上海から香港に向ふには江口の大戢山島燈臺を右舷に見て回頭し南下する。舟山叢島中の Bohman 水道及スチープ航門を抜る途中に見える叢島のゴチャ／＼した禿た島山にはあまり感興も起らぬ。之れから少し南下した右の方に普陀山と云ふ島がある。此島は歴史的にも佛教上でも有名で、大谷光瑞氏等の麗筆によつて日本に紹介されてゐる。自分が大正二年の二月に此島に遊んだ時に、彼の歐洲大戦の頭初に、東洋の海面を荒れ廻つた獨艦 London が此島に入津して居るのに會した。當時一年後に於ける同艦の運命を卜し得たならばと思ふと感慨なき能はずである。自分は此叢島中の最大島である舟山島にも遊んで定海を見物し、海を南下して桃花島の南にあるバーノン水道を通過し、此島の山水風物を見て自分はつく／＼思つた。文人畫や南畫に見るつく／＼芋山水は、文人墨客が筆の先でこね上げたい、加減のものだろうと思つてゐ

たのが、目の前に桃花島の南畫其物の様な實景を見て、此流派の藝術の發祥故ある哉と感心した。是れ以後自分は南畫の氣分に大に共鳴する所を生じたと同時に、どうも南畫を見るとどこやら不潔だなあと思ふ感じが出て來るのには閉口するのである。

いや話が思はず横に外れた。普陀山も桃花島も航路からは大分離れているから多分見えまいと思ふ。船は支那大陸の海岸線に散布して居る島嶼の外を支那大陸に沿つて南下し、約四日間の航海の後香港に入るのであるが、此間に記憶に残る様な山は見えない様だ。途中は回船島 (Turn About Is.) 烏坵島 (Ohsen Is.)、兄弟島 (Brothers)、南澎列島 (Lampoek)、蓮花峰角 (Drekers Pt.)、遮浪角 (Shihang Pt.)、「以上右舷」。大星嶺岩 (Pedro Blanco) 「左舷」等で、陸地に接觸を保つてゐる。

香港の入口大欽門 (Taikong Channel) 鯉魚門等を通る時に左右にゐる山は見えるが、眼底に残るのはやはり有名な Victoria Peak (一八二〇呎) 位で、此山は御承知の通 Cable car 登つて見る

事が出来る。

香港を出る時は西に廻り、香港と Green Island との間の Sulpher Channel を抜けて南丁西水道を南下し、左右に澤山の島を見て馬尾洲 (Gap Rock) の燈臺を左舷に見、之れより殆んど真南に下る。約一日にして Panceel Island and Reefs と云ふ危険洲の附近に掛る。潮流や信風の都合で船は其東又は西を航過する。西に航路を走れば又約一日の後西に安南の陸地を遠く望む事がある。其後約二日の航海をすると Jimaya 島の近くに於て Pulo Manik 燈臺を左舷に見る。そして又約半日にして左舷に Bintang Island が眼界に入る。日本を出て以來始めて樹木鬱蒼たる陸地を見るのであるが、それは全く熱帯樹林であるのだ。Pedra Blanca の燈臺で西に回頭して Singapore に入港する。此處で始めて全くの熱帯気分になれる。

Singapore を出る時は Blakang Mati 島との間にある甚だ狭い Sinki 水道 (Salat Sinki) を西に通過することもあり、Pulo Batam との間にある Main Straits が出る事もある。之れより Sultan Shoal,

Little Karim, Brothers, Pulo Pisang 等の地點で陸地と接觸を俟ちながら Malacca 海峡を西北に上る、約半日で Malacca に入港する。之れより尙も海峡を上ると比較的平な Malay 半島の内地に丸肩のやさしい姿をした際高い一つの峰が右舷に見える、山が海岸から遠い所にあると見えて海圖には示してない。而し晴天ならば誰れても目に付く山である。船は Cape Raedado, One fathom Bank の燈臺及 Sembilan Island 等の近くを航し、約一日の後には Penang 島の西北角 Nuka Head を廻つて北から Penang に入港する。

Penang の Nuka Head から殆んど真西に向て約半日航海すると Malacca 海峡の北の入口を横切つて Sumatra 島の北東角 Diamond Point に達する。之れより同島の北岸に沿て西航するのである。此北岸の 中程に來ると海岸に Bukit Goh (三四四五呎) と云ふ乳房の様な形の山が見える。其少し手前に一萬呎を越る Chunda 山脈が墨畫で書た様に聳えてゐる(第二圖)。日本を出てから始めて一萬呎からの山に接するのであるから愉快でたまら

第 二 圖



ぬ。此邊から晴天の時は船の行手の水平線上に筑波山の様な形をした山頂が一寸浮び出す、此形を見た丈で吾人山黨には其只者でないことが直覺される。船が進むに従て此頂も追々と浮び上つて遂に壯麗なる金字峰となる。航海者は此峰を Gold Mountain 黄金山と呼んでゐる。土語では「セラワジャンデン」と云ふそうで、高さは五六六三呎であるが、此航路で見える山のうちで恐らく富士山に次で姿の美しい山であらうと思ふ。此黄金山を左舷に見乍ら Pedro Point と Pulo Weh(最高點は二

三九五呎で「レモーマチ」と呼ぶ。)の間の Malacca 航門に入り、ブル島の燈臺を過ぎて Pulo Weh の南端ベルヅリ角で少し右舷に回頭し、同島と Pulo Bras(又は Lampunjeru と云ふ。最高點は二二九六呎で、Gimno 山と呼ぶ。)の間の Bengel 航門に入る、此邊から船尾の方に黄金山を望むと第三圖の様な形に見える。Pulo Bras の北角ウカレムストーレン角の燈臺を左舷に見て、船はいよいよ印度洋に出るのであるが、此航路も潮流信風等の關係で Pulo Weh の外側即北側を航過する事もある。

第 四 圖

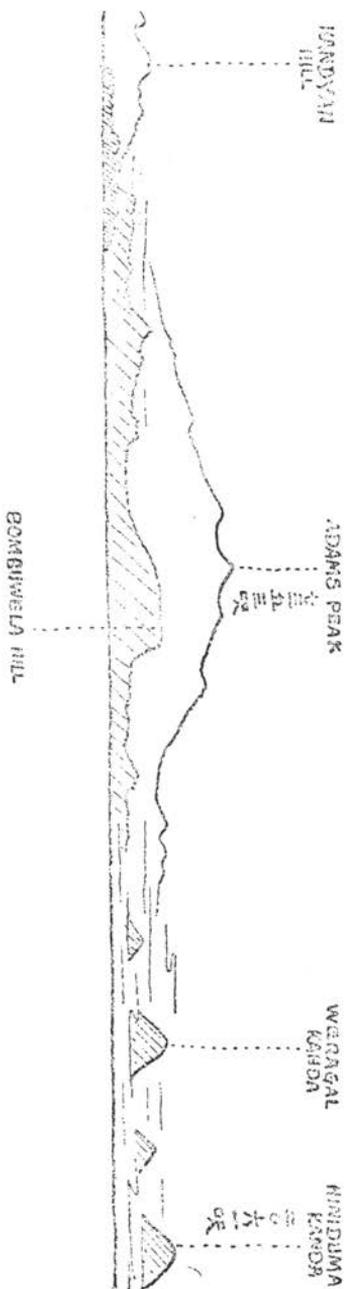


印度洋を西航する約二日間は何も見えぬ。三日目に Ceylon 島の Kalatragama (一三〇五呎) が先づ右舷水平線上に浮んで来て、次に Ceylon 島が眼界に入る。始め Hambantota の燈臺、次に Ceylon 島の最南端 Dandru Head の燈臺を過る。陸岸の椰子樹林人家等が見える様になり、之れから此島の海岸に沿って北上する事になる。Port de Galle 沖を過ぎて少し行くと Hindima Kanda (二〇六一呎) の笠状の峰を望む、Barberyn 燈臺の沖に来ると Bombuwela Hill の上に Adams Peak (七三三三呎) が

薄墨で暈した様に見える(第四圖)。Ceylon での名山で航海者は佛足山と云ふてゐる。何でも山頂に Adam だが釋迦だかの足跡があるのだそうだ、海圖には此山の後に Pedretalagalo (八二九六呎) と云ふのが書てあるが、海から見えるのかどうかよく分らない。之れより約二時間半位北航すると Colombo に入港する事になる。

Colombo を出帆して西航する。印度の最南端の Cape Comorin 沖を通過するのであるが、遠くので何も見えなす。約二日の後に Minicoi 島と Maldiva

第四圖



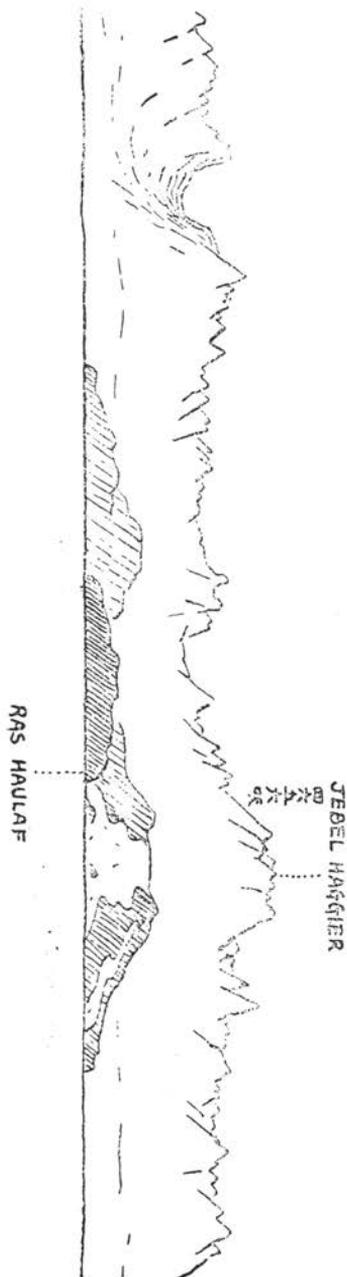
六八

Islands の間の Eight Degree Channel を通過する。
 Mindyoi 島を右舷十數哩に見て通過するのであるが
 望遠鏡で見ると同島は立派な珊瑚礁で、椰子樹の
 茂つて居るのが見え、燈臺がある、此航路を通る
 船は London に行つてから、此島の燈臺料を仕拂
 ふのだと云ふ。そんなら London に行かぬ船はど
 うするかと聞いたたら、それは支拂はなくともよ
 いのだらうと何だか甚だ呑氣な話を船員がしてく
 れる。此所から約四日間は全く陸の見えない航海
 をして Sokotra 島沖に達する。信風や潮流の都合

て船は此島の北を通る事も南を航する事もある。
 南の航路を行くと右舷遙に Sokotra 島を見、次で
 The Brothers の稱ある Jezirat Darsa 及 Jezirat Samla
 の兩島を同じく右舷に見て、Africa の Ras Asir 即
 Cape Guardafui に向て行く、此半島には標高四五
 千呎の Jebel Maraya, Jebel Hantara 等云ふ山が
 あるのだが、どれがそれだかよく分らない。北の
 航路によると先づ Sokotra の東端 Ras Radrasa を
 左舷に見、次で Ras Hinalaf の沖に達する。此岬
 は低い岩の小山であるが、白砂が氷河の様に掛つ

て海中に没しているのが偉觀である。一寸銀閣寺の「こゝなる白砂は銀砂灘！」なる案内者の言葉を思出す。岬の後には妙義式の実元たる *Jebel Har Spor* (四六五六呎) がギザ／＼の恐しい形相をして聳えてゐる (第五圖)。此島一帯が皆ギザ／＼の岩山だらけの様に見受けられる。Soktra の西端 *Ras Shoub* を過つて *Kanal Firson* の北を航過すると、船は *Aden* 灣に入つたのである。之れより約一日航海すると、丁度函館の入口を津輕海峡から見た様な形をしてゐる *Aden* の灣口を右舷に望む、即ち

第 五 圖



Arabia の大陸が始めて眼界に來たのである。
Aden 沖から追々と *Arabia* の海岸に接近し、數時間の後には砂漠然たる其海岸を見るのである。
 一草木を生ぜざる褐色に爛れた様な砂地に岩頭を出して居る *Jebel Ann Brita* (七九五呎) が先づ目に入る (第六圖)。吾人には一寸想像の出來ない荒涼たる景色であつて、山好の自分も元來が温帶動物であるから、こんな山には登るのはいやだと思はざるを得ない。標高僅か八百呎でも二三丁も行く内に干物になつてしまひさうだ。繼いで同じく

第

六

圖

TEBEL AM BIRKA

七九五呎

七六〇呎



第

七

圖

TEBEL KIVARAZ

七三〇呎



一草木なきギザ／＼の岩山 Jebel Kharruz (一二七二呎)の荒涼たる山容が表れて来る(第七圖)。

Adon 沖から五六時間西航した所で、行手左舷に Africa の Ras Siyan 沖にある Jezirat Sowabih (又 Brothers-Islands) が表れて来ると、船は有名な涙の瀬戸 Bab-el-Mandeb 海峡に近づいたのである。右舷には獨帝の軍帽の様な形をした Jebel Manhalil (八八六呎)に連る岬の尖に Sheikh Main (又は Oyster Islandとも云ふ)がチェンボリ見えて、之れより Bab-el-Mandeb の小瀬戸を距て、平な Perim

Island が表れて来る(第八圖)。此島の最高點は小瀬戸寄にあつて二六六呎である。船はやがて此島に沿ふて Bab-el-Mandeb の大瀬を大回頭をしつゝ通過する。そしてよ／＼紅海を西北に上ることゝなる。Perim は一草木を生ぜざる低い岩の島の様に見える。英政府の貯炭所と數軒の人家と見張所がある丈で、紅海を出入する船舶は此所に信號して、各地に電報を送る事が出来る。自分は曾て臺灣の澎湖島に遊んだ事があるが、草木の殆んどない平な珊瑚礁のあんな島に住むのは、殺風景を

第 八 圖



文字通に痛感するだらうと思つたが、此 *Perim* を見ると澎湖島に二重三重の輪を掛けた様な殺風景さであるので驚かざるを得ない。

紅海は地圖で見ると狭いが實は中々幅が廣いで、兩岸共に見えぬ所を航海する事が多い。航路は海中の島をたどつて西北に上るのである。海峡か、約六時間にて *Great Hamish Island* (最高點一三三五呎) *Jebel Zukur* (最高點二〇四七呎) を左舷に見る。前者には甚だ僅かの草木がある様で地肌には青味がある。此航路より見える紅海中の他の島には殊んど草木なしと云ふてもよいだらうと思はれる。 *Jebel Zukur* の東北に *Abu Ali Island* 燈臺があつて、船は其間の瀬戸を通る。此燈臺から數時間にて *Zebayir Island* 中の *Center Peak Island* の燈臺を右舷に見る様になるが、此島群の中には全島鳥糞で真白になつてゐる島がある。尙數時間進むと *Jebel Teir* (最高點八〇〇呎) の燈臺を左舷に見る。此邊が歐洲航路中で最も暑い所であらう。兩岸が砂漠で水蒸氣が少いためか、日没の太陽や星が特に美しく見える。日没近くの太陽を普通の

六倍位の望遠鏡で見ると黒點も見えるし、砂漠から立昇る陽炎のためでもあるか、太陽の表面が焔を吐いて爛々と燃えて居る様に見える。此邊から約二日間は陸地の見えぬ航海をする。そして漸く船が *Africa* 側に寄つて來ると *Africa* の *Mount Elba* の *South Peak* (約六九〇〇呎) が見えて來る。それから約半日の後に同じく左舷に *Jebel Hamata* 又は *Jebel Wadi Tahama* (約六三〇〇呎) が見える(第九圖)。(續) *Doedalus Reef* 又は *Abdul Khasan* の燈臺を左舷に見る。之れから又約半日の航海をすると、右舷に *The Brothers* と云ふカステラを置いた様な二つの島が見える。其 *North Island* に燈臺がある。此邊では船が此島の右又は左を通ることがあるので、此島が左舷に見える事もある。此島を右舷に見て通る時は、船が *Africa* 側に近いのであるから *Jebel Abu Tyne* (約四五〇〇呎) が一層よく見える。此所より又約半日航海すると *Shadwan Island* の燈臺を左舷に見る様になり、船は漸く紅海を終り、*Trial* 海峡を入つて *Sinai* 半島と *Africa* 大陸の間に深く灣入して居る

第 九 圖



Gulf of Suez に入るのである。

Suez 灣は幅がずつと狭くなるので兩岸が見える Africa 側の Asinait 燈臺を左舷に見て過ぎ、 Sinai 半島の For 部落沖に達し、半島の山を見ると第十圖の様である。此部落は Sinai 山地の登山の發足點で、登山路は多く砂の谷即 Wadi の中に通じて居るのだそうだ。此山地の山は皆突兀たる岩山であつて、砂漠の砂の中から岩が頭を出して居る様な形で、谷は皆砂の流れの様に見えるのである。

此所から見ると北に Jebel Serhal の North Peak

(六六八〇呎) 及 South Peak (六四〇〇呎) が聳え立ち、暫く南に低下して Sinai の盟主 Jebel Katherina (八六三〇呎) を隆起し、耶蘇教信者仲間て有名な Moses が神から十誡を受けたと云はれてゐる Sinai 山は、海圖には此山のすぐ北に標高七四五〇呎として示してあるが、どの峰がそれかよく分らない。木暮君か中村君の様な山眺みの名人に見てもらはなすと一寸見當がつかない。Katherina に續いて少し南に Jebel Umui Shomer (八五三〇呎) が頭を出し、其間に少し低く見えるのが Shiddok

第 十 圖



大 正 二 年 七 月 發 行

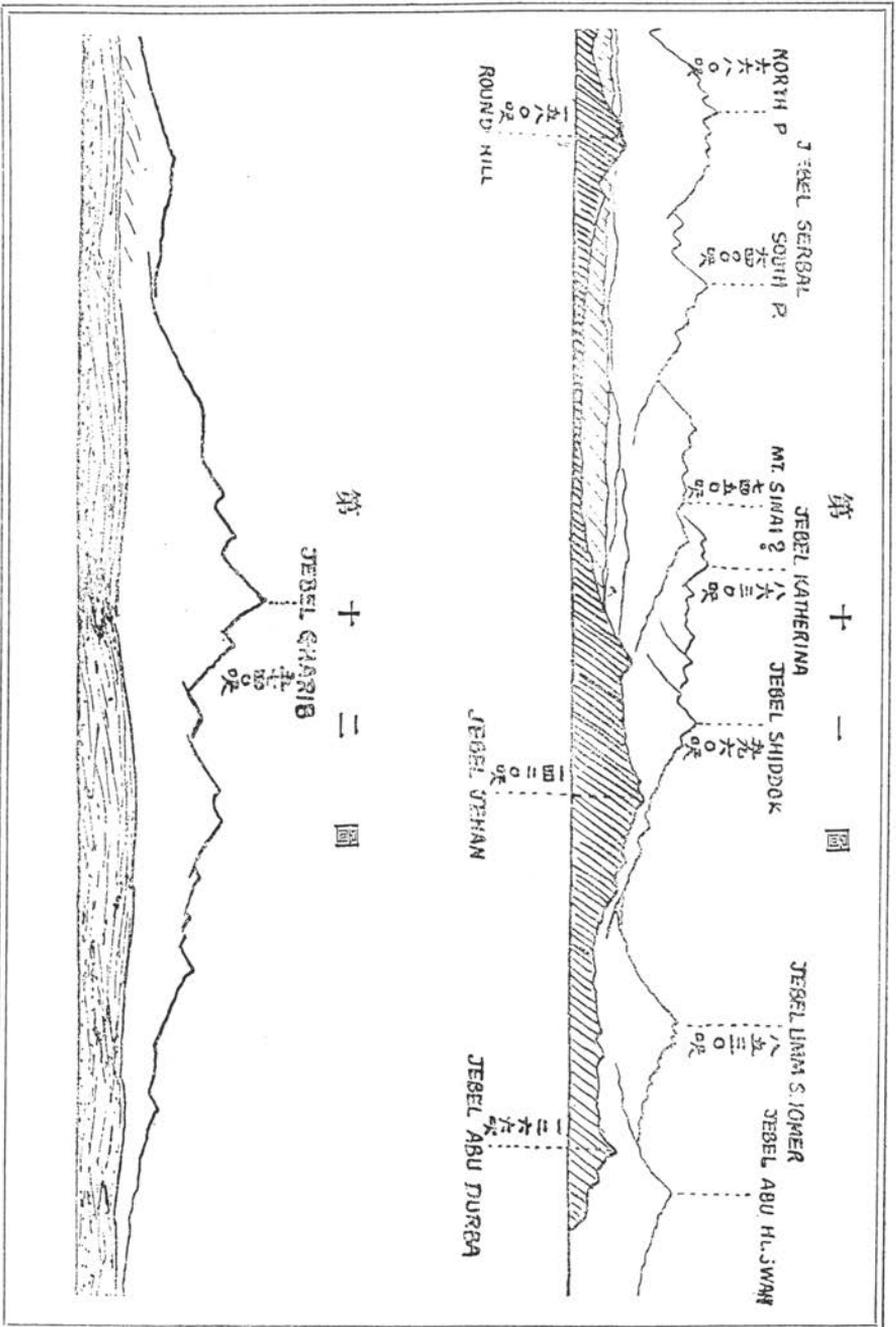
(五九六〇呎)であらう。どの山も草木の殆んど生へない岩山砂山で、こんな山登りに日に照り付けられたら吾々は直ちに參つてしまふぞうだ。Mosesと云ふ男は大町の又吉を駱駝にした様な能力のある男だろふ等と思つた。

船が尙進んで Africa 側の Ras Gharib 燈臺の沖に來た時 Sinai 山方面を見ると第十一圖の様で、海岸に沿つて Round Hill (一五八〇呎)、Jebel Jehan (一四二〇呎)、Jebel Abu Durba (一二六六呎)の一脈を走らせ、一二の Wadi を距つて、Jebel

Gabeliya の山脈が連り、其奥に前記の七八千呎の山々が聳えてゐるのだが、Sinai の峰はどれだかやはりよく分らない。

此所で反對側の Africa を見ると海岸に沿ふた一帯の Arabian Deser の後に、槍の肩から穂高を見た様な形をしてゐる Jebel Gharib (五七四〇呎)の一草木なき岩山が仰がれる(第十二圖)。船がやがて Africa 側の低砂洲にある Zafaran 燈臺の沖に來ると、其後の方に Jebel Zafarana (四七五〇呎)の Table Mountain を望む様になる。尙進んで New

第十圖



第十二圖



Port Rock の燈臺を過ると船は遂に Suez 運河の入口である Port Thawfik に入港したのである。

Suez の町は二哩程西の方に見える。Africa 側は Jebel Atakah (二七二七呎) と云ふ大きな土手の様な山で限られ、石切場が見える丈であるが、Sinai 半島側は砂漠の中に Ayun Musa と云ふ Oasis の様な小椰子樹林があつて人家が点在し、駱駝や人が歩いて居るが豆の様に見えるので、一寸砂漠の晝を見る様な気分がする。Suez 運河に沿ふて引かれてゐる Nile の河水を引た清水路の兩側には樹木が茂つてゐるので、吾人は Colombo 以來十數日にして始めて樹木を見ると云ふてもよいだろうと思ふ。

Suez 運河の話はあまりに有名過るし、目に立つ様な山も見えないから飛ばしてしまふ。而し最近の重要な變化を一つ丈話して見よう。歐洲大戦中英國が Jerusalem 及 Mesopotamia 攻略のために此運河の途中にある Ismailia から Kantara に至る十數哩の沿線に軍需品を山積し、砂漠の中に牛馬の牧場や天幕張の市街地を現出したのは實に偉觀で

あつた。之れ丈の物資を砂漠の中に捨た様に山積しては、世界の物價が三倍にも四倍にもなる筈だと思はせる。此軍需品の山は休戦後四年を経た今日でもまだ始末がつかぬらしい。それ程澤山運んで來たものだ。Kantara で Jerusalem 行の鐵道が Swing Ponton Bridge 運河を横切つて居るのも此大戦以來の運河の變化だらう。

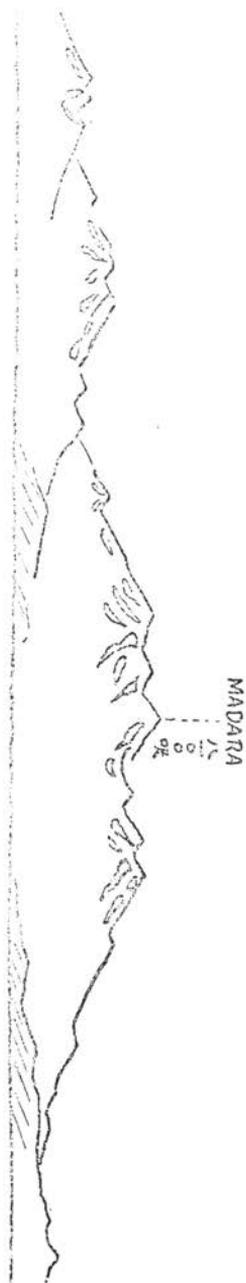
運河の地中海側の出口 Port Said でよく砂漠や運河と別れ、氣候も大分涼しくなつて來る。之れから佛國の Marseilles に行くのに Malta 島の北を通つて Africa の Cape Bon から Sardinia の西南端にある San Pietro 島の Cape Sandalo 燈臺に掛けて北上し Marseilles に向ふ事もあるが、此航路では Cape Bon の少し手前にある Pantellaria 島の二七三〇呎と云ふ螺の様な島山の外、山らしい山が見えない様である。Port Said から Messina 海峡を通つて行く航路による時は、運河を出て後數時間て Nile の川口にある Damietta Mouth の燈臺で Africa と別れ、約二日間陸の見えぬ航海をすると Crete 島が眼界に入る。此島には東より數

くへ Irselie Mountain(七一〇〇呎)、Psitorie(八〇六〇呎)、Madara(八一〇〇呎)等と云ふ高山がある。船は此島の南を斜に航過するのであるが、本島の南方中程に位し、歐洲大陸間其屬島中の最南端である Gavdo 島の南に來ると Crete 本島も大分近くなるので、前述の三座の山の中最後の Madara 山がよく見える様になる。Gavdo 島は海岸が約百呎の崖になつて居つて燈臺が置てある。之れを過て Crete の西南端の岬 Kavo Krio との中間位に來た時に Madara 山を望むと第十三圖の様に見える。

自分が望んだのは五月の中旬であつたが、山頂近くには、殘雪が白く光つて居つて、日本を出てから始めて雪のある山を見たのである。喜しさの餘り「マダラ山頂殘雪斑なり」等と與太を飛ばしたりした。

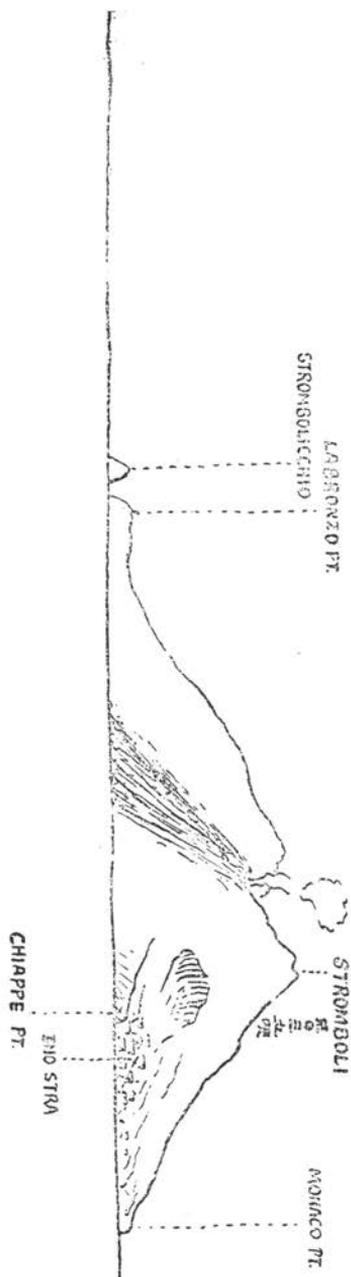
Crete を過て又約一日半陸の見えぬ航海をする時、伊太利の長靴の爪先に當る Cape dell Armi を右舷に見る様になる。之れから Stilly 島との間の Messina 海峡に入るのであるが、同島の東寄にある有名な Aenna 火山(一〇八八〇呎)は此邊から見

第 十 三 圖



えるのではないかと思ふが、天候のため見えなかつた。走るに従つて Messina 海峡は追々と幅が迫つて、兩岸共よく見える様になる。右に Reggio の町左に Messina の町の人家がゴチャ／＼して居る間に路行く人馬も見える位である。海峡の北の出口は特に狭く、船は Sicily 島の Cape Peloro を二度の急角度回頭で廻り、針路を西北に立て直すと行手に有名な Stromboli 火山(三〇三五呎)が海中から頭を出して居るのが見える。左舷には代表的な火山地形をした五つ六つの島が見える、Lipari 群島

第十四圖



である。其南に位した島は Vulcano Island と云つて「火山」と云ふ言葉を島名として居る。實に Volcano なる言葉は此島の名より出たのだと云はれて居る。海峡を出てから約三時間半で船は Stromboli を右舷真近に望んで通過する。島の西端 Chiappe point を過た邊で此山を見ると第十四圖の様に見える。Stromboli は有史以來未だ曾て噴火を止めた事がない火山として世界に有名である。自分の見た時は噴烟はあまり多くなかつたが、時々爆發的に噴いて居つた。西北に向て火口から海中迄

砂礫の大きなガレが掛つて居る。西の海岸斜面には Ino Gura と云ふ村があつて、人家が点在してゐる。其後には大きな舊火口が崖の様になつて口をあけてゐる。あんな所によく安心して住んで居られるなど、火山國の日本人らしくもない感想が浮ぶ、猿の尻笑ひと云ふものだらう。

Stromboli を過ぎて Erythraea 海を約一日航海すると Sardinia 島が見えて来る。此島は其北にある Corsica 島に較べるとあまり高い山のない平な島で、船は此島の北の端に近よつて行く。島の北端に散點する小島の中の Pazzoli 島の燈臺と Lavezzi 島の燈臺との間を大回頭をして西南に航過する。所謂 Bonifacio 海峡である。此邊の島は皆大石塊が亂雑に積重なつて居る平な島で、海峡の真中にも Invezzi Rock と云ふのが頭を出して居て、之れに燈臺が立つて居る。此燈臺を右舷に見て船は再び大回頭をやり、針路を西北に向ける。此度は Corsica 島の南岸に沿って進むのである。少し行くと Trinita 山を背景として崖の上に立つて居る Bonifacio の町を遠望する。Fano 岬を通過して Orace

山(四三九六呎)を右舷に望み乍ら、船は Corsica 島より遠ざかつて行く。Napoleon の生れたと云ふ Ajaccio 町の沖即 Aquila point 沖邊に来ると雪に

白く輝く數座の高山を望むのである。(第十五圖)自分が見たのは五月中旬であつたが、白雪皚々て實に立派な山容である、Corsica の最高峰 Mount Cinto (八八九一呎)は圖に示してある Mount Rotondo (八六二二呎)の左奥にかすかに銀鼠色に見えたが、山容は薄霞のためによく分らなかつた。

Rotondo の右に聳えた Mount Oro (七八四五呎)と二座の雪山丈でも實に飽かず眺め入られるのである。お隣の Sardinia 島とはまるで山岳的には相撲にならなす。Corsica の Napoleon を産する所以であると思はれる。Corsica の山は歐洲登山界の好目標で案内記の様なものも澤山ある。我會員中からも此島に登山を試みられる人のあらん事を希望する。

Corsica と別れて約半日も航海すると、船は既に佛國 Toulon 沖の Porquerolles 島の燈臺を右舷に見る。好天氣の時は佛伊國境の Maritime Alps を

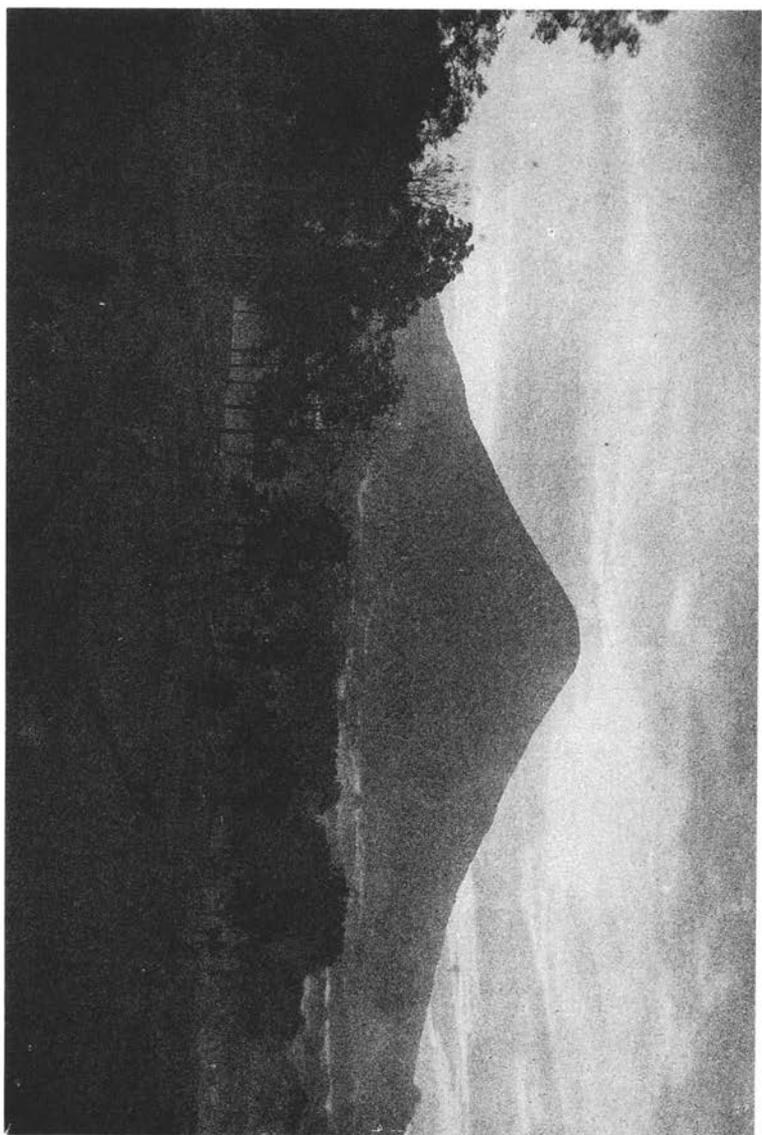
第十五圖



始め澤山の高山を望めるのであるが、あまり澤山ゴチャ／＼して居てどれがどれだか船で通つて見た位では一寸見當がつかぬ。之れも山睨みの名人にお願しなければだめだから匙を投げる事とする。船はMarselles 沖の Praier 島燈臺に向て進み、右舷に山の蔭から Notre Dame de la Garde の尖塔が見え出すと、やがて北に回頭して Dumas の Monte Cristo へて有名な Chateau d'If の側を通つて Marselles に入港する。Alps 行のち客様は汽車で Klione を溯つて Swiss 入りと云ふ事になる。

之れて話は終りであるが、切角此所まで來たのであるから英國の Highland や Lake District 廻りをして見ようと、御苦勞様にも一週間を費して海を周つて英國迄行つて見る様な特志な山客のために船上談山をもう少し続けよう。

Marselles を出帆して約半日西南に走ると佛蘭西國境に近し Spain の Cape Sebastian 沖を通る。有名な Pyrenees 山脈の端に近しのであるから何か見える筈であらうが、之れもあまりゴチャ／＼して居るので匙投物である。之から又約半日走る

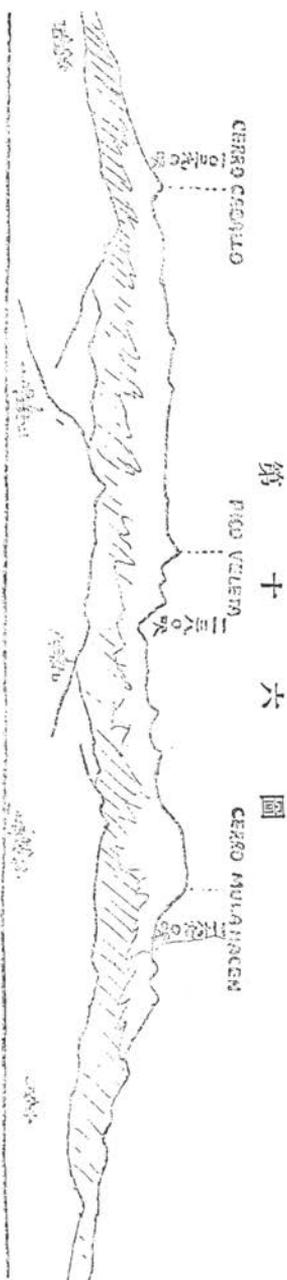


式田信氏新築

瓜哇ンポロ山

と左舷に Balearic Islands を望む様になる。Minorca, Majorica は可なり遠いので山がよく分らない。Iviza は大分近く通るのでよく見える。其屬島の Conjejern にある燈臺を過ると同じ屬島の一つ Vedra と云ふのが見える。面白い形の岩島で太田道灌狩衣姿の笠の様な形をしてゐる。Iviza の對岸 Cape San Antonio の燈臺を右舷に見、次へ Cape Nao を通過する。之れより Hornugus Island, Cape Palos, Cape de Gata 等の燈臺へ陸地と接觸を保ち乍ら南下する。Cape de Gata へ西に回頭し、數時間走ると右舷に十六圖の様な高山が仰がれる。自分の見たのは十月の末であつたが、七合目位迄は新雪に蔽はれ、溫暖な南歐の秋の空に雪の Sky Line をうねらせて居る。海圖を見ると Sierra Nevada とある。實を申すと自分は此海圖を見る迄は、Sierra Nevada と云ふのは北米へ Rocky と略平行して太平洋側にある山脈だ位の事しか頭の底に残つて居なかつたのだが、此名を海圖で見てオヤ／＼と思つた。暫時二十五年も昔に習つた中學萬國地理の記憶をたどつたところが、何だか Spain

の地勢は東西に走る五列の山脈があつて、其間に四つの川が大體西に向つて流れる。最も南にあるのが Sierra Nevada 山脈、其北を流れるのが Guadalquivir 川等と教へてもらつた様な氣もする。之れを試験に暗記するのに「知らぬ旗」だの「河太郎牙」(京都邊では河童を河太郎と云ふ)だのとやつた事が頭のどこかの隅から出て來て、成程此方が、Sierra Nevada の本店で、北米のは支店であつたのに氣がついた。いや全く心細い話だ。今本店の前を通つて見ると店構も中々堂々たるもので立派である。之れでは北米に支店を出したくなるのは人情だと思つた。海岸には前山の sierra Almirante, Sierra Contraviesa の暖かそうな斜面が見え、橄欖やレモンが茂つて居る。白聖の人家が集つた村落が所々に點在して居る。可なり高い所迄村がある様だ。其後に Sierra Nevada の最高峯 Cerro Mulhacen (一一六六〇呎) が箱根の駒ヶ嶽に似た峯頭を天空に聳立て、居る。其西に連なつて pico Yelan (一一三八〇呎) 及 Cerro Guballo (一〇三九〇呎) 等の峰頭が波を打ち、之れより西



第 十 六 圖

に漸く低下して居る有様は、誰しも此沖を通過する數時間を右舷の Hill に寄掛つて無言の行て過すであらう。

之れから七八時間西航していよ／＼地中海の出口 Gibraltar の海峡に近づく(第十七圖)Gibraltar Rock は一際聳立つて島の様に見える。其南端の Europa Point 燈臺から一つの中段を越て、岩の

最高点 Mount Misery (一三九六呎)が尖つて、之れから北に波状線を畫いて北端に章魚入道の頭の様な Devils Tower (一三五六呎)が高まり、之れ

SIERRA ALMIZENSA

SIERRA COMPAGNESA

から急に低下し、低い砂地となつて歐洲大陸と連つてゐる。Europa Point の向には Aechuchue Point が薄く見える丈で、歐洲大陸の南端 Cabo Tarifa はまだ其先になつて居るので見えなす。Africa 側には Almina Point の向に Sierra Bulhones 又は Aje Hill (二八〇八呎)と云ふ箱根の二子山の様な二つのドームが聳えて居る。

船は歐洲大陸側に接近して通るから Gibraltar Rock の削るが如き東面を見て、次に Europa Point を通過する。中段から山頂に掛けて砲臺で固めた

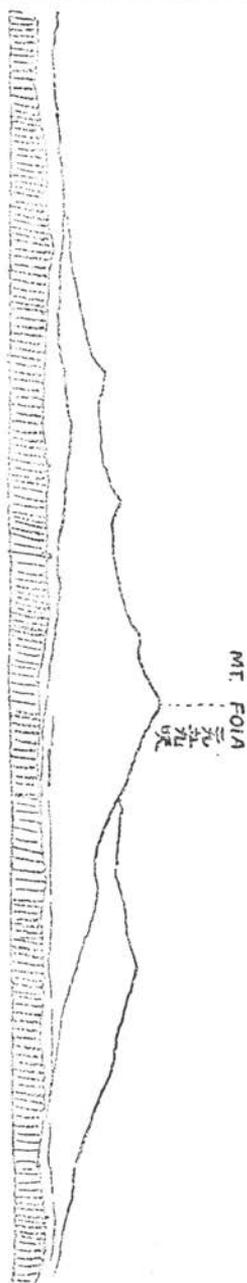
第 十 七 圖



英海軍の根據地や、岩の西斜面にある町や築港を遠望して、よく地中海を出る事になる。Cape Trafalgar 少しく船と西北に回頭させ、數時間走ると Nelson の名を高からしめた Cape Trafalgar 沖に達する。之れから約半日で銚子の屏風ヶ浦の様な斷崖が続いて海に斗出して居る。Portugal の南端 Sagres Point に掛る。之れを廻ると Columbus が船出したと云ふ Cape st. Vincent がある。此處から船を北に向け大西洋を北上するのである。Portugal の海岸は多く斷崖になつて居つて、其後にあま

り高くない山が連つて見える。St. Vincent を廻るとすぐ目に付くのが Mount Fois(二九五九呎)(第十八圖)で、之れから先にはあまり目に残る様な山はなす。Lisbon 沖から Cape Roca 邊に掛けての海岸は、山の上に城跡や風車が所々に見える。どうも Don Quixote の背景にてもなりそうに思はれる。之れから Cape Carvoeiro に至る間に Mount Junco(二一八五呎)、それから Spain の西端 Cape Finisterre に至る間に Peneda(四五〇五呎)、Pedra-de(四六四二呎)等が見えるのであるが、相憎

第八十圖



○平民詩に現はれたる山岳趣味

天候のため見なかつた。Finistere 岬から Biscay 灣を北上し、佛國 Brest 沖の Ushant 島の燈臺を過ぎ、東北に回頭して English Channel に入り、Channel Islands を遠く右舷に望んで、やがて Dover の白い崖を廻れば Thames の入口となるのである。先づ山には Spain へ別れと云ふ事になる。

永々と船上で山の熱を吹いた。そしてまづ Sketch 等をして暇つぶしをして居つたが、London で自動車の瓦斯排氣をうんと嗅されると此熱も忽ち下つてしまふ。(終)(八代準)

此處に平民詩と稱するは俳句、川柳、和歌等でも平易な一般吾々にも其趣味の感じ得るものと思はるるものを指したのである。尙ほ余は山から雲を離して考ふことは出来ない性分であるから雲をも加へる事にする。

世の夏を見おろして居る寒さかな 子規
夏を見おろして寒いと云ふのは一寸可笑しいが
山の兒には直ぐうなづかれる。何んでも大詩人正

岡子規が富士登山の際、下界は九十何度と云ふ夏の暑い日であつたが、頂上に行つたら、ブル／＼振へる様な寒さで然かも暑苦しい夏の世界を見下ろして居らねばならぬと云ふわけで、山の見たるもの皆經驗あることだらうがなか／＼句には出ない。

秋風や下界の雲をかきまぜる
子規

星凍る銀明水や土用入
子規

土用入に星凍るとは餘り寒む過ぎる様であるがこれも富士の頂上として考ふれば不思議はない。子規の富士登山の感想らしい。

ひや／＼かな赤い朝日がぼつかりと
子規
赤い色とひややかな氣分と合はして居る處は矢張り高山の頂の様に思はれる。

山路来て何やらゆかしすみれ草
芭蕉
名高い句である。

やがて死ぬ氣色も見えず蟬の聲
芭蕉
敢て蟬のみでない。人間も何處より來つて何處に往くものなりやと云ふ方面には少しも意を用ひ

ず、何等宗教的情緒の感應もなくのらりくらりと其日その日を送るのは、早晚死ぬと云ふことに氣がつかず、たゞ／＼生の要求のみによつて生きて行ふとするのは、唯だ鳴いてばかりで日を暮らす蟬と何等の選むところはな。林中に彼の喧噪な蟬の聲を聞いたびに、そゞろに人生を思はしむることがある。

さ／＼れ蟹足はひのぼる清水哉
芭蕉

山中の蟹は人を恐れぬ。
芭蕉

雲霧の暫し百景をつくしけり
吾等に趣味を與ふるものである。
一樹

秋峰に懸かる雲あり石の如
クツキリと引きしまつた堅い握りこぶしの様な

寧ろ團子を打ちつけた様なとても言ひたい團雲が秋峰に見ることがある。

秋の峰雲をあつめて入る日かな
雉子郎

夕焼も秋に多い。
蘇川

雲上ぼる眉上の崖や蘭の花
登山家の往々見る處。
也

雪踏んで來て顔黒し富士詣
也

大變な處に氣のついたものだ。

日にやけぬ護符を貼りたる笠の裏
女人登山者か。

峠から一村白しうめのはな

山嶺趣味の一。

冬の雲片々と湖に浮ぶ

寧ろ山湖に多い。

春の雲富士を包んで大いなり

雲秋の容づくりす巖鬼山

山は雲を得て益々雄大の感あり。

夕立や登山行者の遇ふ遇はぬ

吁々山戀し。

夏山や表七瀧裏八瀧

暑さを知らず。

冬の月峰の鬢づらにけり

成程。

思ひさや富士の高根に一夜ねて

雲の上なる月を見んとは

高山ならで雲上の月は見られない。

山の咄霧藻の咄青簾

其 蝸

柳 月

桂 華

和 風

同

六 花

田 士 英

薰 翠

西 行

知 十

夏の暑い時に青簾の蔭で高山の話をする。霧藻などは夏尙ほ寒き高山でなければならぬ。自ら冷氣を覺ゆ。

石山や覺束なくも女郎花

翠 雲

岩石の風化した土砂は石に圍まれて傾斜地でも移動せず程よく壤質を帯びて女郎花をはぐくむに充分である。

山鳥の卵ほど洞に雪残る

柿山伏

残雪の繪の様だ。

雲の影山を越し又川を越し

星 雲

頂上の氣分。

雲は皆山へへと飛んで行く

星 雲

山の附近の空氣は濕氣豊富にして、水蒸氣を凝結し易い爲か雲は山に突き當ると其雲量を増し、山に引き付けられた様に山を指して飛んで行く。

山の周圍の空氣は山膚を登りて頂上に集まらんとする傾向ありて一種の谷風を生じ、山の附近に指しかゝつた雲は其谷風に巻き込まれて、何うしても山頂に接近し、元の方向を取つて進めば彼の山には掛からぬと思はれるのでも、高山の附近にさ

しかれば谷風の影響で其進路を變更し、山に吸引せられた様な動作をして山に近寄ってくる。山に引力でもあるか又靈力ありて雲を呼ぶ様であるが、山の附近は氣流は山に向つて運動する場合が多いのと、山に附けば附く程、空中濕氣の濃厚な場合が多いのとて雲は山に寄り其雲量も増加し、恰も山が雲を呼び、雲を湧かす様な光景を呈する。そこで從來の方向を取れば通らずに濟む様な處にても高い山があると其處に引き寄せられるかの様に飛んで行く。そこで自賛ながら此處に提供したのである。これは最も平民を主とした川柳の積りである。

見下ろせば山影見ゆる雲の海 星雲

甚だ陳腐な調であるが實際富士山が白雲の上に突出し、自分も山と共に雲の上に居る時に日が傾くと薄墨色の圓錐形の山影が白い雲の平面にぼうつうつる。實に雄大宏壯である。

雪の山北に奔馬の如きかな 抱虛

殘雪をのせてる連嶺は天馬羈を脱し飛翔雄起せるの概がある。敢て北に走つてる山嶺に限らない

が雪と云ふ文字を使ふた以上は北と言ふ方が釣り合ふからであらう。

暖かや湖わたる舟に山秀づ 夕浪

同じ山岳の遠望でも湖上からは特に目に立つものである。

坂上る米一俵の日永かな 赤靜子

山岳に天幕旅行でもする時は所謂「強力」に米を負はし行かなければならないが、荷が重く悠長に登らねばならぬ。この句なども登山旅行の追想になる。

春の夜の月山を出て雲に入りぬ 徂春

春の夜は山の端に雲が屯ろしてゐる事が多い。

晩春や山のふくらみを亘る雲 清華

見る度に丸みのつくや春の山 仙人

山のふくらみ、丸みのつく、何れも春の變化し行く光景を現はしてゐる。

芝焼や葛蔓帯して山男 碧菁子

山男と葛蔓帯は好く似合ふものである。

不時の客に目刺鬘す山住ひ 樹心

山岳旅行の宿りにはよく目刺にありつくものだ。

大嶺の雪日毎消え遅れ霜

すゞめ

遅れ霜の来る頃には大嶺の雪も日毎に消えて凸稜と凹稜とが鮮かになる。残雪らしい形態を表すのは遅れ霜の頃からである。

柴刈男残雪噛んで嘯けり

志貴野

盛夏高山に残る雪があれば、噛んで嘯くのは獨り柴刈男ばかりでないが此處で云ふ残雪は極く里山の春先の残雪であらう。

炭焼となれて話せば雉子の聲

三嶺

多少の趣きがある。

山影を速く漕ぐ舟や湖涼し

蕉南樓

山湖涼味。

我汗の流るる音や聞ゆなり

虚子

清水のめば汗輕ろらかになりけり

同

汗をたむ額の皺の深さかな

同

杉の葉の鋭さの山深く汗拭ひけり

月舟

たのもしく汗わき出づる毛穴かな

同

汗いつか葛の葉に冷えてあり

羽笏

登山の汗は苦しいものだが斯様に趣味化して思へば左程苦しくなくなる。

雲の峯その下の山と我とかな

勝司

雲の峯と山とを凝視して何か思ひつめてるのであらう。

夏山の雲下りて灯す古利かな

春響

夏の雲は下る事が多く山寺は眞暗になる事があ
るが殊に夕方になると雲が下り易い、さすれば早
くから火をとぼさねばならぬ。

富士山を下れば蚤の武藏かな

虚子

山上には蚤が居らぬらしい。

山蟻の音あらゝかに木肌這へり

三山

音をたてる位であれば餘程大きい山蟻らしい。

樹々の精遊ぶ高原の若葉かな

梧桐

精遊ぶとは面白ろい。

若葉して白雲遊ぶ尾上かな

柄魚

雲を愛する身の雲がなければ萬事引き立たぬ氣がする。

谷ひらけて里をつゝめるを葉かな

美鳥

山上から下界を見下ろした時に殊に此感がある。

飽かず見る山は若葉の眞晝かな

嘉平次

若葉は眞晝がよいらしい。飽かず見る山、と讀

み作者の嘉平次を見ると、彼の日本アルプスの嘉門次を思ひ出す。

毛衣を着て秋入や山は雪 大我

秋の山びとが毛皮を着る頃山は白い。 流水

四山皆眠りて露の大地かな 流水

山國の秋の静寂。 星夢

秋山茶屋の亭主といふが木樵かな 星夢

茶屋の亭主が木樵と云ふが面白ろい。 茶水

登山隊の釜釜さしあたり薄哉 茶水

炭釜の跡や、焚火した跡によく薄の生えるものである。 孤莖

登山者を怒れる柿の主かな 孤莖

廿世紀の文明の登山者は左程怒らんでもよい、

悪い事はしない。少くも山岳會員には御心配御無用。

大霜の間に山々尖りけり 千坊

大霜の來るのは沓を渡る澄み切つた空の時であるから、山の輪廓がはつきりする角ばつた山は其まゝ尖つて見える。文藝に理屈は無用と言はれても性分として仕方がない。(山本徳三郎)

○有峰のこと

有峰の部落もこの夏あたりには全部無くなることとせう。私は一昨年夏、有峰の人があの廣大な山岳地、針の木峠の西側から東笠ヶ岳附近に到る地域を、悉く富山縣廳へ賣却したと云ふことを聞きました。その時、有峰へ行き合せた者の話によると、俄かに大金が懐に入つたので仕事か手に附かず、毎日酒を飲んで、宛然御祭り騒ぎであつたと云ふことも聞きました。今年の(大正十年)秋、紅葉の盛りを東笠ヶ岳を越してこの部落へ出て、薬師ヶ岳へ登つて見たいと思ひ、大山村の和田を發つて、その日有峰へ一泊しました。意外にも雪は全く見えなかつたのと、天氣具合が好くなかつたので、岳へは登らずに有峰から神通川を富山へ出て歸つて來ました。有峰の人家は龜谷川(前川)の上流、東谷(ヒガシタニ)に六軒、西谷(ニシタニ)に六軒、ありました。その内一軒はもう船津の方へ引移つて残りの十一軒も漸々下へ降ると云ふことです。愚かなものは船津や富山の町へ出て、不慣れな商賣

に携はつて、懸て持金を無くなして終ふことせう。其中でも稍賢こい者は笹津や船津附近へ田畑を買つて、農を營むと云ふこととした。自分達の庭の様な、直ぐ前や、周りにある、山や林をも悉く賣拂つてしまつた彼等は、今は自分達の焚物にさへ不自由する様な羽目に陥り、最早愚圖くしてはゐられなくなつたことせう。免に角、數百年の昔から巢喰つてゐたこの比類ない靜かな山村を後に他郷へ移らなければならぬ彼等も、定めし憂愁を感じることであらうと思ひます。

私等は日本北アルプス中央部の廣大な山岳地が、無智の山民によつて殘賊されるよりも、官憲の手に思慮ある保管をされた方がどれ丈嬉しいか比較になりません。あの大井川の谷が残る隈なく伐採されると云ふ、と思ふと、この黒部川の奥が安全にその幽深を保持して行くことが出来ること云ふことは、私等には誠に心強く感じられることであります。然しながら一利一害で、この山村が無くなると、この方面から入る登山客や、この方へ出る旅行家の爲に、實に不自由なことだらうと思

ひます。今でさへ見る人の少ないあの美しい有峰の高原。その高原を圍繞してゐる高山。鉾崎山、大阪森山、薬師ヶ岳、上の岳、寺地山、それから大阪森の後から簇々と聳えて見える立山本峯、淨土、龍王、鬼に連らなる山々も、もうこゝから見る機會が少なくなることだと思ひます。幽邃なる龜谷川の上流の景、高原を限つてゐる山々の秋色の絶倫なる、そしてこの山村を貫らぬいて縦横に走り廻つてゐる清川を思ひ起すと、私はこの山民に對して憐愍の情を禁ずることが出来ません。然し有峰の王様薬師の大岳は爾後更に寂寞たるこの山村を見下ろして、その人間味を超越した様な豪宕を以て私等を迎へることでありませう。（冠）

○白馬大雪溪（長歌）

横山光太郎

白馬シロウマの嶺を高めか、白馬の谷を深みか、萬尺マンゼキの雨の懸涯けんげ、久方の天にしつゞぎ、眞白霧峰ましろきりたけより來るに、霧るゝよと見る間もあらず、俄かにも雨降り

出でて、風の共谷より上がる、わが息の今は迫りて、踏む脚のこゝにみだれて、暫くを慰ふとすれば、雪の冷え足よりしみぬ。術をなみ返り見すれば、山案内姿も見えず、果知らぬ大雪溪。傾きてかゞやく上に、かんじきと杖を頼みに、我れひとり立ちてありけり、神を念じつゝ。

霧こもる大雪溪ゆきなづみわがあなうらの冷ゆるさびしさ

○瓜哇登山の感想

世紀は何時だか知らぬ、船の名も知らぬ、況してや船人の名は猶のことわからない。たゞ或時の或頃一艘の佛蘭西練習船が、人は情操に富み、自然は紫山緑水の景象にかざられた南洋の樂園タチヒ島にやつて来たことだけは確である。そうして船長始め士官乗組員の總てが、其すぐれた景色と色こそ黒けれ眉美はしい乙女、椰子バナ、鳳梨の豊艷とに魅せられて、榮光ある三色旗の名譽も、自治新興の共和國の權威も一切風馬牛と許り逃去つたものも亦確な事實である。

かくして南洋の樂園に、自由の民、享樂の人の王國は建設せられたと「海のローマンス」の著者は其暢達の筆を振つた。それは後年あの爛熟しさつた佛蘭西藝術の煩瑣を壓ふて、放浪の兒となつたゴーガンの肚裏に、荒削りな雄渾な自然を寫した數限りない描かれざる名畫を描かした南海の美島タチヒに纏はつた床かしいローマンスである。

此小いけれども名高い島を訪れる機會を持たなかつた自分としては、其れが如何程に美しいかは説明することが出来ない。よし又訪れたからと云ふても、偉大なる藝術家の胸憶にのみ描かれるであらう名畫を窺ひ知る由もないから、今は唯あくがれの眼をのみ投げかけて置くことにする。然し會て瓜哇に遊ばれた洋畫界の新進河井精一畫伯がアルジョナの山麓、東部瓜哇の誇りであるマランと云ふ美しい山都に長らく滞在してをられた頃、口を極めて南國の自然の豊かさを嘆稱せられたことを私は知つてゐる。そしてマラン市の附近で許り寫生してをられる畫伯に、もつと美しい景色を紹介すべく申出た自分に對して、マラン市の附近丈

けれども寫すべき畫題の多きに苦しむてゐると答へられたのであつた。畫伯のマランに於ける收穫は、後日文展を賑はしたと云ふことを新聞紙によつて傳へ聞いた折、あの濃厚な綠色にぬられた畫面は日本の鑑賞家の目には恐らくは驚異と、そして寧ろ懷疑とを以て迎へられはせなんだかとさへ危ぶまれた。本當に南洋の色彩は驚くべき程の鮮明さを持つてゐる。それは色其もの濃さ鮮かさの故によることは勿論であるが、其以上の理由を陽光の異常な明るさと素晴らしい美しさの結果に負はさねばならぬやうである。温帶人には想像も及ばぬであらう處の白金の美しさと水晶の明るさを持つた光の波に浴してゐる樹々の緑も、赤い屋根瓦も、白聖の壁も、紫紺の山も、收穫近い稻田に黄ばむだ裾野の一線一劃も、其すべてが力強く押し迫つて、寧ろ壓迫といつた感じをすら與へる程の雄渾な景色を作ら成してゐるのである。

雪の殿堂は氷の巖窟、晶瑩玲瓏な白玉の大塊を空高く盛りあげた雪のアルプスの跌宕豪壯な大觀は、六年の南洋生活中片時も忘れ得なむだ愉悅の

對照であつた。然し實を云ふと、去年の十一月三日に甲斐駒に登つた時、折よくも前々日の朔日には、例年よりは稍遅過ぎた新雪が北アルプス一帯の山と云ふ山々を残りなく白妙に包むでしまひ、手近な南アルプスの峯や谷も雪の新粧を凝らし、自分の立てる駒の頂上は勿論のこと、七丈の小屋の眞後まで白き彩りを見せた願ふてもない絶好の機會に、三十六峯八千谷の木曾駒から始まつて、御岳、白山、乗鞍岳、槍、穂高位までは見當がついたが、それより以上は名も知らない一帶の連山と、白峯の連峯と、末は黒木に蔽はれてゐる赤石山脈の末盡の山々までが、雲一つない晩秋の空に森嚴な沈黙の姿を以て静まりかへつてゐる此上もない山の幸に恵まれたにも拘はらず、南洋の強烈な刺戟に慣らされた鈍感な視神經は、それ程すぐれた眺めすらも、何處やら物足りなさを感じるのであつた。それは恰も渡南以前には素敵もなく廣闊な感じを喜むだ富士の裾野が、今では何となく狭苦しく、山も亦著しくせましく思はれた失望と似通ふた物足りなさである。それ程までに明る

く美しいのが南洋の陽光だ、空だ、星の輝きだ。更に又日没の莊嚴美と月明の夜のすがすがしい美しさとは、自然と云ふものゝ大技巧、ゴーガンの巨腕もターナーの靈筆も到底再現することを許さない大技巧の一端をだに感觸することの出来る人ならば、間違なしに恵まれたる南國よと嗟嘆の言葉を洩すであらうと考へられる。

鋭い明るさを持つた華やかな日光に恵まれた南洋は、又優麗清婉な朝霞暮靄の爲に硬さを柔かに包み、直線を曲線にかへ、あの強い／＼刺戟の世界も朝な夕なには、どんなにか幽玄に、神秘に、醇化されることであらう。

霞にあくる寧樂の曙、霧たちのぼる洛城の秋色、千年の歴史を背景にした古都に漂ふ限りない詩趣は、田と畑許りの單調な郷里にとち籠つてゐる自分にとつては、想像するさへ力強い誘惑となる。然しそれにも劣らぬ力強い誘惑は、三千哩の空際を貫いて南洋の空からもやつて來るのであつた。平原の夕べ、白芒ゆらぐ蔗園の間に湧立つた霧が、枯葉焚く煙と溶け合つて、ラマランの並木や

椰子の叢立などを暈かしては靜に流れて行く奥から、今日も亦平安に過ぎ去つた事を告げ知らせる木鼓のびえた音色が、蒼々茫々の暮色をゆるがせて簾々と鳴り渡つて來るのは、入相告げる山寺の鐘とは又異つた幽寂の氣分を唆るのである。若夫山鳩の愛らしい鳴音にあげゆく高原の晨、見極め得ぬまで闊達と擴がつた裾野のゆるいスロープを罩めた淡い薄絹のやうな朝霞に、やがて金色の朝暾が照りはへると、地は一面に優婉類を絶した紅の霞に包まれるあの美しさと云ふよりは、それを見やつた折に感得される名狀し難い崇高な氣分は折角瓜哇に遊びながらも、南國美の殿堂である山と云ふものを閑却し敬遠する人達の所詮味ふことの出来ない境地である。

されば東洋の樂園として世界的に著名な瓜哇の自然美も、矢張山によつて象徴されると稱して過當ではなからう。殊にあの雄大な火山美は、どれ程までに瓜哇の景色をして印象深いものたらしめてあらうか。若も讀者が富士、八、淺間、榛名、赤城、日光、那須等の數座の火山に取圍まれた大平

野の中に筑波の一山を残して、其餘は丹澤山塊も秩父の山々も、小野子子持も、其奥から覗いてゐる上越國境の雪の山も、總て掃ひのけた雄大な景色を想像してみたならば、其山々の示す輪割が、願望の大觀を形作る上に於て如何に際立つて重要な役割をつとめて居るものであるかを端的に想像されやう。而もそれはウンガラン山（二〇五〇米）、メラバブー山（三一四五米）、メラツピ山（二九一一米）、ラウー山（三二六九米）、リマン山（二五四三米）、アンヂヤスモロー山（二二八二米）、アルジョナ山（三三四三米）等によつて取圍まれた緑一望の漠々たる曠野の中に、標高僅に八百九十六米のバンダー山を盟主とした小山脈を孤島の如くに取残した中央瓜哇の大平野によつて、想像ならぬ實在のものとして示されて居るのである。其處には奇峰亂立の變化の多い眺めを豫想し得ないかもしれないぬ。然し應揚に延び展がつた裾野の緩いスロープ、悠々迫らざる山の姿、泊り場も知らぬ氣に搖曳する根なし雲、其等がそのすべてを包擁する濃やかな大氣としつくり融合して、こゝに南國

らしい雄渾偉大なる自然美を醸出するのである。夕陽に輝くチークの森から紫匂ふスメロ山（三六七六米）の雄姿を振り仰いだ眺めや、月朧ろに萬傾の野面はほの白い狭霧に霞むだマガラン高原の西にスムビン（三三七一米）シンドロ（三一五一米）の二つ富士、東にメラツピ、メラバブーの双峰が月下に黒く静まりかへつた偉觀も、今猶まざ／＼と追憶の胸に生きてゐる。スラムット山（三四三二米）腹の幽邃な密林や山頂の噴火口の壯觀又はチクライ山（二八二二米）頂から俯瞰した印度洋の描いたやうな長汀曲浦の美しさ、其どれもこれも登山の勞苦を償ふて剩りあるものである。けれども偽り飾らぬ感想を吐露するならば、野に花の少いこと、峰に雪の銀象眼を缺くことは此上もない失望であつた。

碧玉の如くに匂ひやかな南國の蒼穹に、白淨々の一大玉塊を天壇高く造りあげたニューギニアの崇嶺高岳は、麗かな陽光と、華やかな南國の空と劫初以來汚れを知らぬ清く美しい雪の相映によつて、恐らく地上に最も美しさのもの、一つであら

ねばならぬ。曾て世界第一の高峰と傳へられたヘラクレス山の三萬二千七百呎と云ふ標高は、今猶確實性に乏しいといへ、二萬呎前後の高峯は存在してゐるらしく思へるので、エッセレストの秘密の鍵も今方に英人の手によつて開かれむとしてゐる今日、この秘密境の奥深く秘められた靈岳が、先輩諸氏の手によつて、何時の日にか本誌上に紹介さるゝ日があるとしたならば、それはどんなにか嬉しくも誇りヶ間敷ことであらう。(武田信)

○山岳及山湖と國立公園

近時國立公園要望の聲が喧しい。世界の文明國で國立公園を有せないものは、我國を措いて餘り耳にしないさうである。我國は世界の樂園の稱あるが、之を愉快に探勝するの途がないので外人遊客の一樣に意外とする所であるさうだ。國立公園の本質としては、田村博士の説に従へば

- 一、國土を代表するに足る大風景たること
- 二、國土國民を記念するに足る史蹟天然記念物を有すること

三、國民の休養に關する施設を有すること

を理想とするさうであるが、其第三は人工的に何處でも何時でも出来る。第二は郷土特有のものであれば、これは一朝一夕に出来ない。第一は日本國土は外に對しては海國であり内に對しては山岳國である。つまり海か山かに第一の條件を求めねばならぬ。殊に海を航して來る外客に對しては第一の條件を山に求むるのは國際的であらう。勿論瀬戸内海の如き海でもよい。國立公園は外客のみを目當てとするものでなければ、外人本位にしないでよいが、日本國土を代表する大風景としては其第一を山岳、山湖に求めたい。

さうすれば多年山岳趣味を鼓吹した日本山岳會の事業も大に意義あることになる。田村博士が我國に於ける國立公園として最も適當なるものとして列擧して居るのは、富士箱根一帯、日光鹽原一帯、上高地一圓、朝鮮金剛山等を第一流とし、凡て山岳及山湖のグループである。第二流として數えたものの中には松島と瀬戸内海を入れて居る。然かも山岳山湖として、北海道の山岳を背景とす

る大沼公園、秋田、青森兩縣の山湖十和田、上州伊香保棒名赤城一圓、輕井澤淺間一圓、戸隠一帯、信州御嶽、諏訪湖、濱名湖、琵琶湖、霧島一帯を擧げて居る。まるで山岳會員の牙城を衝かれた様である。多年山岳趣味鼓吹に努めた山岳會の意を強うする處である。

アメリカ國立公園の分布も略々主要山岳に沿ふてゐるとうである。英領カナダの國立公園は國內の五大河の水源で風光の雄大なるはアルプス以上であるとうだ。日本の國立公園も山岳山湖を中心又は背景とするであらう。(山本徳三郎)

雜 報

○常念岳の由來

日本北アルプスも年々登山者の多く成るに隨つて、階級の設備が調つて行く、今日では槍ヶ岳を中心とした、上高地から中房までの縦走線が一番能く開けてゐるが、之れは國費を以て拓いた林道であるから當然のことである、之れを縣道に引き直すべく昨年の縣會では其の道路網を議決したが、更に國立公園の候補地となり、田村林學博士は其第二回調査として來月の初旬に踏査する筈であるが、今後如何に此一帯が開發されるが頗る興味ある問題である、極端なる山岳美保護論者から云へば國立公園の計劃を罵倒してゐる。普通の登山家でも常念山脈の登山路は良き過ぎて面白くない、之はアルプスの本町通りであるなぞと評してゐるが、俗流論者から云へば此山頂へ自動車でも飛ばしたい様な事を言ふてゐる、何れにしても時の流れは仕方が無いもので馳ては歐羅巴アルプスの或方面の如くに山上電車やホテルが出来るかも知れない。先年馬場平へアルプス旅館と命名した小屋の出來た時に、ランプを點けるのも妙でないとか云ふ趣味論があつて、小屋の名稱を「槍澤の小舎」と更め山岳家を喜ばして來たが、其後アルプスの前衛たる常念嶽の鞍部には「常念坊」と云ふ小屋が出来たり、今年は

槍ヶ嶽の中腹に「大槍の小屋」及び燕嶽の頂上には「燕小屋」が出来て何れも八月上旬には開業しアルプス本町に相應しい設備である、其の他には二ノ俣や坊主小屋の石室もあり殺生小屋も石室と成る。最早穂高岳の連峰を除くの外は此縦走線は嬉女子でも子供でも平氣で登山が能きる事となつたが、茲にアルプス前衛の奥常念岳から槍ヶ岳への通路として一番の近道は鳥川の一ノ澤口に趣味津々たる原始的の登山路がある、之れを林道にして貰ひ度いと云ふ希望者もあるが、又此儘にして置いて欲しいと言ふ山房家もある。其の要路に當る小屋が「常念坊」であつて、大正七年までは常念へ登る人は稀であつたが、此の小屋が出来て以來は頗る該方面へ廻る者が多くなつた、山小屋の名に「坊」と云ふのは些と可笑しい様であるが夫れに關して一のローマンスがある、常念嶽は年代不明の其の昔、常念と行ふ行者僧が拓いたもので、お隣の槍ヶ嶽を蟠龍上人が拓いたと云ふのと好一對の話柄である、傳説に據ると常念と云ふ坊さんは、嶽の何れの邊にか庵を結んで苦行をした、時々人里へ酒を買ひに出たが、一升徳利を持つて來て、之に二升呉れとか三升呉れとか註文した、酒屋では變な狂坊主とは思つたが、實際酒を注いで見ると、不思議にも一升徳利へ二升の註文の時は二升入り、三升の註文の時は三升入つたと云ふ、之れと似た傳説は各所にあるが、要するに常念と云ふ山の名稱から考へても、其の名の行者が拓いた事だけは、反證の上がらない限りは信すべき傳説である。然うして九千九十八尺の奥常念岳頂上には昔から一の小祠があつた、本造であつて腐朽すると又誰かが存えて安置したのである、然るに數年前、誰の仕業であるか何時の隙

にか其の小祠を大天井嶽の絶頂へ移した者がある、夫れは確に常念嶽に有つたのを持ち運んだものである、然るに一昨年あたり此ら小祠も腐朽して風に吹き飛ばされて了つて跡形もない、其處で僧常念の傳説に因んで小屋の名にした、「常念坊」の關係者は、山靈に敬意を表する標的の小祠が絶滅したのを心もとなく思ひ、今度奥常念の絶頂に之が再建を計り、信濃山岳會幹事牧伊三郎氏と松本市四柱神社々掌百瀬芳隆氏と神祇研究の結果「常念嶽靈神」として之を奉祀する事とし、二十四日四柱神社社務所に於て之が御靈入の式典を修し、新調の小祠と御神體は二十六日常念嶽へ遷し參らせた、此の靈神即ち山の神様であるから、世間一般に山神の祭日とする十七日を卜し、八月十七日を以て山上祭を行ふ筈である。而も常念坊と十七日は奇しき因縁があるので、大正八年八月十七日には同小屋の開業祝を行ひ、昨九年八月十七日には朝香宮鳩彦王殿下が御泊りに相成り、其の際御附官をして「常念坊」の額面をさへ書き賜はつた奇縁の日である、今度も其日を以て新奉祀の靈神第一回祭典を行ふは益々ローマンスが濃厚に成る譯である小祠安置の峰より少しく下つた岩石詰々の處には「御山の水」と云ふのがある、一線の水脈も無い此の山の水の在ると云ふのも不思議であるが、之れは天然の白狀岩があつて、夫れに雲霧の凝結した水が常に湛えるので盛夏の候と雖も絶えた事がない、之れは學問上からも價値のある現象で日本阿アルプスの一ヶ所に之れが在る、北アルプスでは此の常念岳の「御山の水」があるのみ、大正八年に記者が山男として有名なる西穂高村の小林喜作に教へられて發見し、昨年河野齡藏氏に之れを話して、殿下を御案内し、河野

氏が御説明申し上げたら「珍らしい」と御感あつたものである、之れは登山者に取りては救命水であるから、今度案内標を建てざる筈である、尙常念坊の附近には高山植物は豊富ではないが、高山蝶の棲息は豊富で珍種も尠くないので、其の道の研究家は非常に喜んでゐる、最近問題にされて來た蝶ヶ嶽の探險の路を取るのが便利であり、常念嶽に於ける雲關の物體映影現象即ち山入道は他では餘り見られないから、之も山岳家の間には評判にされてゐる、更に面白いのは常念坊では本年から新築の大炬燵を拵えた之は突雨に逢つた登山家は非常に嬉しがるもの一つである、(大正十年七月二十三日、信濃毎日新聞)

○長村角間の岩窟から大發見

アイヌ以前の遺物で考古學上の寶物

小縣郡における有史以前の遺跡遺物其の他を一週日間にわたりて調査研究された鳥井龍藏博士は、十二日午後上田小學校内で其の大要を講演されたが、既記の如く此の程小縣郡長村字角間園有林の天然岩窟から發見された土器の破片は、アイヌ以前のものでさきに徳島縣那賀郡那賀川上流の堅穴岩窟及び越中國米見の同じく堅穴岩窟から發見されたのみで、考古學上人類學上の寶物とも見るべきものでまことに珍とすべく、都合上親しく實地を調査するの暇なきを遺憾とするものである。思ふに他になほ有力なる材料が埋もれてゐるかも知れぬ。また本原村で發見された石棺は長さ六尺幅二尺五寸あり、固有日本人の遺物で、いはゆる彌生式に屬し、これ亦珍重すべきものである。太古の日本人は此の邊に多

數居住せしものであらう。またアイヌ人の墓も多く棲息せしは滋野村方面で、今日まで同方面に發見された無数の女性土偶中には當時の風俗を語るものが頗るおほいが、郡内に棲息したアイヌ人の多くは遊牧を業としたもの、やうである、なほ郡内到的所に石鏡、石棒、半磨製斧等を發見されるが、この石鏡は何れも和田峠附近に產出された黒曜石で、アイヌ人の遺跡とも見るべき地方にはことごとく行き渡つてゐると。(大正十一年九月十五日、上田新聞)

○槍の絶嶺から二高生墜死す

第二高等學校理工科一年五の組原籍千葉縣山武郡日向村推時七〇八若名西二(一九)は十八日日本アルプス槍ヶ嶽頂上より墜落即死したが、届出でに依つて十九日長野縣豊科警察署員檢視のため出張した、届出として何れへ墜落したか不明である(松本電話)

電報を手に學校憂慮

太田山岳部長信州に急行

右に就て第二高等學校を訪ふと、幹事の古川教授安藤生徒監藤助教授は、山岳會の旅行日程と日本アルプスの山岳地圖を擧げて種々協議中であつた、三氏は交々語る『唯今(十九日)信州南安靈郡鳥々局から發信の「若名西二十八日槍ヶ嶽より墜落即死す槍澤小屋二班」と云ふ電報を受つたので、學校では直に協議會を開いて太田山岳部長を取敢ず信州に急行させた。若名の參加した第二班は安田部長以下十三名から組織され、十七日迄に中房温泉に

集合し、五日間の豫定で常念槍ヶ嶽縦走の計畫で、澁羅當日は槍澤小屋に泊る豫定であつたが、或は一日早めて出發し槍の大雲巒で墜落したのではないかと思はれる、尙二十五日出發の第三、四班に對しては學校から注意書を送る豫定である』と、又一班に加はり白馬方面を踏破し、續いて第二班の班長となる筈だつた仙臺市大町五丁目同校理科三年佐々木子之吉君は、第一班の旅行が終ると同時に歸郷發熱の爲氷囊を頭に載せ横臥しながら『第一班の白馬方面の一行は非常に元氣で落伍者も無かつた、尙第一班から第二班に參加した者があつたが、若名君は第二班のみに參加したので、中房温泉に直行したのであるが非常に氣の毒な事である』と悲痛な面持で語つた。(仙臺特電) (大正十一年七月二十日、東京朝日新聞)

○三原山鳴動爆發

伊豆大島の三原山頂より數日來火煙を噴出して居たが、俄然二十九日午前五時頃より十時頃迄數回に亘り鳴動爆發したもので、海上十八里を隔つる房州地方でさへ戸障子に震動を感じ、人心恟々たり。(大正十二年一月三十日)

○樽前山の大爆發

二十一日朝六時五十五分樽前山噴火し降灰あり、噴火の後約十分山鳴りを爲し、更に激しき噴煙あり、附近山野は降灰の爲め霧糊として明かでなく、深く霧の立ち籠つた様である、然うして細やかなる灰は通行人の頭に掛り、八時廿分白帶着の列車は灰に蔽

はれて眞白であつた、明治四十二年以來の大爆發である。(二十一日札幌發電)

樽前山は膽振の國、勇拂、千歲兩郡界に位し、海拔一千十六米突、北海道有數の大火山にして、古來颯々鳴動し、最近には明治四十二年一月より五月に亘り數回爆發あり、山の絶頂に燔解岩がコブの如く新たに生じた、大正六年同十年の兩回にも鳴動があつたが大したものではない、今回の爆發は明治四十二年以來の大鳴動である、附近皆小牧温泉を始め、小糸魚淵多峰社臺白老等の市街地がある。(札幌電話)(大正十二年二月二十二日)

○北海道の駒ヶ岳大爆發

二十七日朝六時駒ヶ嶽又大爆發し、吹雪の爲め噴煙の模様は判らぬが、去る大正八年のものと同様の程度であるらしい、被害程度も今不明である。(札幌電報)(大正十二年二月二十八日)以上三項信濃毎日新聞)

○登山新道

松本小林區署の來年度豫算は九日完了したが、新事業として林道新設延長四萬二千七百廿四間、此經費一萬千四百四十五圓で、全部緊急なもの許りである。右の内登山者の最も喜ぶべき上高地國有林より常念岳頂上に達する記念林道一俣線二千五百間、東天井より常念嶽頂上に至るアルプス大通線又線二千八百間、西穂高村一之澤國有林より常念嶽に通ずる一之澤林道二千六百十間、白骨温泉から上高地へ通ずる記念林道梓川沿道線六千七百五十三間、

上高地國有林より梓川筋國有林に通ずる梓川線二千六百十間以上は今迄の小道を三尺巾の林道と爲すのであるが、其外に野參峠から征經峠に出る林道六千四百十五間を新設し、以て登山者の便宜を圖る筈であるが、林道修繕として全部で十萬三千三百二十五間經費金九千三百六圓を前記新設林道と合すれば實に廿萬六千八百九圓金二萬四千五十一圓の多額に達する。大正十年十一月十一日)

○新に縣道となつた大きな登山路

松本市北松本驛から、今町に出る、巴町道路、松本驛から本町に出る國府町道路、松本船津線、南安曇郡安曇村奈川渡から分岐して岐早縣安房峠に出る路線、松本槍ヶ嶽間路線、前記安房峠から上高地を経て槍ヶ嶽の山頂に至る路線、槍ヶ嶽から東天井燕、有明を経て南安曇郡穂高町に至る日本アルプス縦走線等は、十一日の告示で縣道に編入された。右の内アルプス縦走線は昨年松本小林區署が林道として改鑿すべく計畫したが、豫算の都合で實現されなかつたものであるが登山家には喜ぶべき事である。(大正十一年一月十七日)(以上二項東京日々新聞)

○山の物價

信濃山岳會の調査

梅雨の足も遠のき晴れやかな暑氣が展開されやうとして居る、雨空を眺めて脾肉を歎じて居た山登りの人達の準備も忙がしくなつたであらう、各方面からの望みに依つて今年の山の物價を紹介する事にした、信濃山岳會の調査にかゝるものであつて、物價は

一泊、一足、一本等その各々の單位に依つたものだが、白米は一升、味噌は百匁木炭は一貫目を單位とした。

白馬方面

登山準備所長野縣北安曇郡北坂村四ツ谷白馬館、高山館

△宿料一圓二十錢以上二圓迄 △中食三十錢以上七十錢迄 △辨當二十錢 △人夫二圓 △草鞋十錢 △カンジキ八十錢以上一圓五十錢 △金剛杖三十錢以上五十錢 △白米三十五錢 △味噌七錢

白馬頂上及ヤリ温泉

△二食一泊一圓二十錢 △辨當四十五錢 △毛布損料十錢 △草鞋十二錢 △木炭七十錢 △白米六十錢 △味噌十五錢

針ノ木、烏帽子、高瀬入方面

登山準備所大町、對山館

△宿料一圓八十錢及三圓 △辨當二十五錢 △案内人三圓二十錢 △人夫三圓 △白米三十六錢 △味噌八錢 △草鞋十錢 △カンジキ一圓四十錢 △寫口杖一圓五十錢

燕岳常念方面

有明口（有明温泉）中房温泉（有明温泉有明驛より馬車がある）

△宿料一圓五十錢より三圓 △晝食五十錢 △辨當二十錢 △草鞋九錢 △着莫座三十五錢 △白米三十四錢 △金剛杖三十五錢
中房温泉 △宿料二圓より二圓五十錢 △晝食五十錢より一圓 △

辨當三十錢 △人夫二圓五十錢 △白米四十五錢 △味噌十五錢 △草鞋十錢 △杖六十錢

燕岳小舎

△宿料二圓二十錢 △辨當三十錢 △白米六十錢 △味噌十五錢 △草鞋十三錢

烏川一ノ澤口

登山準備所 穂高驛前角正運送店

△案内人組合西穂高村牧區寺島方 △宿料一圓三十錢 △人夫二圓五十錢 △白米三十九錢 △味噌八錢 △草鞋七錢

常念小舎（一ノ澤口）

△宿料（三食つき）二圓五十錢 △辨當四十錢 △毛布及蒲團損料十錢 △草鞋十二錢 △白米八十五錢 △味噌二十四錢

蝶ヶ岳方面

小倉口（一日市場驛、小倉村役場に山岳會支部あり）

△宿料一圓五十錢 △辨當二十錢 △草鞋六錢 △人夫一圓五十錢 △白米三十三錢 △味噌六錢

大瀧山小舎（小倉口連絡）蝶ヶ嶽を経て常念嶽に及び山通りにて上高地への分岐點

△宿料一圓八十錢 △辨當三十錢 △草鞋八錢 △白米三十五錢

槍、穂高方面

槍澤小舎(飲料浴場等あり)

△宿料(三食附)二圓五十錢△辨當五十錢△草鞋十七錢△白米一圓○五錢△味噌三十錢

大槍小舎

△宿料(右同)二圓八十錢△辨當六十錢△草鞋十八錢△白米一圓十錢△味噌三十錢

殺生小舎(喜作新道中房温泉連絡)

△宿料二圓六十錢△辨當五十錢△草鞋十七錢△白米一圓○五錢△味噌三十錢

烏々口 案内人組合 烏々奥原英男方

△宿料一圓五十錢△晝食六十錢△辨當二十五錢△案内人三圓△人夫二圓六十錢△持子二圓七十錢△金剛杖五十二錢△草鞋十錢

△白米三十五錢△味噌八錢

上高地 (清水屋、五千尺旅舎)

△宿料二圓七十錢△辨當附宿料三圓二十錢△辨當五十錢△案内人三圓△人夫二圓六十錢△草鞋十五錢△杖六十錢△白米七十錢△味噌二十錢

笠岳方面

登山準備所 上賀村蒲田、松下甚助氏(水害後浴舎復活、蒲田より槍への途中小舎新設さる)

△宿料二圓と一圓五十錢△辨當三十錢 案内人三圓以上△人夫

乗鞍岳方面

二圓五十錢△白米四十五錢△味噌十一錢△草鞋十一錢

白骨温泉 (湯木齋藤、柳屋)

△宿料(三食附)一圓六十錢より二圓△辨當四十錢△入夫二圓より二圓五十錢△人夫宿料一圓△草鞋十錢△杖六十錢

藪原口 (藪原郵便局内湯川氏)

△宿料二圓と二圓五十錢△人夫二圓五十錢△草鞋十錢△晝食一圓以内(奈川を経て乗鞍へ通路電信電話の便)

奈川口 (案内人組合奈川村寄合渡にある)

△宿料一圓五十錢△辨當二十五錢△人夫三圓△白米四十五錢△味噌十錢△草鞋十錢△杖三十五錢 莫産四十錢△槍笠三十錢

(黒川渡より番所原に通ずる新登山路あり)

番所原口 (奈川、烏々に連絡す)

△宿料一圓五十錢△辨當三十錢△白米四十五錢△味噌十二錢△人夫二圓八十錢△同二日掛五圓△草鞋十二錢△莫産四十五錢

乗鞍頂上小舎

△宿料二圓五十錢△辨當五十五錢△草鞋十五錢△副食物あり

平湯温泉 (準備所飛騨平湯村山旅館)

△宿料一圓七十錢△辨當二十錢△人夫二圓五十錢△案内人三圓△草鞋十錢△白米五十三錢△杖四十錢

木曾御嶽

王滝口

△宿料一圓六十錢△辨當二十錢△草鞋十錢△金剛杖五十錢と二十五錢△強力二圓七十五錢

黒澤口

△宿料一圓五十錢△辨當二十錢△草鞋十錢△金剛杖三十錢と廿五錢△強力二圓五十錢

西駒ヶ嶽方面

上松口

△宿料二圓内外△辨當三十錢△人夫四圓△白米三十五錢△味噌十錢△草鞋十錢△杖三十錢

伊那口

△宿料一圓五十錢△糞食七十錢△辨當二十錢△人夫二圓△草鞋六錢△杖二十五錢(伊那口及木曾口共に小屋番居り今年から宿泊の設備あり)

東駒ヶ岳方面

美和村口 (案内人組合同村黒河内宮下桂治方)

△宿料一圓△辨當二十錢△人夫三圓△白米三十五錢△味噌十二錢△草鞋八錢△杖三十錢

赤石、鹽見方面

大鹿口 (案内所長野縣下伊那大鹿村赤岳會)

△宿料一圓より三圓△辨當二十錢△人夫二圓五十錢△草鞋九錢より十二錢 白米四十錢△味噌十二錢△杖二十五錢

八ヶ岳方面

夏澤温泉 (硫黄岳へ近き新登山路あり) △宿泊料一圓八十錢位

本澤温泉 (硫黄嶽へ火口壁を攀ちて登る新路あり)

△宿泊料二圓より三圓

唐澤温泉 (主として箕冠、天狗根石嶽へ登山の便)

△宿泊料一圓五十錢△糞食五十錢

澁温泉 (縞枯山横岳方面へ便)

△宿泊料一圓より一圓六十錢△案内人二圓より三圓

小淵澤口 (今年から小淵澤青年會で案内人等の便を計る豫定)

蓼科山横岳方面

巖温泉

△宿泊料一圓五十錢△草鞋八錢△白米三十六錢△案内人二圓五十錢から三圓 (新開の温泉にて瀧の湯から八丁の上にある登山者を迎ふ) (了) (七月東京朝日新聞)

山岳圖書紹介

○スウイス日記

辻村伊助著

著者が千九百十四年(大正三年)の春から夏にかけて、伊太利チロル、スウイス等に遊んだの折の紀行であるが、それもスウイス珠にオーベルランドのグロース・シュレックホルンに登つて、下山

の途中雪崩の爲に負傷した當時を主として記述し、インナトラレーケン附近の病院に入院して、約一ヶ月を過ぎた後、風光明媚なトウイン湖畔のヒルテルフィンゲンに移つて廿日あまりを送り、近い山には夜ごとに淡雪がふり、風につれてがさこそと枕にひびく櫛の葉はうす霜に潤れて、城あとの樞に交る下葉はのこらざ紅葉した」シユビエツに一週間を暮し、九月二十七日、ひとひらの雲もみかず、静に暮れ行く夕空を仰いで、最後にシユビエツベルクの高原に立ち、火のやうに輝くアルペングリニオンを眺め、「夕闇は谷より湧いて、見る間に淡く、美しいミラージュは消えてゆく私は眼を閉ちて静にクラーイエンを聞いた。」と筆を結んでゐる。平易で卒直で、そして美しい魅力と軽い諧謔とに富んだ著者の文章は、豊に人間味が含まれてゐる。膝を崩して談笑する親しきがある會で「山岳」誌上で讀んだ時もそう感じたが、今かく讀酒で立派な一冊の本となつたものを手にして、一氣に讀了して見ると更に其感が深くなるのは嬉しい。菊版二百六十餘頁、項を分つとこと廿二、著者の撮影した二十四枚のコロタイプ圖版と、五萬分一のシユレックホルン群衆地圖とが添えてある。定價四圓五拾錢 横山書店發行、京橋區北横町十一番地紅玉堂書店發賣。

○山岳美

日本アルカウ會編

四六倍版、光澤紙刷本文百八十頁、内地及外國の山岳に關する大小の寫眞版百七十餘、卷末に十八頁の日本山岳索引表を附し、尙ほコロタイプ版十一葉を別綴として添えたれば、彪然たる大冊子も宛として世界山岳の縮圖たる觀があり、よくもこんなに集め

たものだと編輯者の勞に頗る多とするに足るものがある。記事は主として大正十年六月に日本アルカウ會が大坂公會堂に於て山に關する講演會を開いた時の講演筆記で、スキートの話(中山再次郎氏)、日本アルプスの地形と氣象(河野齡藏氏)、針木越え(志村寛氏)、黒部峽谷(木暮理太郎氏)、米國レニア登山(朝輝記太留氏)、マッターホルン(榎谷徹藏氏)、山と宗教(谷本富氏)の外に、アイガー東尾根初登攀談(横有恒氏、ヒマラヤ縱談(石崎光瑤氏)等を加へたものである。定價金參圓。兵庫縣御影町日本アルカウ會發賣。

○二日山の旅

河田 植 著

四六割クローニ製三百九十餘頁。記録の部には陣馬峯、丹澤山塊、三峰山本社ケ丸、日川尾根、大菩薩嶺・小金澤山と源次郎岳、淺間山、奥秩父の山々、西駒ヶ岳縦走等の紀行文あり。關東山彙の鳥瞰と題する項には、多摩北岸、大菩薩連嶺及多摩・桂兩川間、道志山塊、丹澤山塊等の記事あり。中央東線に據る一日二日の山なる章に於て、前記關東山彙の山々を細叙し、東海道線其他に據る一日二日の山なる章に於て、箱根火山彙、筑波山、上毛三山、碓氷峠附近等に就て述べてある。名の如く東京から一日二日の山旅を試みるとする人には好指針と稱す可きである。定價二圓三拾錢。發行所神田錦町自彊館書店。

○會員通信

△拜啓。去る七月二十二日夜飯田町發、六日間の豫定にて、木曾駒ヶ岳より南駒ヶ岳の縦走を試み候。同行は霧の旅會々員河田植

氏にて、此の計畫に付ては、先に伊那小學校長、原才三郎先生、赤穂小學校の本下善雄先生に、一方ならぬ盡力に預り申候。

入夫は内の賞村の室岡信衛と唐木射塚の二名にて、二十三日夜は同村室岡兼太郎氏方にて一泊仕り候。尤も近年駒ヶ岳登山者著しく激増したる由にて、目下村營の旅館が築中にて、八九分程落成致し居り候。

二十四日午前八時出發致し候處、行者岩より將基頭山方面へかけての頂一帶に、雲の蔽ふ處となり候へ共、全き晴天にして心自ら踊り申候。一合目の小黑堂所前を右に、直ちに山徑を辿り、牧場入口より大芹澤を涉りて、小戸原より水乾の急坂を登りつめ三合目野田湯の湯を掬しつゝ下山衆などと相よりて一休仕り候。それより牧場裏門を、針葉樹林帯にゴゼンタチバナ、イハカガミオサバグサ、光蕨など目に觸れつゝ、一時四十分行者岩の岐れ徑に辿り着き、これより緩かな山腹の新路を搦みて、伊那小屋に二時十五分到着致し候。

此處にて二度目のひるめしを終りて出發、途中キバナシヤクナゲ眞盛りにて殊の外の美觀に御座候。農ヶ池への分岐點を右へ馬の背を登り、半雪に埋もれた農ヶ池を俯視しつゝ、遠くは劍ヶ峯を臨て、三ノ澤岳空木岳南駒ヶ岳を望みつゝ、五時三十五分本岳一等三角點の夕陽に立ち申し候眺望須臾にして、北東に中岳を経て劍ヶ峯下の宮川小屋に參り一泊仕り候。小屋は三十名程の客に賑はひ居り、可成り窮屈に枕を並べ候。最も昨夜は六十名程泊りたる山にて、それに比すればまだ樂かと存じ候。物價は飯一椀十錢、汁一椀五錢、宿料五十錢にて別に、鐘詰なども販賣致し居

り候。

二十五日、早朝日の出を見て六時に出發、劍ヶ峯よりの眺望は殊によろしく、南アルプスの山々を初め、北アルプスの諸峰に至るまで一々容易に指摘致され候、近く御嶽鞍など山嶽にはまだまだ多い残雪相見え候、劍ヶ峰より南への下りは、大岩石重疊致し居り足場もなき程の絶壁にて、霧など深き時は危険かとも存じ候。

幸ひ天候は全くの縦走日和と相成り、蜿蜒たる尾根の果てには空木岳南駒ヶ岳の雄姿が、我一行を悦び迎へるかに聳立致し居り候。三ノ澤岳へ分岐する尾根を過ぎてより、暫くゆるやかな斜面には、ミヤマウスユキソウ、ハハコヨモギなど多く相見え、雷鳥の慌しい姿にも接し申し候。九時五分、二七一・一米の尾根を過ぎ深き假松に根まされつゝ二七二・七米の尾根との鞍部(サギダル)に下りて一休致し、十一時三十五分、二七二・七米(サギダルの頭三等三角點)に到着致し候、此の處より空木岳の眺望最も宜しく、二七二・二米の尾根より南へ、二六八〇米に至る尾根は突兀たる隆起を見せて、空木岳北西の鞍部(木曾殿越)に急峻なる度を以つて落ち續き居り、峭然たる山勢は見るからに雄大に御座候。

サギダルの頭より下りて、直ちに一峰の右手木曾側を搦みて時折の霧シヨンを浴びつゝ岩石を攀ぢ假松を傳ひて一時三十五分、二七二・二米の山頂に至り、それより二六八〇米の尾根へは、二時間半程を要して最も容易に縦走致し候も、木曾殿越えへの下りは岫々たる空木岳の山容を眞向にして假松の爲に可成り難儀致し候。倉皇露營地を求め候處、木曾側の方遙かに森林の谷子など水に近

く有りげに見え候間、花崗岩のガレを三四十米程も下り候處幸ひ豊富なる水を得候へば露營の荷を解き申し候。

二十六日黎明に起き出でて七時三十分出發の頃より、濃霧雨々へも交えて益々激しく相成り候、水谷越より空木岳の登りにかかり候處木谷側より吹き荒む霧に身は、登路もなき優松の中に忽ち濡れ鼠と相成り、あるひは岩根に、優松に身を委ねて、果しもなき霧の底に重然たる巨岩を遠近に變遷致しつつ九時三十五分山頂に着き候も、霧の爲に豫期したる何もの眺望にも接し得ず、空しく南駒ヶ岳指し出發致候、吹き暮る雰霧の中に影の如き一行の姿を追ひつつ、途中岩壁に火を焚きて一休致したるのみにて、十二時四十五分南駒ヶ岳山頂を極め候。

これより最初の豫定（越百山を経て途中一泊念丈ヶ岳より鳥飼子に至り高遠原に下る）を變更いたし、奥田切川を下るべく南駒ヶ岳を南をに稍々下りて、尾根を真東に外れ草地の急斜面をアイノ澤の上流に下り參り候處、溪谷は徐に狭りて岩石峭ひに早や小澗の連続と相成り、岸は東解に迂りて歩行容易ならず候も三時最初の合流點に着き申し候、兩岸の絕壁は益々急峻と相成り、脚下の溪谷は崩壊せる大雪溪を以つて亂雜に埋められ實に一大壯觀に御座候、それとても澗の右岸に左岸に進路を得、岸壁をへづり雪溪下を滑りて辛くも通過致し、雨の小歇みを幸ひ溪谷に露營仕り候。

二十七日、七時三十分出發、昨日の名残りの霧遙かに低迷致し居り候も天候よろしく、昨日にも増して險なる雪溪と澗の幾つかに遭遇致し候、時には山腹深く迂曲など致して本流に合する近き

處の左岸に山路を發見致し、午後一時十分無事七久保村に下山致し候、當日所用の爲東穂村に一泊致し翌日歸京仕り候。

(石川孟範)

△拜啓、今日山岳十六年一號落手、今夕歸つて瞥見しました。歐洲の山登りの後なので殊に面白いと思つて見ました。

辻村さんも御歸朝の由、いろ／＼スキスの近況御聴きの事と存じます。

小生の結論は溪流と森林殊に前者は日本の方がいい様に思ひます。黒部の様な深さと力強さとはスキスにあるてせうか、大井川もさうです。

今年も御出かけになりましたか。どうも私は一向日本の事も考へないのですが、山の事になると變にホームシックになつてしまじみと日本の山の事を考へますがおかしなものです、今頃日本にゐると御宅を夜襲して夜半迄話し込むのですがここではそれも出来ません。モンブランの寫真をながめております。

天氣の所爲か案外いいのが澤山出来ました、一つ二つ御目にかけます。

モンブランの感想は氷の塊の雄大さ、まわりの山の尖つた内に一人ゆう然として高くひかへてゐる美しさ。殊にその雪は他の山よりも際立つて眞白いのでほんとにモン、ブランの名がふさわしいと思はせます。登山は天氣さへよければ何の危険もありません唯いかにも骨の折れる山です。ガイドも「ベニール」だと云つておられます。しかしシャモニーの谷、その町、更には上サヴォイの町などが見えるので（伊太利のクールマイヤーの方は今少し山深い

すが)深さは足りません、一寸葦華岳(針木の)邊の様な里近さを
 覺えました。しかし何と云つてもあの谷の王です。昨年ジュネー
 ヅから遠くそのアルペングリーニオンをながめてゐた時から夢想し
 てゐたのが以外に速く實現したのはうれしい事でした。外人の山
 登りはいかにもロジカルです。平生運動してない人は、先づ山の
 下で運動をして一山のぼり、更に一休みして又やると云ふ風です
 私も運動不足を覺えてゐましたので、モンブランを日ざし乍らつ
 いた翌日はメール、ド、グラス見物、その翌日(七月廿日)ブレバ
 ン(二五〇〇)にのぼり、モンブランを谷の彼方最近く眺め、廿
 一日は休養、八月一日にプユエ(三、一〇〇)にのぼり、二日休、
 三日、二日かぐりの計畫でメール、ド、グラスをのぼり、エグイ
 ュ、ドン、モアン(三、五〇〇)の下に一泊翌日の登山は雨で駄目、
 五日はフレジエール、(二、〇〇〇弱)にさん歩。六日からのぼり初
 め、初日午後三時頃グラン、シュレの小舎(三一〇〇)に一泊、翌
 日の朝一時半から十時迄かゝつて頂上に行き、かへりは別途を採
 つて六時頃谷にかへりました。随分念を入れたものです。が御座
 あまり疲れませんでした。單身でガイド二人の間にはさまつて行
 くといふので、大へん早く歩けるのでいつも外人を抜いてやりま
 した。しかし未だ腕力が足りない機に感じました。例ばエグイユ、
 ド、ドルウの如きは往復十三時間引きりなしの岩のぼりと綱渡り
 だそうですから、こいつは少々腕をきたへておく必要がある様で
 す。

兎に角高い丈けに里には近くても大物に對する手ごわさが感ぜ
 られました。それ丈け頂上に立つた時の感じはビュニアで悦しい

ものがありません。その日は晴れていて曾遊のユングフラウやモ
 ン、セルヴァン、アベニンの山見えましたが、ひどい風で、ア
 レトの雪をとばし、丸でふきとばされそらで(アレトの上にアル
 ベンストツクをつくのが風に流れて困難でした)、頂上には十五分
 と居たゞまれません。昨年のおのなだれは頂上には無干係
 です。厚い靴下二枚の上にゲートル、シャツやスウェーター三枚
 位かさねて、厚い毛の手袋と頭巾でも突きはしのげません、少
 下のレフージでシャパンバンをのんでやりました。

人夫は老人のいゝ奴でした。モンブランは百五回目だと云つて
 おりました。シャモニーにもいゝのがゐる様です、二三人に遭ひ
 ました、矢張り日本式に手紙でエンゲージニ来る英人がある様
 です、(先日御送りした規約附屬の貨金表は改正前のものです、例
 ばモンブランはガイド一六〇法)又障があつたら少しやさしいロ
 ツク、クライミングもやつて見度いと思ひます、しかし氷河渡りも
 随分面白いです、片手で樂にアルペンストツクを使つてステツブ
 を切るガイドの力にはおそれ入ります。

曉の景と前夜の日の入りは又となく美事でした、それと四〇〇
 〇米をこえて大分息苦しくなつて(ねむいのも半分)ひどい坂をの
 ぼり(五時半頃)切つて、測候所に一休みして手すりにもたれて
 見た景(寫眞のものです)は、ほんとに印象深いものでした、空の
 色も又なくきれいです。

きれいに思出すまゝ書きちらしました、皆様によく御傳
 へを願はず、筆不精になつて一向手紙を書きません、今日は山岳
 のせいで日本氣分になつて書きました、氣が丸で日本の秋の様で

いゝ月です、

数日中一寸ゼネバに行きますすそしたらモンブランが見られると
楽しんでおります(一九二一、九、十三日 巴里にて 日高信六郎)
△拜啓、今廿九日午前無事歸京致候、早速第二信申上候。

七月廿四日朝赤谷の案内人夫を歸し、改めて長者原にて案内人
夫を求め候處、赤谷よりも更に難かしく、はじめ二十才前後の若
者荷なければ行くと申したるを其生意氣な態度に憤慨し、夕刻い
よゝゝ人夫なしで出發と定め候。しかるに流石田舎の人は正直に
て折柄來合はせたる狐渡世のもの家に病人あれば地神山迄ならば
お伴せんと申出て、小生も心中に助かつたと喜び候。其夜は小玉
川温泉(又は飯豊温泉)に泊。當温泉は二軒あり、一は小生等の
宿したる長者原の藤田長左衛門氏所有、他は宇小玉川の人の所有
に候共に土用の丑の日より開場の由、家も未だ假小屋にて、湯槽
も岩石の間天然そのまゝなるは小生等にとつて痛快なりしも、の
みの襲來には閉口致候。

廿五日。午前七時出發。温泉直前より山足をこえ湯澤右股なる
モンガク澤に出て、左岸カラ澤を溯つて尾根に達す、この尾根は
地神山より丸森をへて北東に下る所謂丸森の峯と稱するものにし
て切開は八九年前林區の査定にて切りあてたばかりなる由。ナラ
ブナ、リヤウブ、陣竹等のヤブ相當に猛烈なれど、兎も角尾根ら
りき尾根なれば、間違ふるもなく、人間二人は根氣よく鉋をふる
ひ切りあげゆき候、午後三時丸森に達したるに、この平は一めんの
密叢にてそのまゝ押し上がる事困難なれば、漸く右に切れて朝日
又澤の支流の上部ヒナタ澤水源雪溪に下り野營、人夫は直ちに里

に歸す。

二十六日。天候不良の爲午前中滞在仕候、午後一時晴れ間を見
て出發、丸森のくびれをモンガクノ澤上部の雪溪に越え、草地、竹
ヤブ、雪溪等を横切りつゝ山稜の東側に沿ひて上り、午後三時二
十分地神山(上俗屬の地神と稱す)三角點の直南に出て候。その
とゞ二〇二四米のイシコロミ澤の頭とそのアレト及二つ峰支峰を
望みて方向を確かめ得。なほ小一時間歩み一六九二米の三角點の
山稜を派出する俗稱「ヤゾウの泊り」を通過、二つ峰支峰分岐點附
近越後側に野營。

二十七日。夕來天候不良昨と同じく暗れ間を見て午前九時出發
したるに再び霧雨の風となる、總じて地神山よりイシコロミ澤の
頭までは歩きやすく到る所好妍當地あり、十時五十分イシコロミ
澤の頭着、この山はカイラギ澤に面して美事なるアレト三四條を
下り、遠望北望共に中々美事に候、いゝ山稜も北側は稍險峻、大日
岳よりもまさる。南側は陣竹の小ヤブ一めんにしげり下るに却つ
て都合よく候いし。この山上下の間は風雨最もはげしく、同行の
小林君先頭にておくれたる小生ら二人を待つ間冷氣にふるへたる
など惨事なり、しかれど午後十二時四十分鳥帽子岳(二〇一七米)
にて中食の頃漸く曇れ、蘇生の思ひを致候。

エボシ岳は頭三つばかりあり、いづれも山勢比較的のび、その
上に陣竹と偲松茂りて相當通過に時間を要し候。之より約一時間
にしてアカソノ澤のとつつきに出で、一先づ生地は通過し切りた
りと安心致候。されど天候も安心ならず、東京に残したる仕事の
事も氣にかゝり候間、享樂は二の次にして頓に急ぎ、御西に向ひ

霧の中を道探しつゝ、みても午後六時半、飯豊山本社に安着、其夜は、果してシケの氣味となり、將に山頂吹き通しの所とて小屋の鳴る音面白くも候ひし。

二十八日。豫定よりも日數三日も多くなりし爲、天候不良の爲、第三案たる實川より大日岳又は牛首山尾根にとりつき、裏川より下の溪谷の旅は見合せ、飯豊山の本通りたる會津一ノ戸口を下り候、草履塚にて白衣の參詣者の一群に會ひたるが今度の小旅にて人らしき人に會ひたる初めに候ひし、會津口も相當峻峻中々遠きも登路開けたる爲小生等には銀座通りの如く、午後一時頃御澤に下り、それよりぶらぶら歩いて、午後十時四分、山都發の上野直通列車にて歸り候。その日も一日ふられ殊に一ノ戸より以後は道路宛然泥沼の如く、レインコート、レインマントを二重にきたものゝすつかり通り候まづ里でふられて運よかりしと喜び候。

飯豊山塊は總じて人の信ずる程ヤブ猛烈なるに非ず、登路さへよければ、山上は残雪を行程の半ば以上ふみつゝ香氣に歩きまはるを得、又飯豊山、御西位見て山塊全體を評價するはちと早計なるやに思はれ候、大日の一群、石コロミ澤の頭、一六〇〇米程度のイブリサシ岳及側尾根には中々突充たる處も有之候、概して言へば、この山塊は下がわるく上がよき山にて、溪谷は、飯豊川、實川の立派なるを有し候、残雪は高頭氏のいはるゝ程美しからず、尤もそれは時期に關係ありや又遠望上の事なりやは、小生疑問と致候但し、残雪の量は其絕對量はとも北アルプスの白馬立山銀附近に見る程の大量ならずとも、その比較的質重と幅さは遙かに飛騨山脈をしのぎ候、さりながら山低き故か二回目に、ア

カソフ澤の取付より飯豊迄歩き候所著しく消えたりしは亦一露に候ひき、(沼井鍛太郎)

△前略、木暮、楨兩先輩方々の南アルプス縦走との事に南懸しきの心抑へ難く、忙中の閑を作りて、五日例の夜行で飯田町を立つて、六日富士見驛下車、入笠山を越えて小黒川を下り戸臺泊り、七日戸臺川ヤブ澤を溯つて北澤峠から北澤小舎場に皆様の豪遊振りを見たり八日仙丈岳から胸岳をかけ、仙丈に諸岳兄の名刺を懐しき、數年前の小生の古き名刺を其内に見出し申候。九日胸岳六合目石室を立つて、去年と反對に胸ヶ岳より銀岳第二高峰から出來得る限り國境尾根近く辿つて第一高峰に達しネキゴヤ(△二六〇六米)の尾根より中ノ川の上流に向て垂れ下つてゐる枝尾根を東北に下つて、中ノ川本流と大岩澤との合流點の稍や下流に出で中ノ川を下りて大平牧場を横切り、釜無川と黒川との落合に着し、釜無川を下りて午後九時廿五分富士見驛着、同五十五分發終列車にて歸京仕候。

此行程は銀岳研究旅行として最も面白く且收穫多き行程の様存せられ候。前後及側面より山貌を望見致し、其上山麓を洗ふ澤を踏み山頂を極むるものに候へば、銀岳の複雑なる山貌を充分に窺ひ得て、近來になき異常の愉快と緊張とを味ひ申候。(大正十一年八月十日中條常七)

△二十日夜上野發、沓掛に下車、朝霧に包まれるゝ落葉松の新緑を賞しつゝ、疑問懸に出て澁間山に登り申候。霧晴れてより無類の好晴にて、残雪に輝く四圍の山々を飽きくゝする程眺め申候。白砂、岩菅、四阿のあたりまだく夥しき雪に候。北アルプス、八

ツ岳、秩父などいつ見ても立派な姿に候。歸途は湯ノ平を経て小詰に下り申候。去る三月活動の際落下せし岩石中々大きいのに一驚を喫し申候久し振りの登山にて思ひの外、疲労を感じ、燒の廻るには少し早しと悲觀致候。(五月二十四日 藤島敏男)

△三日島原迄参りまして一泊。四日新道を温泉岳温泉に参り小地獄温泉に一泊。夕方一時間許りを利用して高岩山に登つて眺望しました。五日小地獄から池の原に行き、妙見岳、普賢岳をかけて歸りに一寸野岳に寄り路し、灌木林をイバラにひつかゝれながら眞直ぐに池の原に下り、小地獄に戻り、すぐその足で西海岸の小濱温泉に下り、八時半頃宿につきました。

山上のつゝじはすでに遅う御座いましたが、尊賢の新緑は美事でした、しかし温泉場としては北海道の登別等に比してつまらないと存じました。山は問題外です。とにかく九州の山は全く山の内でないと思ひます。今日小濱を立つて歸福します。(大正十二年六月六日竹内亮)

會報

○第二十回小集會記事

大正十一年十一月五日午後一時半より麴町區清水谷皆香園に於て、高野幹事司會者として開催、左の講演ありたり。

雪の日本アルプス撮影旅行

附山岳寫眞の話

當日の來會者は宮田金一郎、神宮德壽、冠松次郎、山口成一、川口敏郎、堀龜雄、岸偉一、野口末延、神谷恭、平田恒太郎、岩永信雄、山崎金次郎、本多友司、書上喜太郎、沼井鐵太郎、別宮貞俊、磯貝藤太郎、伊藤朝太郎、松井幹雄、木村靈吉、高野藤藏、武田久吉、高頭仁兵衛の廿三氏にして、他に會員外の出席者二名ありき。

田頭 凱 夫氏

○第廿一回小集會記事

大正十二年二月四日午後二時より麴町區紀尾井皆香園に於て開催、左の講演ありたり。司會者辻村幹事。

大蛇尾オホサビ

高山植物栽培に就て

沼井鐵太郎氏
辻村 伊助氏

沼井氏は下野國那須郡蛇尾川の上流大蛇尾を溯りて大蛇尾山に達する目的にて、前後二回其谷を溯上したるも、最初は不成功に終り、二回目は困難なる溯上に成功せしも、日數の制限よりして大蛇尾山に達する能はず、途中より引返したることを述べられ、其岩壁と瀑布との寫眞數十葉を示して來會者の感興を唆れり。

辻村氏講演は第六回小集會(大正八年十一月)に發表せられし以後の研究報告にして、先づ千五百年代以降歐洲にて出版せられし高山植物に關する圖書の概説、栽培の歴史諸著名高山植物園設立の年代及び現在に於る栽培の發達の程度とその園藝上に於る地位に就て略述し、本論として主として

高山植物種子の發芽に關する研究、發芽促進法、種子個性の影響、貯藏に關する諸問題等に就て一時間半講演せられたり。

當日來會されたる會員は堀龜雄、書上喜太郎、飯塚篤之助、武井鈴男、松井幹雄、加藤義夫、新庄球生、小瀬孫作、三輪勳、幡谷政尙、田澤昌介、永井博、別宮貞俊、炭木猪之吉、内田素一、沼井鐵太郎、野口末延、磯貝義太郎、山崎金次郎、横山光太郎、本多友司、松本善一、木村鑛吉、鳥谷幡山、太田孝之、伊藤朝太郎、吉田直吉、前川滿壽雄、冠松次郎、高田達也、舟田三郎、島山悌成、近藤茂吉、武田久吉、六鷄保、木暮理太郎、高頭仁兵衛、藤島敏男、辻村伊助の三十九氏にして、會員外の來會者七名ありたり。

○事務所の移轉に就て

(高頭仁兵衛)

今回事務所を越後へ移すことに致しました、會の事情を御承知になりません會員の諸彦は、さぞかし御不審に思召すことでありませうし、またそ

れが當然の事と存じますから、差支のありません程度の内容を赤裸々に申し上げます、それには本會の成立しました経歴を陳べます必要がありますまするやうですから、只今手元に材料がありません(東京に居りまして)ので詳細に申し上げますも出来ませんし、多少の思ひ違ひもありませうが筋道だけざつと記載致します。

明治三十八年の初夏に、拙編「日本嶽志」を出版しやうと存じまして上京致しました、それから小島鳥水兄を御訪問致しまして、ウオーター・ウエストンといふ英國の御方が飛驒山系の諸山に登攀された事や、武田、高野、梅澤、河田(現今の山川氏)の諸彦が「博物の友」といふ雜誌を御發行になつて居て、盛んに山川を御跋涉なさる事や、城數馬さんが舊の御大名様方と山草會を御開きになつて居る事などを承りまして、田舎もの、私は甚だ失禮の申方ではありまするが、世の中には随分好事者であるものだとい驚致しました、その上に當時は長野中學校教諭であられた志村鳥嶺兄の撮影された白馬の寫眞を見せられました、その頃

の私は富士山、苗場山、八海山、彌彦山、筑波山、妙義山位しか登つて居りませんでしたし、危嶮や植物や残雪などの一切を富士山萬能と心得て居る人達より、すこし進んで居る位の知識さへありませんでしたし、現に大平先生ですら私が苗場と八海に行きまする時に、「あなた（仁兵衛）は富士山に登られたから苗場や八海などは容易でせう」と申されました、勿論その時には先生は富士山へは登つて居られませんでした、便に申上げますが當時の交通機關は、汽車が新潟まで行く信越本線と、米原から岐れて富士までの北陸本線とでありまして、中央東線は新宿から八王子と、長野から松本までは開通して居りましたが、岩越線も中央西線も富山と直江津間も、其他の輕便鐵道の一切も出來ては居りませんでした、地圖と申しても輯製二十萬分一圖が普通以上でありまして、地質調査所の二十萬分一地形地質詳圖も、重なる山岳地方の部分は出版されて居りませんでしたし、専門以外の人々にはそんな地圖のあることさへ知れませんでした、陸地測量部の地圖も軍事上の必要の或

る地方の一部分は、二萬分一圖が少く出版されて居りましたが、今日旅行家に最大重視されて居ます五萬分一圖は、未だ只の一枚すら刊行されて居りませんでした、でありますから志村兄の白馬大雪溪の寫眞を見ました時には、躍り上らんばかりに喜びもし驚きも致しました、此寫眞は當時の理學士小川琢治博士も「日本にこんな處がありませんか」と感嘆されました、その頃は今日から未だ二昔にもなりません、天地月籠雲泥霄壤の相違となつて參りました。

咄しが大分脱線しましたが、その折に小島兄が「此春ウエストン氏が歸國せらるゝので送別會を開いた席で、ウエストン氏が日本でも早く山岳會を設立してはドウカと申されたが、君（仁兵衛）や「博物の友」の幹部や城さんなど、機會を見て山岳會を設立して見やうてはないか」と申されました、これが現時の日本山岳會を成します最初の動機でありまして、その時に小島兄は三十一歳で私は二十九歳だかと記憶致して居ります。

間もなく高野、梅澤、河田の三子が小島兄の御

書狀を持たれて、私の寓居して居りました本郷西片町十番地にノ三十九號を御訪問くだされ、其後に武田兄も御見えになりました、山岳會設立の機運が漸く頭を擡げて參りました、それから數回の會見を重ねまして、兎に角假に山岳會を設立して年々三回の雜誌を發行して見ると豫定しまして、

會則や經費其他設計の原案を武田兄が作らるゝことになりました、それから會員の募集や原稿の蒐集や發起人などの大體を假定致しまして、私は村民に懇請されました戰時中だけ尙武會長を奉職いたしました關係上から、「日本山嶽志」の山岳各記の豐前の彦山までと、山岳表と編纂主旨と凡例の全部の校正を終りまして、他は友人に一任して十月に歸國致しました、それから經費の出處に就きまして武田兄と二三の書狀で協議致して居りますと、或晩に城さんから唐突に電報が參りまして、明日行くから在宅して居よといふ意味でありました、それで城さんとの初對面もすましましていろいろ協議致しました、かくて山岳會の設立主旨書（小島兄執筆）會則（武田兄原案）會員の募集法、原

稿集輯や發起人や經費の出處や雜誌名など悉皆決定致しまして、明年即ち明治二十九年四月に第壹年第一號を刊行致しまする準備が全く成りました。

雜誌の命名には最初「雲表」と云ふ説がありましたが、雲表と申しますると高山と云ふ意味はありまするが、當時の會則第二條「本會ハ山岳及ビ山岳ニ隸屬セル森林湖沼溪流高原瀑布植物岩石天象等ニ關スル科學文學藝術其ノ他一切ヲ研究スルヲ以テ目的トナシ」云々の廣い意味が缺けて面白くありません、結局小島兄に雜誌名の選定を一任にして次回の會を開きました、小島兄は地學協會の「地學雜誌」地質學會の「地質雜誌」史學會の「史學雜誌」の例に倣ひまして「山岳雜誌」としては如何かと申されましたが、たしか武田兄だと存じましたが雜誌の二字を省略してはと云ふ御説が出まして一同が賛成致しました、それから小島兄は嶽字は普通で平凡で畫が多いし御嶽講などと混同さるゝやうに思はれて可厭だから、古字の岳を採用してはと申されたので是も異論がありませんでし

た。

一方では發起人各自が原稿を集めて小島兄が編輯を擔任され、一方では城さんが三越の前の室町の城さんの法律事務所(當時は日本の二字を冠しませんでした)の事務所を置かれて印刷を進行されました、第壹年第一號の刊行されたので明治三十九年四月五日でありまして、その巻頭に「山岳會設立の主旨書」が同じ日付で載つて居ますから、先年の三十八年に主旨書が出来たなど申したことが矛盾するやうでもありますが、私の「日本山嶽志」は三十九年の二月五日に發行されて居りまして、それに挿入致しました小冊子「山岳會主意書規則書」には明に三十八年と記されて居りまして、現にその折の残本を芝高輪南町三〇健全社で發賣致して居ります、雜誌の表紙の繪は武田兄の御盡力で武内桂舟畫伯の御意匠御揮毫になりました、その際の發起人一同は雜誌が一冊も賣れずとも年々三回は刊行すると云ふ決心でありまして、所謂年壯氣鋭天を衝くの意氣込みがあつたのかも知れません。

明治四十一年に城さんが京城の控訴院長に御轉任になりましたので、事務所を牛込區新小川町の城さんの御親父の所へ移しまして參年壹號を出版致しました、この年五月十七日に第一回大會を東京地學協會の樓上に開催致しました來會者が百名許でした、四十二年の一月から事務所を高野幹事が御引受になりましたして横濱に移轉致しまして本會の活動期に入りました、大會は年一回でもあり講演に時間がかゝり會員各自が充分に話を仕合ふに不都合といふ理由から、山岳會の有志晚餐會を開くこととなりまして其第一會を山岳に縁のある九段の富士見軒で一月十六日に開きました。

陸地測量部では完全な地形圖を作製せられんとして、幾十年來の測量が浸々として進行致しまして三角點基石を諸國に樹立されまして、其目的の主要なる各高山峻峰の頂上に運搬致しましたが、その頃の天候が頗る不良でありましたので、各山岳地方の人々の間に名山の靈地を汚すから山神が怒つて風雨が多いのだと云ふ説が可なり勢力があるやうになりました、隨て土地の人民が測量部員

が山地に入り込むのを喜ばないので作業進行上頗る困難の場合が生じて來ました、測量部の當局でも種々なる方法を以て緩和策を講じられ、その一として比較的山岳地方に出入する有識階級にも、山岳地方住民の迷信を覺醒せしめんとのこと、

地學雜誌、地質學雜誌その他二三の専門雜誌であつて且つ營利的でないものへ地圖と要覽を寄贈されることになりまして、「山岳」もその選擇の榮を得まして二枚だけ圖幅名を指定せよとの事でありました、高野幹事から私に圖幅の御協議がありました、その時は既に五萬分の一圖が可なり（九州中國の殆んど全部は出版になつて居りましたが日本アルプス地方は一枚も刊行されて居ません四二二號に目錄が附してあります）刊行されて居ましたから、「五萬小林（成るべくば三色）五萬富士山」の意味で返答致しました、小林圖幅は霧島火山群の載つて居ます處で三色刷は高價だから如何かと想ひましたが、勝手の注文を出しましたのに意外にも其品が下附になりました、後に地學協會の小林さんから承りましたに、地學協會と地質學會で

は注文なしに頂戴しましたが何れも一色刷の二萬の富士山と五萬の小田原とかが下付になりましたさうです、この下付された地圖は雜誌四年一號に添えまして高野兄の所から會員へ配付されました。

四十三年は雜誌が刊行しましてから五周年に當りまするので、紀念として平常の二倍大の冊子を作りましてコレが特別號の最初でありました、この年から寫眞の精巧を極めました「高山深谷」の第一輯の印畫を作りまして以下引き續きまして拾輯まで出しました、四十五年即ち大正元年には明治大帝が御崩去になりました、それが登山期でありましたので諸彦の御遠慮から旅行を御見合せになりましたものと見えまして、此時から原稿の不足が生じました、それに山岳界の第一人者でありまして本會編輯者の達筆家の小島兄が米國へ御轉任になりました、本會成立の大達者の武田兄は英國へ御出になりましたので、高野幹事の御奮闘御努力ぶりは誠に目醒しいものでありました、十年一日の如くに御精勵くだされたので、本會の

盛大になりましたのは他の諸幹事の御活動も勿論多大ではありましたが、主として高野幹事の御勤勞の賜であります、こゝに會員一同に代りまして謹んで御禮を申上げて置きます。

大正九年に高野幹事が御病氣で登山や執務を醫者から嚴禁されました、其春に評議員を開まして事務所を武田幹事の所へ移しました、武田幹事は既住十數年の御經驗に鑒みられました、例の明晰な御頭腦から割り出されまして執務されましたから會が頗る緊張して參りました、梅澤幹事や木暮幹事も御盡力下されまして會員の名簿の新調や會員章の引換を斷行致しました、それから事務員を雇入るゝ事になりました、梅澤幹事の御盡力で近盛某を雇入れましたが百日程で辭職されました、間もなく武田幹事が北海道の札幌農科大學へ御出になる事になりました、事務員は田部幹事の御周旋で中川某を雇入まして、武田幹事の御宅の一室を借りまして執務を繼續致しました、一ヶ年程を過ぎますると中川君が辭職致しました、それから私の辱知でありました先輩の志村鳥嶺兄を煩すこ

とに致しまして、事務所を下目黒に移しましたが田舎ではあり鳥嶺兄の處では御手不足でもあり鳥嶺兄が幹事に居られなかつた關係から、會の事務が豫期いたしました程に進行致しませんので、私の知人の水野君から事務を執つて戴くことに決しまして千駄木町の私の妹の宅に、私が一年の半分以上は妹に厄介になつて居りますから、大正十一年の四月に事務所をこの貧弱な小宅に移しました私は神田の丸善の隣家で帽屋の田村政七は電話もあり人手も比較的に多いし會員でもありました私の配下でもありますから、此處へ事務所を移しては如何かと武田幹事に謀りましたが、田村の處では時期によりますると非常に難關いたしました大切の書類などの紛失の恐れもありますると云ふ理由から、千駄木町に致しました、水野君は毎日半日づゝ通勤されまして熱心に執務されましたがドウモ高野幹事や武田幹事の時のやうには參りませんでした、そこで幹事會や評議員會の席上や個人の會合の折りなどに、金錢で自由に雇入れることの出来る事務員でさへ斯様に困難であるから、

まして幹部の人など容易に求めることの出来兼ねやうから、舊幹事が東京に健在する中に新らしい幹事を續々と御任務を願つて、會の内容や執務のことを十二分に飲込んで戴かなくては、會の發達を見ることに到底出来ないと言ふことになりました。其時が幹事の任期が満了いたしましたので其意を持ちまして七人の新幹事を選出しました。新任幹事の方からは新任ばかりでは一向に事情が知れぬから舊幹事の内から二名だけ留任して呉れと言ふ注文が出ましたので、本年二月四日の評議員會で審議の結果、發起人を代表いたしました私が舊幹事を代表いたしました木暮君が就任することとなりまして、更に現任幹事と評議員の連絡上常任議員二人を選定致しました、これも發起人を代表しまして高野君が舊幹事を代表いたしました辻本君が御就任になりました。併し從來の實際の事務は高野、武田、梅澤の三幹事が御周旋下されて居りましたので、私と木暮君は新幹事の御方より幾分の内容は存じて居りますが、實際の事務は新任幹事と大差がありませんので、舊幹事の御方

々が御差支で御出席がないと、本年の大會の時のやうな失態を演じまして、會員の御方々に申譯のない次第であります、只今では年一回の大會と年四回の小集會を開いて居りますし、雜誌の刊行も早く回復致さうと存じて居りますし、追々成るべく會員諸賢の御満足になりますやうに致したいと心懸けて居りますから、善惡に係はず御氣付の點は御留意なく思ふ存分を編輯なり會計なり事務所へなり御申聞けを願ひます。

會の成立と経歴は大略申上げましたが、其間には頗る興味のありまする樂屋噺が續出いたしました、性來あまり記憶が良くありません上に、初老を越しまして數年を経ました私には殆んど悉く忘却いたしました。

扱て眼目の事務所問題に入ります、六七年以前の私は相當の財産がありましたから、其時の六七年以後には東京に住宅を作りまして過半を東京で暮す意でありました、ですから他の幹事諸氏も私が上京致しましたらば事務所を移しまして、私が庶務をやりました雑務を事務員に執らせると云

ふ根底がありました、それが經濟界の變動の時に私は可なり貧乏いたしました、友人の勸告に従ひまして家政の一切を擧げて後繼者へ引渡しまして事實上の隱居となりました、従ひまして私は若干の手當金で旅行なり登山費用に致しまする位でありまして、高價の土地に相當な事務所らしい家屋を建てるなど云ふ事は到底望むことが出来なくなりました、それでも盡せるだけは盡して見まして稍々纏まりかけましたが、私の母が中風になりまして身體が自由になりません、その附添を致しする必要から家内が上京することが出来なくなりました、一方では私と妹が同居致して居ることの出来ない事情も湧きましたので、留守居のない無責任の事務所を置く譯には参りませんので、新舊幹事の諸賢ともいろ／＼協議を致しましたが名案がありませぬ、結局本年二月四日の評議員會で事務を分擔致しまして、普通事務は私の國元の隱居所で取扱ふことに決定致しました。

元來は私も高野、武田、梅澤三發起人同様に只今は表面の名義を去りまして（裏面では東京へも

可なり多く居りますから充分に會の爲に努力は致しまするが）一意専心に自分の理想と致しまする山や川の記事を整理しましたり、年表の編輯出版を致しまして幾分なりとも會の基本金を積まうと存じまするが、雜誌最初から發行兼編輯者の名義を出しましたのと、舊幹事中にありまして隱居など致しまする時間の餘裕のある人は誰れもありませんので、私の辭任は採用になりません、それから事務所も東京在住の會員の御方で御依頼をすれば御引受け下さると云ふやうな噂も承つて居りますが、幹部諸氏殊に發起人の方に私が事務所を去る位ならば寧ろ解散しては如何など、云ふ極端の説など出まするので、兎に角やれるまでやつて見まする意で及ばずながら事務所を御引き受け致しましたのであります、會員諸賢の御指示御指導の程を希望致してやみませぬ次第であります。

最後に申し上げますが凡そ如何なる趣味の會合でありまして、經濟上の問題が主要でありますことは今更に申上るまでもありません、その會の

解散説などの出ますのは會費や寄附金では會を繼續することが困難と云ふ所から生じますか、別報會計報告の示します通りに本會は雜誌選刊の費用にも會を繼續致しまする經費にも不足を告げては居りません、たゞ適當な場所と家屋と事務員を兼ねた留守居番がありますれば至極結構と存じまする、會員諸彦の御努力によりまして一日も早く右様の希望を實現致したいと考へて居ります。

會費拂込に對する注意

別項「事務所の移轉に就て」中に陳ぶるが如く、本會事務所移轉の爲、從來事務所にて取扱來りたる會計事務は、都合上當分左記に於て取扱ふこととなりたるを以て、會費其他の拂込は勿論、本會會計に關する一切の事項は、すべて同所宛にて照會あらんことを望む。

東京市芝區高輪南町三〇

日本山岳會會計取扱所

振替口座東京四八二九番

○會務報告

大正十一年十一月五日午前十時半、麴町區清水谷皆香園に於て幹事會を開き、左記の事項に付き協議す。

一、幹事改選の件 一、入會申込者詮衡

(出席幹事)武田、高頭、梅澤、田部、本養(委任)

此日入會を許可せられたる者左の如し。

河崎專太郎、山田應水、富山燈電氣局(代表者染井康邦)、齋庄

球生、幡谷政尚、東京大林區署(代表者武井鈴男)。

大正十二年二月四日午前十時より、麴町清水谷

皆香園に於て評議員會を開き、左記の件を審議す。

一、新幹事推薦の件

幹事改選に就ては、前號に詳配せるを以て之を略す。終て入會申込者の詮衡を行ひ、左記八名入會を許可せらる。

本庄徳藏、田中晴眞、小原健、岸部勢三、立花保太郎、岩本武助、吉田次男、内田晃一郎。

評議員會の決議

郎氏

アルカウ趣味 九年十號

○交換及寄贈圖書目

會 報 ○退會者○本會規則拔萃

之

地質學雜誌 第二十九卷第三百四十九號—第三百五十一號
歷史地理□第四十卷第五號

山嶽(大和山岳會)大正十一年分第一回
地學雜誌 第三十四年第四百七號—第四百八號

山とスキ― 第二十一號第二十二號
ツ―リスト 第十卷第六號

史蹟名勝天然紀念物 第五卷第十一、十二號
(歐文圖書は英文欄に掲載せり)

○本會規則拔萃 (大正十年九月改正)

第二條 本會は山岳に關する研究をなすを以て目的とす

第三條 本會は第二條の主旨に基き機關雜誌「山岳」を發行す、又時宜により別に臨時又は定時の出版物を發刊することあるべし

第五條 本會は會長を裁かず幹事若干名を置き一切の會務を處理せしむ

第六條 本會は別に評議員を置き重要なる會務に參與せしむ

第十條 本會員を別ちて正會員及び名譽會員とす、名譽會員は幹事會の決議によりて推薦せらるるものとす

第十一條 正會員たらんと欲する者は會員三名の紹介を以つて住所姓名、年齢及び職業を記したる申込書を事務所に送附すべし、但つ紹介者の一名は本會評議員たるを要す(入會申込用紙は事務所に備付けあり)

第十二條 入會の許否は幹事會の決議によるものとす

第十三條 入會許可の通知に接したる者は直に入會金五圓に會費

を添へ拂込まるべし

第十四條 正會員は會費年金參圓を毎年二月末日迄に納付す可きものとす、三月一日以後の納付者は特別取扱手数料として金五拾錢を附加して拂込まる可く、尙ほ三月末日迄に納付せざる者は之を除名す可し(以下略)

現任幹事 (九名)

- 藤島 敬男 冠 松次郎 木暮理太郎 横 有 恒
- 六 鷯 保 高田 達也 高頭仁兵衛 鳥山 梯成
- 辻村 伊助

評議員 (二十名)

- 城 敷 馬(在朝鮮) 小鳥久太(在桑港) 武田 久吉
- 梅澤 親光 高野 鷹藏 近藤 茂吉 中村清太郎
- 三枝 守博 辻本 満丸 田部 重治 山 川 默
- 及び現任幹事九名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行数のこと

一、一、c、r、() 等は一字割宛とし行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、厚稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所
尙編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり(スケッチは複製の際誤記脱漏の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大きに調製あらんことを望む)

大正十二年八月八日印刷
大正十二年八月十日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三番十地

日本山岳會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂



On the Cultivation of Alpine Plants Mr. I. Tsujimura.
 Ôssbidani Mr. T. Numai.
 Thirty-nine members and seven guests were present,

CLUB LIBRARY.

The following publications have been added to the Club Library since October, 1922 :—

- Trail and Timberline, Nos. 49-51.
 Alpina, Jahrg. 30, Nr. 9-11.
 Prairie Club Bulletin, Nos. 119-121.
 La Montagne, 18^{me} Année, Nos. 154, 155.
 Bird Lore, Vol. XXIV, Nos. 5, 6.
 L'algerie Illustrée, 13^e Année num. 4.
 Club Alpino Italiano, Vol. XLI, Nos. 7, 8.
 Bolletino della Sezione Fiorentina del C.A.I., Anno XIII, Nos. 3, 4.
 Geographical Journal, Vol. LX, Nos. 4, 5.
 Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya, Any. XXXII, Nu'm. 330, 331.
 Natural History, Vol. XXII, Nos. 5, 6.
 L'écho des Alpes 58^{me} Année, No. 10.
 Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 16, No. 94.
 Alpine Journal, Vol. 23, No. 3.
-

2 SUMMARIES OF THE PRINCIPAL ARTICLES IN THE JAPANESE PART

- 3rd. day: From Kamaishi to Miyako by a steamboat.
4th. and 5th. day: Spent at Miyako.
6th. day: From Miyako along the Heigawa to Kawai.
7th. day: Went southward along the Ogunigawa from Tokusa, spent a night at Etsunagi.
8th. day: Stayed at Etsunagi, as unfortunately rained.
9th. day: Started there at 7.35 a.m. for an ascent of Hayachine along the Yakushigawa. 1.29 p.m. at the junction of the Tônomachi-route, which was followed to the top of Hayachine through mist. The summit was scaled at 2.40 p.m., but no views owing to the clouds and fog. Left the summit at 3.40 p.m., arrived at Kadoma at 7 p.m. by Kadoma Route.
10th. day: Started Kadoma at 8.20 a.m. over Kudzakaitôge for Morioka, where he reached at 6 p.m.

EXPLANATION OF THE PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing page.

- (8) Flower-field of Mt. Shirané. Photo by Mr. K. Nonogaki.
(24) Tateyama in Winter. (Bessan viewed from Murodô).
Photo by Mr. K. Ito.
(40) Aiguilles de Chamonix from le Brévent. Phot by Mr. S. Hidaka.
(56) Mt. Sumbing (Java) Photo by Mr. N. Takeda.
(80) Mt. Sindolo (Java) Photo by Mr. N. Takepa.

THE TWENTIETH ORDINARY MEETING.

The twentieth ordinary meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, Kôjimachiku, on Nov. 5, 1922, presided by Mr. T. Takano. The following lecture was given:—

Mountain Trip with a Camera in the Japanese Alps in Winter. Mr. G. Dentô
Twenty-three members and two guests were present.

THE TWENTY-FIRST ORDINARY MEETING

The meeting was held at the usual place on February 4th., 1923, presided by Mr. I. Tsujimura. The following lectures were given:—

SUMMARIES OF THE PRINCIPAL ARTICLES IN THE JAPANESE PART.

1. On the Kannagawa Valley, by H. Yoshioka.

The author gives a detailed account of the Kannagawa Valley, where his trip was made in the latter part of June, 1921, by following route.

Arriving at Onishimachi from Chichibu over Sugitôge, he got to the village of Hamadaira by Jikkokutôge-Kaidô along the River Kanna via Minamiishi, thence with a guide went over Mikunitôge, on the boundary between Provinces of Musashi, Shinano, and Kôdzuke, to the hamlet of Adzusayama in Shinano.

2. An Ascent of Mt. Aljona in Java, by N. Takeda.

An account of the author's ascent of Mt. Aljona (3332m.) one of the most famous volcanoes in East Java, made in spring, 1920.

On March 25th, he started Malan for Surabaya by rail. Left the train at Scorshio, whence westward along the Surabaya Road, got to a small village on the foot of the mountain, where the first night was spent.

Next day he left the village with a guide, went on over the slope, made an easy ascent as far as the 2500 m. spot, where they spent a night in a hut of natives who were gathering sulphur.

Third day at three o'clock in the morning they started the hut to the summit, which was scaled by sunrise, the view was most magnificent. Left the top at 9 a.m., came back to the previous night quarter at one o'clock in the afternoon.

3. Mountain Trip in Kitakami District, by T. Numai.

The tour was made by the author as follows:—

1st. day, (Aug. 4., 1920): Having changed to the Iwaki-Light Tram at Hanamaki Station (Tôhoku-Line), arrived at Sennintôge Station, thence to Ôhashimura over Sennintôge, reached Hiyamamura at 8 p.m. over Tsuchikuratôge.

2nd. day: Climbed up Goyôsan, but no view was obtained owing to the mist. Down to Ômatsu, hence by light tram to Kamaishi.

NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Office: Shinsaimura-Fukazawa, Santôgôri, Niigataken.
Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô. (30, Takanawa-
Minamichô, Shibaku, Tôkyô.)

List of the Officers (Honorary).

General Secretary.

N. Takatô, Esq.

Recording Secretary.

T. Rokuwu, Esq.

Foreign Secretary.

A. Maki, Esq.

Treasurer.

T. Toriyama, Esq.

Librarian.

T. Takata, Esq.

Editors.

T. Fujishima, Esq. M. Kamuri, Esq. R. Kogure, Esq. I. Tsujimura, Esq.

Council.

Hon. K. Jô.

K. Kojima, Esq.

S. Kondô, Esq.

S. Nakamura, Esq.

M. Saigusa, Esq.

T. Takano, Esq.

Dr. H. Takeda.

Prof. J. Tanabe.

Dr. M. Tsujimoto.

Prof. O. Umezawa.

S. Yamakawa, Esq.

and nine present officers.

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it into the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Any ordinary member, on payment of the amount not less than 100 yen at a time, shall be exempted thereafter from the annual subscription, so long as he remains enrolled as a member.

Members are required, on their admission into the Club, to pay 5 yen as entrance fee. They ought to pay an annual subscription of 3 yen by the end of February. Members who fails to do so must pay an additional sum of 50 sen as special charge. Any member who does not pay his dues even in this way by the end of March is to be expelled. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of 2 Yen for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries requiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vol. XVII

July 1923

No. 1

(English Supplement)

CONTENTS

	PAGE
SUMMARIES OF THE PRINCIPAL ARTICLES IN THE JAPANESE PART	
1. On the Kannagawa Valley, by Mr. W. Yoshioka	1
2. An Ascent of Mt. Aljona in Java, by Mr. N. Takeda	1
3. Mountain Trip in Kitakami District, by Mr. T. Numai	1
EXPLANATIONS OF THE PLATES IN THE JAPANESE PART	2
THE TWENTIETH ORDINARY MEETING	2
THE TWENTY-FIRST ORDINARY MEETING	3
CLUB LIBRARY	3

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVII

1923

No.1